
パッション・アイデンティティー

瀬見尾津風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パッション・アイデンティティー

【Nコード】

N9481N

【作者名】

瀬見尾津凧

【あらすじ】

男子高校生の美音は出会い系で一人の青年と出会う。その彼が親友である夕樹の兄だと知った美音は、青年に恋せずにはいられなくなる。夕樹には何も知らせず、彼との関係が続けていくとする美音だが、夕樹の女装趣味が周囲にばれてしまったことで事情が変わり始め。それぞれの登場人物が葛藤し、成長していく様を描く青春群像劇。第4章に入りました。

1・美音 ? (前書き)

1 / 16 誤字等修正。

1・美音？

何もかも知った振りで、全てを悟ったような顔をして、なるようになると身を任せて、この世界で生きていけると思った。

ただ、それが甘い考えであることに気づいている自分がいることも知っていた。人波を縫うように困難を交わしていけると、信じていたかった。逃げていた。楽な方法を選んで、他人と違う生き方に身を任せていた。

この狭い世界で、まだ何も知らない幼い自分を、自覚するのが怖かった。

けど、その生き方こそが自分の人生だとも、頭の隅で思っていた。自分らしくある為なら、それも良かったんだ。

「ミオ、だな？」

顔を上げると、おれの考えていたよりもマシな顔をした青年がそこにいた。

「よるじさん？」

「ああ」

相手を確認したおれはにっこり笑ってみせてから携帯電話を閉じる。

「行こう」

夜の街は平日にも関わらず賑わっていた。派手な格好の女性とか、スーツ姿のおじさんとか、疲れ切った顔の学生とか。

「場所は？」

「好きにして。おれ、付いていくから」

上目遣いで相手を見上げる。よるじはこの街に慣れているのかいないのか、よく分からない調子で歩き出した。

今夜の相手は久しぶりに若かった。メールのやりとりによると、彼は大学四年生。就職活動真っ最中の学生らしい。写メをもらわな

かったのであまり期待はしていなかったが、実物は背が高くてそこそのイケメン。性格が良ければ両性に愛されそうな人だった。

駅から離れていくと、代わりに電飾が眩しくなってきた。まだ日が沈んで二時間ほどしか経っていないのに、街はすっかり夜の顔だ。

「あ、一回五千円ね」

「は？」

よるじがおれに丸い目を向ける。おれはいつものように言い返した。

「冗談だよ。別にお金はくれなくても良いよ」

くれるって言うならもうけど、と相手を見れば、よるじは前方に目を向けて言う。

「考えとく」

おれは少しだけ笑った。大学生ならそんなにお金は持っていないはずだから、期待はしない。

「無理しなくて良いよ」

そう声をかけると、よるじは苦笑した。

「生意気だな。もっと大人しい奴かと思ってた」

「おれは猫被ってるだけだよ」

よるじが言葉を失う。身体はどちらかというと受け身だが、性格はSに近い。おれは人を困らせたり、いじめるのが好きだった。

やがて左へ角を曲がると、先ほどとは違った雰囲気のところへ来た。ホテル街だ。

よるじは奥へと進み、おれはその後を追う。

他と比べて目立たない建物の前でよるじが立ち止まる。おれがその隣へ立つのを確認して中へ入る。

前に何回か来たことのあるホテルだった。家が近いからと自宅へ誘う男が大半だが、その他は八割の確率でここだった。

いつものように受付を相手に任せて、その後すぐに部屋へ向かう。部屋へ着くと、この先は二択だ。シャワーを浴びるか、浴びずにやるか。

後者は未だに好きじゃない。おれは妙に神経質で、そのままベッドで抱かれると不快なのだ。とはいえ主導権は相手に渡してある。さあ、今夜の相手はどちらがお好みだろう？

「先にシャワー浴びていいぞ」

と、よるじがおれを振り向いた。

「いいの？」

おれが聞き返すと、彼は無表情に頷く。

「ああ」

やった。おれはすぐさま、よるじに背を向けて風呂場へ向かう。

温めのシャワーを浴びながら、おれは無意識に考える。

こんなことを始めてまる一年。最初は小遣い稼ぎが目的だったけれど、最近はむしろ出会いが目的だ。いろんな男に抱かれるのは構わないが、そろそろ決まった人とだけ付き合いたい。

理想は背が高くて男らしく体格の良い人、それでいて温厚で優しく可愛い人。普段はおれがいじめるんだけど、ベッドの上ではそれが逆転するのだ。

現実にはそんな人と出会ったことなど一度もない。今夜の彼も背は高いがひよろひよろに痩せている。おれは草食系よりも肉食系が好きなのに。

身体を綺麗にして部屋へ戻ると、入れ違いでよるじがシャワーを浴びた。まあ、顔は悪くないから良いか。おれの彼氏候補に挙げておこう。

ベッドで待っていたおれを、よるじは乱暴に押し倒した。

それから身体中を愛撫して、舐めて、口づけて、外見とは裏腹に強い力でおれを屈服させてくれた。思わず、きゅんときた。

「他の奴は、金くれるのか？」

おれの中を犯しながら、彼が問う。

「くれる人もいるし、くれない人もいる」

「もらった金は、どうするんだ？」

と、荒い息をつく。

「……あんまり使わない」

彼がおれから抜け出して、己を放出する。

「そうか」

よるじはしばらくおれを見下ろすと、また発情した。

汚いことをしていると自分では思わないけれど、汚いおれを夕樹ゆいつきは知らない。

「高内さん、大丈夫かな」

「ただの突き指だろ？ 別に心配することないって」

「うん……」

高校に入って同じクラスで、最初の席替えで隣になった夕樹は心身共に中学生みたいだった。平均より低い身長に痩せた身体に幼い顔。クラスの中でも可愛い男子として女子から密かにもてはやされていることを、こいつは知らない。

「つつーかさ、ユイ」

「ん、何？」

まだ主の戻ってこない席を見つめたままの夕樹へ、おれは言う。

「高内のこと、好きなの？」

「え？ えっ？」

夕樹は顔を真っ赤にして照れた。

「そそ、そんなこと、あるはずな、あれ、ないはずある？ ちがうな、あれ？ えっと、だから」

分かりやすく反応する夕樹、言葉すらまともに言えないほどの動揺っぷりだ。

おれは意地悪に笑って彼の頭に手を置いた。

「分かったから落ち着け。あんな奴のどこが良いか分からんけど、応援するぜ」

「だっ、だからミオ、違うんだって」

と、必死に否定する夕樹だが、おれは構わずに頭をぽんぽんと撫

でた。

「ま、お似合いなんじゃね？」

「っ……み、美音^{みおん}！」

高内というのは男勝りな女子のことで、誰に対しても変わらない強気な態度が特徴的な奴だった。彼女とは中学が一緒だったのである程度のことは知っているし、悪口だつて言い合う仲だ。

「あいつはやめた方が良いと思うけどなあ」

二期期に入って間もなかった。夕樹はまだ高内のことをよく知らない。

「何で？」

「あいつ……」

言おうかどうか迷って、おれは結局、夕樹の耳元に口を寄せた。

「中学ん時、レズビアンじゃないかって噂だっただぜ」

夕樹はびつくりした顔から傷ついたような顔へ変える。

「そんなの、ただの噂でしょ。高内さんが可哀相だよ」

「ははっ。まあ、信じるか信じないかはお前の勝手だ」

すると教室に噂の彼女が戻ってきた。夕樹がぱっと視線を逸らし、おれを見る。

「……分かりやすっ」

夕樹に聞こえないくらい小さな声で、おれはそう呟いた。

高内は付き添ってくれていた友人に笑顔でいくつか言葉をかけると、すぐに席へ着く。

中学の時から変わらないショートカットが彼女をボーイッシュに見せる。おれは、ほら、男に抱かれて金をもらうような悪ガキだから、彼女がレズビアンでも構わない。むしろ仲間意識が芽生えそうで、ちよつと期待する。類は友を呼ぶくらいだし。

夕樹はどうやら信じたくないようだけど、その一方でどこか悩んでもいる様子だ。

授業開始のチャイムが鳴るのに構わず、おれは言った。

「そっぴや、お前ん家に泊まるっていう話、どーなった？」

「ああ、許可はもらえたよ。夏休みの間にきつちり掃除もしたし、いつ来てくれたって大丈夫」

と、夕樹がにっこり笑う。

「そうか。じゃあ、また後で」

「うん」

数学の教師に注意される前に、おれは自分の席へ着いた。

彼氏候補は今のところ、三人ほどいる。最年長は32歳の営業マンで、最年少はこの前のよるじ。彼らの他にもっと良い人がいるかもしれないから、とりあえずはキープだ。

帰りの電車でそんなことをぼーっと考えていることを、隣に立つ夕樹は知らない。知らなくて良い、と思う。

夕樹は綺麗だ。純粹で無垢で、小さな悩みにしか直面したことの無いような奴だ。おれの性指向やおれのしていることは、卒業するまで秘密が良い。

2・夜司？

大学四年にもなると、授業よりも就職活動の方に時間を割く。時代が求めているような気がして環境経済学なるものを専攻した俺は、今更後悔していた。道を誤った。

何故なら、内定がもらえないのだ。どの企業も俺を必要とはしてないらしい。

「お前だけじゃないだろーよ」

と、友人のサクマは言うが、そんな言葉は救いにならない。

「いつそのこと、東大受けりゃよかった」

「しね」

俺のぼやきにすかさず舌を出すサクマ。

「受験勉強をサボった罰だ」

と、俺は机に項垂れる。

「就活もサボっちまえ」

「嫌だ」

いくら就職難の時代とはいえ、これは死活問題である。俺があの家を出て優雅な一人暮らしをするためにも、必要不可欠なのだ。

「学歴って大事だよな……ああ、こんな中途半端な大学で妥協するんじゃなかった」

「中途半端とか思ってるの、お前くらいだぞ？」

「……そうか」

顔を上げてサクマの顔を見る。

「で？」

「オレも落ちました。これで十二連敗。もうやる気でねえ」

「だよなあ」

乾いた笑いを返し、俺はまた項垂れる。

「履歴書書くのにも飽きてきた」

頬にひんやり冷たい感触が伝って、しばしその冷たさを味わう。

「コピーしたいよな、特に左側」
「同意」

自分の名前と生年月日、住所や学歴を書くだけの左側。どの企業を受けるにしても共通する部分。

「内定さえもらえれば、安心して遊べるのにな」
「うん」

何十枚もの履歴書を心込めて書いたって、負けてしまえばただのゴミだ。無意味になって、捨てられる。資源を無駄にしている、立派な環境破壊だ。

サクマが大きな溜め息をついて、俺は反対に欠伸を漏らした。

「よし、帰ろう」
と、顔を上げる。

「え、何、愚痴りに来ただけ？」
目を丸くするサクマへ俺は言った。

「あと暇つぶし。家にいたってつまらねえんだもん」

「お前も不真面目だなあ」

「ありがとう。じゃあな、サクマ」

と、俺は席を立った。

「夜司！^{やつかさ}可愛い妹がいるんだから、今日くらいまっすぐ帰れよ！」
背中にかけられた声に、俺は彼を振り向いて言う。

「うつせえ、ロリコン」

サクマはただ笑っていた。

一人で外食する気もなかったので素直に帰宅すると、玄関に見慣れない靴があった。誰か客でもいるらしい。

珍しいと思いながら靴を脱ぐ。

居間へ向かうと、夕食の支度をしていた母が先に俺を見つけた。

「おかえりなさい」

「うん、ただいま」

食卓から離れたところで弟とその友人と思われる男子が妹と戯れ

ていた。ちらつと見ただけで目を逸らし、俺は母へ問う。

「誰、あれ」

「夕樹ゆいつきのクラスメイトよ。ほら、前に友達泊めても良い？　ってあの子が聞いてきたでしょ？」

と、母。いつもはだらしない格好なのに、今日はうつすらと化粧している。

「ふうん」

特に興味がなかったので自分の部屋に行こうと思う。夕飯まであと十分はかかりそうだし。つつーか、六歳の妹相手に何をあんなにはしゃいでるんだか。

呆れた視線を向けてぼーっとしていると、弟の友人の顔が見えた。
「……」

幼い弟と違って大人びていて、悪戯っぽい切れ長の奥二重、整った鼻と口。見たことがある。

はっとした俺は相手に見られる前に居間を後にした。

あれは、確かこの前の……あの時は夜だったから顔なんてそんなに意識しなかったけれど、確かあいつも高校生で……そんな馬鹿な自室に入るなり鞆を放り投げ、携帯電話を取り出す俺。

すぐにメールの受信箱を開いて、あいつと会った日がいっただったか探し出す。……一週間前だった。高校生はまだ夏休みだと言っていた、そう、八月の終わりの。

「嘘だ」

出会い系で知り合って一晩を共にした少年が、俺の弟のクラスメイトだと？

携帯電話を閉じ、ベッドに放り投げる。

「嘘だ……」

信じられなかった。信じなくなかった。ならば、信じなければいい。相手のことなど俺は全く覚えていなくて、初対面を装うのだ。きつと相手も俺のことなど覚えては……一週間しか経っていないのに、忘れている方が不自然か。

床に座り込んで、天井を見上げる。

部屋から出るのをやめようか。夕飯は食べてきたと言えば良いし、風呂だって別に……あれ、確かあいつ、十八歳って言ってなかったか？ 俺の弟は十六だぞ。まさか、嘘ついたのか？

いろんなことが疑心を生み、頭の中がもやもやする。

そうして静寂の中に鳴り響く腹の音。……どうしてこんな日に限って腹が空くのだろう。自分が憎い。

「お前、何で兄貴のこと名前で呼んでんの？」

「え、何でだろ？ 母さんがいつもやつちゃんって呼ぶから、かな」
扉の外から聞こえてくる声は、やがて俺を呼んだ。

「やつちゃん、ご飯出来たよ」

扉を開ける習慣がないのが、せめてもの幸い。

「ああ、すぐ行く」

と、いつものように返してしまつて後悔。時間だけでもずらせば、あいつと顔を合わせないで済んだかもしれないのに。

「行こう、ミオ」

弟が友人を連れて離れていく。ミオ、はあいつと全く同じ名前だ。ハンドルネームかと思つたが、実名らしい。……これでもう、信じない根拠が無くなった。やつぱりあいつだ、間違いない。

変装して行こうかと考えたが、やめた。相手を欺くことは出来ても、家族に怪しまれる。

仕方なく覚悟を決めて部屋を出た。

食卓ではいつも帰りの遅い父の席にあいつが座り、賑やかな食事が開かれていた。

なるべく顔を合わせないように気をつけながら、俺は炊飯器の横に置かれた自分の茶碗にご飯をよそる。

それから自分の席へ着こうとして、一瞬戸惑った。どこに座つても顔を見られてしまうじゃないか、当たり前だ、ここは俺の家だ。溜め息で誤魔化して席へ着く。

「やつちゃん、こつち僕の友だちのたきぐちみおん滝口美音くん」

と、弟が俺の方を見て隣の彼を紹介する。

美音は俺の顔を見て無表情になると、すぐににっこり笑った。

「初めまして」

「あ、ああ」

驚いた。相手の方から初対面を装ってくれるだなんて。

「で、さっき話した僕のお兄ちゃん」

と、俺を紹介する。

「夜司、です」

伺うように俺が名乗る。

それから話題はまた他愛のない話になって、俺は一人、もくもくと食事を始めた。

とりあえず明日は昼前まで寝ていよう。美音がいつまでこの家にいるかは分からないけれど、明日は土曜日だから二人でどこか遊びにでも行くはずだ。俺は最低限の言葉しか交わさないし、不必要に顔を合わせないぞ。

心に決めて、さっさと食事を終える。

茶碗と箸、コップを台所の流しに持って行くと、弟の口からとんでもない言葉が飛び出した。

「今日は一緒にお風呂入るんだよね、ミオ」

思わず手を滑らせて茶碗を落としてしまう。弟たちがこちらを見たが、幸い茶碗には傷一つ無かったので会話は続行された。

「あんまり騒がしくしちゃダメよ」

と、母。

俺は平静を装って茶碗を流しに置くと、逃げるようにその場を離れた。廊下へ出て、自室へ向かう。

風呂場で、裸で、一緒でって……あ、あいつ、大丈夫かな。まさか弟に変なことを教える気じゃ。

そこまで考えて、俺は溜め息をつく。

考えすぎだ。二人は単に仲の良い友人同士だろうし、美音だって年上相手に身体を売るだけで同い年には興味がないはずだ。…

…否、そうであって欲しい。

自室の扉を開けながら、俺は密かに祈る。せめて美音が、初対面を続けてくれますように。何事ありませんように。

3・美音 ? (前書き)

1 / 16 一部修正。

3・美音？

びっくりした。夕樹ゆいつきの兄貴が、まさかよるじだったとは。聞くところによると、「夜」を「司」どるで「夜司」やつかきらしい。読みを変えたら、よるじ。

相手もどうやらおれに気づいていたようだけど、結局二度と顔を合わせることはなかった。まあ、それが一番良い方法だ。だって相手はおれを抱いた人だし、おれが売春してることも知っている。で、おれは相手がゲイだってことを知っている。家族も知らないであろう秘密を、おれだけが知っているのだ。なんて優越感。

とはいえ、おれは猫被りだから、友人の家庭を壊すような真似はしない。でも……。

『これって運命じゃない？』

『ただの偶然だろ、もう連絡してくるな』

『冷たいなあ、よるじってば。ねえ、今度会って話そうよ』

『断る』

返ってきたメールはことごとくおれを拒否していた。『今度はお金いらないから。おれ、よるじに会いたい』と送信したら、ついに返信が途絶えてしまった。

溜め息について、携帯電話を閉じる。

夕樹から聞いた話だと、いじめ甲斐のありそうな素敵なお兄さんだった。それがよるじだと分かったら、そりゃあ接近せずにはいられないだろう。

そうして猫被りのおれは考えた。

「なあ、ユイ。またお前ん家行っても良い？」

「え？ 別に構わないけど」

と、夕樹は何も知らずに受け入れる。

「朝子ちゃんとまた遊びたいんだ。おれ、下に弟妹いないから新鮮

で」

「ああ、そうだね。朝子もきつと喜ぶよ」

おれの言葉にまんまと騙される夕樹。ありがとう。

「つてことは、また泊まるの？」

「んー、別にどっちでも良いけど」

とりあえずよるじに会えれば良い。あっちは嫌がるかもしれないけど、おれは会いたいんだから仕方ない。

「あ、あと、お前の兄貴とも話してみたいんだ」

と、おれは言うだけ言ってみた。

「あー、それはどうかな。やっちゃん、結構気まぐれな人だから…

…」

まあ、そうだろうな。

「そうか、無理そうならいいや」

「あ、じゃあ、話だけはしておくよ」

と、言ってくれる夕樹。夕樹は素直で優しいから好きだ。付き合っ
つていて気が楽、とも言っ。

「さんきゅ」

と、おれは笑った。

その日の放課後、帰り支度をしているおれに高内が声をかけてきた。

「滝口、あんた数学好きだったわよね？」

「は？」

おれが顔を上げると、高内が偉そうに言っ。

「ノート、貸しなさい」

今日は久しぶりに夕樹と軽く遊んで帰るつもりだったので、おれは言っ。

「嫌だ」

と、席を立って、おれに近づこうにも高内がいてどぎまぎしている夕樹の方へ向かう。

「明日には返すって。今日は気分悪くて授業出られなかったのよ」
おれが立ち止まって振り返ると、彼女は言った。

「いーしゃが」

と、教室の隅でこちらをちらちらと見ている女子を指さす。塚田^{つか}依紗^{だいら}、仲の良い人からは「いーしゃ」と呼ばれる消極的な大人しい子だ。

「お前じゃないなら貸すよ」

「あ、ひどーい」

鞆から数学のノートを取り出し、高内へ手渡す。

「まあ、いいや。ありがとね、滝口」

と、笑顔を浮かべて夕樹の目の前を通り過ぎていく。酷だ。無意識だろうから責められないが、夕樹の視線は彼女に釘付けである。

「行こうぜ、ユイ」

肩に手をやって彼の意識をこちらへ向ける。

「あ、ああ、うん」

はっとした夕樹は鞆を持ち直すと、小さく溜め息をついた。

下駄箱へ向かう最中に夕樹は言う。

「塚田さんの鞆って、可愛いよね」

「じゃらじゃらいっぱい付いてるだけじゃね？」

と、おれは言う。彼女の鞆にはフリルの付いたリボンのストラップとか、マスコットキャラクターのぬいぐるみなどがいくつかつり下げられていた。

「うん、でも僕たち男子は、あんなにいっぱい付けないでしょ？」

夕樹の言いたいことが分からなかった。代わりに分かったことを、口にしてみる。

「そっぴいとお前、ぬいぐるみ好きだったな」

「っ、す、好きっていうか……た、溜まつただけだよ。ゲーセンとかで、ほら」

と、慌てる夕樹。彼の部屋に泊まった時、ベッドの枕元に愛らしいぬいぐるみがいくつも置かれていた。妹にあげれば喜びそうなも

のを何故か枕元に置くという、おれにはちょっと理解できないことである。

「別に良いよ、言い訳しなくて」

「あ、う……」

夕樹は口を閉じて俯いた。恥ずかしいのか、少し顔が赤い様子だ。「あれがないと眠れないんだろ？」

「眠れるよっ」

と、声を荒げる。彼は見た目に似合って中身も幼い。ぬいぐるみと一緒に眠る女子はよく聞くが、男子でもいるなんて驚きだ。だが、夕樹は可愛いので良しとする。

下駄箱で靴を履き替え、外へ出た。

残暑の名残の温い風に沿って道を歩く。二人ともあまり喋る方ではないから、帰り道で互いに口を閉じているのはよくあることだった。

その時におれは今日あった嫌なことが、良かったこととか、夜のことを考えたりする。

こういう時、夕樹が何を考えているのか、おれは知らない。高内のことを考えているかもしれないし、勉強のことかもしれない。家族のことや、妹のことかも分からない。

「ねえ、ミオ」

と、夕樹がふいに口を開いた。おれは視線だけ向ける。

「やっぱり僕って、変かな？」

どうやら先ほどの話の続きらしい。

「変だけど、特に悪いことじゃないと思うぜ」

自分のことも含めてそう返すと、夕樹は言う。

「昔から、すごく好きなんだよね。だからつい、手に届くところに置きたくて」

「……ふうん」

「ミオは、そういうのってない？ 昔から変えられない趣味、みたいな」

と、夕樹はおれを見た。

ないと答えると嘘になるから、おれは答えに迷った。男に抱かれたい願望が幼い頃からあったなんて、言えない。けれど、おれは夕樹がぬいぐるみに対して愛着を持つように、男を好きになる自分に愛着を持っていた。

「あると言えば、ある。けど、無いと言えば無いな」

曖昧な答えで誤魔化した。冗談っぽく笑ってみせて、おれは言う。「つつーか、そんなの誰だって一度は考えるよ」

夕樹は納得のいかない顔でおれをじっと見つめた後、溜め息をついた。

「そうだね、そんなものかもね」

どうやら彼はもつと違う答えを求めていたようだ。夕樹が落ち込むのを見て、おれは仕方なく口を閉じる。

高内のこと以外で悩むこともあるらしい。まあ、おれも似たようなものか。

暮れ始めた夕空を見上げて、考える。

今日の夜に、またメールしてみよう。よるじについて、おれはもつと知りたい。夕樹の兄貴だし、深く入り込むつもりもないけれど、もう一度抱かれない。

「恋って、どんな感じかな」

ふと呟いてみた言葉は、夕樹の目を丸くさせた。

「え？ ミオ、どうしたの？」

と、若干引き気味。

「いや、何となくそう思っただけ。おれ、恋ってよく知らないからさ」

「……な、そんなの、僕だって同じだよ」

と、夕樹はどこか呆れたように言った。

だからおれは、いつものようにへらりと笑う。

「だよな。恋なんて、頭で分かるもんじゃないよな」

きつとそれは感覚で知るものだ。ドキドキしたり、きゅんとした

り、きゅうつと胸が締め付けられたりして、自分の身をもって知るものなんだろう。

4・夜司？

会社説明会は退屈だった。会社によって違う箇所はいくつかあるが、根本はどこも似たり寄ったりだ。

それにまして、こういうところへ来るとライバルたちに圧倒されてしまうので落ち込む。しっかりした調子で質問をする奴は、たいてい見た目からして優等生だ。

就活を始めた頃は俺も頑張ったものだが、最近ではかつたるくて仕方がない。印象が大事だとか、常に見られているとか言うけれど、いちいち気にしてられるかつつの。

そりゃあ、俺なんかは頭の回転は速いけれど不真面目だし、大学の講師に気に入られても社会で通用するとは思えない。成績ばかりが目立つから優等生に思われがちだが、実際は真逆だ。

むしろ優等生だったら、今頃は東大に籍を置いているはずだ。高校の担任に強く推されて反抗したのは紛れもなく俺。当時、受験戦争に興味はなかったのだ。

説明会が終わると、隣の席にいたライバルに声をかけて情報を得ようとする奴らが目立つ。

俺はそういった奴らが好ましくなかったので、さっさとその場を離れる。何故ならいくら情報交換したって、内定がもらえる訳じゃないからだ。

だったら一刻も早く家に帰って寝る。またはインターネットでもやって、次に狙う会社を探す。

会場を出たところで、俺はネクタイを緩めた。もし会社の誰かに見られていたとしても、今回はパスさせてもらうつもりなので構わない。

辺りは早くも薄暗くなっており、街は静かだ。オフィス街なので当然と言えば、当然か。

駅までの道を歩いていて、ふと自分が苛立っていることに気がつく。不真面目なのは自分なのに、良く出来た奴を見ると劣等感が増す。自分もそうすれば良いだけなのに、そうできないのがもどかしい。

横断歩道は赤だった。

鮮血のように光るそれを睨み付けて、息をつく。一年前はまだ余裕があつて、こんなに苛つくこともなかった。

青に変わったのを確認して、歩き出す。だから、出会い系なんてちゃん方法に逃げることもなかった。

俺は男が好きだけど、それは飽くまでも「好き」というだけ。将来は親の気に入る女性と結婚して、家庭を築いて、平凡に老いていく予定だ。そうすることが長男の務めだし、両親にとっての幸福でもある。

道行く男性に目を奪われることがあつても、俺は特定の誰かと一緒にいる気はない。

駅へ着き、改札を抜ける。

慣れない路線なので、きちんと案内板で方向を確認してからホームへ降りた。

一分もしないうちに到着した電車に乗り込み、空いていた席へ腰を下ろす。

「……」

溜め息をついて、俺は携帯電話を取り出した。

乗り換えの駅までは遠い。暇つぶしにウェブを起動し、見慣れたサイトにアクセス。

それはゲイ向けの出会い系サイトだった。ここで俺は、何度か男に会っている。年上を相手にしたこともあるし、年下を相手にしたこともある。

掲示板は相変わらず新しい書き込みで賑わっていた。写真載せている奴もいれば、写メなしで出会おうとする奴もいる。

俺は基本的に顔で相手を選ぶ。だから写真付きじゃないと連絡は

しない。

この数年間で年下の方が好きだと気づいていたので、出来るだけ好みに合う相手を探す。年上でも、見た目が好みなら構わなかった。いくつか品定めをして、俺は溜め息をついた。

今夜はあまり良い奴がいない。すぐに会える相手が良いので、そう上手くいくものでもなかった。

携帯電話をポケットにしまい、ぼーっとする。

物心ついた時から、男が好きだった。幼稚園では、一番仲の良いかった男の子と結婚したいと言って母親たちを困らせたのを覚えている。だから俺は、あれ以来何も言わなくなった。

けれども、男が好きだという気持ちはどうしても無視できなかった。

中学生の時、初めて本当の恋をした。それまで比較的優等生を貫いていた俺は、そのあまりの辛さに現実逃避をして、苦しすぎて死さえ願った。相手が同じクラスの女子に恋していることを、知っていたから。

高校受験は頑張ったけれども、第一志望は落ちた。第二志望でも周囲から羨まれたので、それで妥協した。

もう恋なんてしない、と心に決めていた。

不真面目に高校を卒業して、今の大学に入って、俺は今、壁に突き当たっている。

今にも崩れそうな弱々しい壁なのに、手を伸ばすとぐにやりと曲がる。どんなに手を打っても、壁を破ることは出来なくて、苛立つ。

数ヶ月前に俺が抱いた男は、言った。

「親には、カミングアウトした？」

してないと俺が答えると、彼は目を伏せて言う。

「そうだよな。でも、いつかは言わなきゃいけないことだよ」

俺には隠し通す自信があった。

「……無理だよ。少なくとも僕は、嘘をつき続けたくない」

嘘じゃない。ただ黙っているだけだ。

「よるじは、きつと何にも考えたことがないんだな」
はつとして、力が抜けた。　　そうかもしれない。

自宅の最寄り駅へ着いたとき、携帯電話が着信を告げた。メールだ。

取り出して見るとミオからだった。一体何を考えているのか、俺との再会を運命だと思っていやがる。ただの偶然だ。何故なら俺はその日にすぐ会ってセックス出来る相手を探しているのだから、近くに住んでいたっておかしくはないのだ。

仕方なく開くと、俺を誘う文章が並んでいた。

『今日、会える？』すでに改札を抜けてしまったので無理だ。『嫌なら電話番号教えてよ。それで話そう』何を話すというのか。『教えてくれないなら、直接会いに行っちゃうよ？　おれ、よるじの家知ってるし』……返信画面に移動し、自分の電話番号を打ち込む。ただでさえ苛ついているのに、会いに来られちゃかなわない。

メールを送信し終わると、俺は携帯電話の電源を切って家路に着いた。

父親の帰ってくるのがだいたい二十一時を過ぎた頃だ。その一時間前から弟と妹と母親が順に風呂に入ってしまったので、必然的に俺が風呂に入るのは遅い時間になる。そして最後に父親。

「やつちゃん、お風呂どうぞー」

と、扉越しに弟が声をかけてきて、俺はむくりと起き上がる。

弟の友達と密かに関係しているという後ろめたさで、俺はあまり弟と顔を合わせて話をしなくなっていた。以前にも別の理由から話さなかった時期があるので、家族は誰も不思議に思っていないかった。弟が自室に入っていくのを耳で聞き、俺は廊下へ出た。風呂場へ向かおうとすると、ふいに弟が顔を出す。

「ねえ、やつちゃん」

「な、何だよ」

ちょっとびつくりした。

少し開けた扉から頭だけを出して、弟は言う。

「明日って家にいる？」

「は？ いるけど」

と、俺はさっさと歩き出す。

「それは良かった。明日、ミオが遊びに来るから」

はっと後ろを振り返ったが、弟はすでに扉を閉めていた。ミオが遊びに来る、だと？ ふざけんな、あいつ嘘つきやがったな。十六歳のくせに生意気だ。

苛々を抑えきれずに風呂へ向かう俺。　ダメだ、すっかりあいつに振り回されている。俺は就活で忙しいっていうのに、何てことだ。

熱い風呂にいつもより長く浸かって、少しの間目を閉じた。明日になればこの苛々もおさまるだろう……否、明日はさらに苛つくのかもしれない。

美音は俺に接近しようとしている。弟をどんな風に騙しているかは知らないが、美音の目的は絶対に俺だ。　とんでもない奴に気に入られちゃったな、俺。うん、深く考えるのはよそう。

風呂から上がり、さっさと寝間着に着替えて自室へ向かう。

明日は家にいない方がよい。何か適当な理由を付けて……そうだが、サクマがいるじゃないか。

放置していた携帯電話を取りだし、電源を入れる。

アドレス帳を開いてサクマを探し出し、すぐに電話を入れた。たぶんバイトも終わってる時間だろうから、つながると思うんだけれど。

「お、バイト終わったか？」

「やっぱりつながった。」

『ちょうど終わったとこ。何の用だよ？』

「ああ、明日なんだけどさ、久しぶりにどこか遊びに行こうぜ」
誘ってみると、サクマは言った。

『悪い。明日は会社見学なんだ』

「はあ？ その後は？」

『その後は……女子大生と合コン』

「しね」

間髪入れずにそう返すと、サクマは笑った。

『あはは、悪いな、ほんと。お前、明日ヒマなの？』

「ヒマだから誘ってるんだろ」

『そっかー。お前も合コン来る？』

「断る」

『相変わらず固いんだからあ。一度くらい来てみるよ、面白いぜ』

「メンバーによるな。行く気はないけど」

『つれないねえ。そんなだからモテないんだよ、夜司^{やつかさ}は』

「うるせえ。もう用は済んだから切るぞ」

『はいはい。じゃあ、またな』

「おう」

耳から離してボタンをぷちつと押す。

携帯電話を閉じると同時に溜め息をついた。出かける予定が作れないなら、一人でどこか出かけるか……めんどうだな。

だったらいつそのこと、風邪でも引いたと仮病を使って部屋に引きこもろうか。あ、でも母親が無駄に心配して風邪薬とか飲まされるな。

まあ、俺が部屋に引きこもるのはよくあることだし、扉には鍵をかけて誰も入れないようにしよう。あと窓も閉め切ってカーテンかけて……ダメだ、これでは何の解決にもならない。

仕方がない。明日はむしろ、あいつがどう出るか伺っていよう。

俺の方が大人で一枚上手だってこと、思い知らせてやる。

5・美音 ? (前書き)

1 / 16 一部修正。

5・美音？

「滝口くん、ありがとう」

と、差し出された数学のノート。

「ああ、どういたしまして」

と、受け取るおれ。塚田はおれの目をじっと見て、少し笑う。

「すぐく見やすいノートだったよ。試験前とかに、また見せてもらっても良い？」

大人しいだけの女子かと思ったが、意外とそうでもないらしい。

「うん、良いよ」

「ありがとう」

につこり笑って自分の席へと戻っていく塚田。比較的自由な校風だからか、彼女の髪を束ねるリボンはピンク色のふりふりだった。

夏休み前まではまったく言葉を交わさなかったのに、高内のおかげで距離が縮まってしまったようだ。別に良いけど。

なんて悠長に構えていると、昼休みに高内がやってきた。

「ジュースクらいはおごってあげる」

「は？」

怪訝な顔を彼女へ向けるおれ。

「いーしゃにノート貸してくれたでしょ？ そのお礼よ」

しかし生憎とおれは、通学途中のコンビニで飲み物と昼飯ゆいつきを一緒に購入するタイプだった。購買を使うのは、むしろ夕樹の方。

「気遣わないでいいよ。だったら、あいつにおごってやって」

と、おれは席を立て夕樹の元へ行く。のんびりと勉強道具を机の中にしまっていた夕樹は、おれらの会話に聞き耳すら立てていなかった。

「ユイ、高内がジューズおごるって」

「ああ、ミオ。って、ええ!？」

おれの隣にいる高内を見て、ドキツとする夕樹。分かりやすすぎるだろ。

「まあ、滝口がそう言うならおごつてあげるけど」と、高内。

「ちよつと、え、どういうこと?」

慌てる夕樹へおれは言う。

「だってお前、いつも購買で飲み物買うだろ?」

夕樹はぼかんとすると、はつとして立ち上がった。

「そんな、高内さん、別にいいよ。僕、何もしてないし」
なんとなく状況は飲み込んだらしい。

「そう?」

「う、うん」

高内に見つめられて息を飲む夕樹。やばい、面白い。

「りのちゃん、それなら今日はみんなで食べない?」

と、入ってきたのは塚田だった。

「ああ、それ良いかも。あんたたち、いつもどこで食べてるの?」

高内がおれを見て尋ねる。夕樹は視線を逸らしながらも、未だにドキドキしているようだ。

「食堂か、たまに中庭」

「じゃあ中庭行こう! 今日は秋晴れだもん」

と、高内がにつこり笑う。……秋晴れ、ねえ。

そんなこんなで女子二人とおれたち二人、合計四人で昼休みを過ごすことになったわけだけれど……。

「つつーか、何でおれがノート貸さなきゃいけなかったの? 高内の見せれば良いだろ」

「残念ながら、昨日の数学は眠ってました。あの先生の話って、どうも眠くなっちゃうのよねえ」

中庭に設置された机と椅子を四人で囲む。向かいに高内が座ったせいで、夕樹は若干おれの方に寄り気味だ。

「ひでえ奴。こんなのとよく一緒にいれるな、塚田」

「でも、りのちゃんのノートって黒板を写してるだけだから、見ても参考にならないんだよ」

と、塚田は笑う。

「だって眠くなっちゃうんだもん。板書だけで精一杯なのー」

そう言って口を尖らせる高内。他愛のない話をしているだけなら、そこら辺にいる女子と大して変わらない。言ってしまうば、普通だ。「勉強以外だったら頼りになるんだけどね」

と、塚田。

「たとえば？」

どこか嫌味っぽく尋ねる高内。塚田はおれの方をちらつと見ると、言った。

「昨日だって、滝口くんにノート借りてくれたでしょ？」

「ああ」

「わたし、人見知りだから話しかけるのって苦手で」

と、塚田は優しく苦笑する。

「まあ、そうね。あたし、嫌いな奴以外なら誰とでも話せるし」と、高内も納得した様子だ。

確かに塚田の方が勉強は出来そうだし、それで互いにバランスをとっているのかもしれない、と思う。

「それなら、おれとお前もそんな感じだよな」

と、黙りこくっていた夕樹に話を振る意地悪なおれ。

「え、あ、うんっ」

話は聞いていたらしいが、動揺してしまう夕樹。こういう中学生っているよな、なんて思いながら言う。

「おれは人見知りしないけど、ユイはすげー激しいんだよ」
女子二人が夕樹を見て、夕樹がぱつと口を開く。

「人見知りって言っても、最初だけだよ！ 確かに、ちょっと、苦手ではある、けど……」

決して高内の方を見ようとしなない夕樹。

「認めたな、ユイ」

と、おれはやっぱり意地悪く笑う。今日は最高に楽しい昼休みだ。夕樹が俯くと、塚田が口を開いた。

「前から思ってたけど、藤堂くんって可愛いよね」

その言葉に高内がうんうんと頷く。

「滝口がいじめたくなる気持ち、すつごくよく分かるわ」

高内が夕樹をじっと見つめれば見つめるほど、夕樹はおれに助けを求めて寄ってくる。

おれは何も言わずに夕樹の肩を掴んで押し返してやった。

放課後、夕樹の家に向かう最中も、彼はにこにこしていた。高内と一緒に昼飯を食べられたことが嬉しいらしい。

「どうぞ、上がって」

と、先に玄関へ入る夕樹。

「おじゃまします」

藤堂家へ足を踏み入れるのは二度目だった。よるじ、いるかな。靴を脱いで上がると、すぐに廊下の奥から朝子ちゃんが出てくる。

「おかえりなさい」

「ただいま」

と、につこり妹の頭を撫でる夕樹。

「こんにちは、朝子ちゃん」

と、おれも視線を下げて挨拶すると、朝子ちゃんがおれに向かって飛び込んでくる。

「みおおにいちちゃん、こんにちはーっ」

ぎゅう、と抱きしめられて胸がほんわかする。何で子どもって、こんなに癒されるものなんだろう。

「朝子、母さんに飲み物ちょうだいって言ってきてくれる？」

と、夕樹。朝子ちゃんはおれから離れると、すぐに来た道に戻っていった。

「まーまー、ゆいがのみものちょうだいってー」

可愛すぎる。兄貴のことを名前で呼ぶのがおれには違和感だが、

藤堂家のルールなんだろう。

夕樹が自分の部屋へ向かって歩き出し、おれもその後を追う。

「兄貴は？」

「さあ？ 部屋にいると思うよ」

部屋の扉を開けて、中へ入る。

夕樹が鞆を机の横に置いて、おれは前と同じように適当な場所へ腰を下ろした。

「そつえば、前に話したゲームだけど、昨日ついにクリアしたんだ」

と、夕樹が思い出したように言っ、そのゲームソフトを棚から取り出す。

「ミオ、やりたいって言っ、たでしょ？ 貸すよ」

「お、マジで？ さんきゅー」

それは流行のアクションゲームだった。おれもこういったものはそれなりに興味がある。

すると、扉がこんこんとノックされた。

夕樹がすぐに扉を開けて、ジュースの入ったグラスを二つお盆に載せたおばさんが入ってくる。

「美音くん、いらっしやい。ゆっくりしていつてね」

言いながらおばさんは机にグラスを二つ置き、部屋を出る。それと入れ違うようにぬいぐるみを抱えた朝子ちゃんが入ってきた。

「あーそーぼー」

遊ぶ気満々の朝子ちゃん。良いなあ、妹っ。

夕樹は少し笑うと、グラスを倒れないように机の中央へ移した。

「何して遊ぶ？」

おれの問いに朝子ちゃんはベッドの上にのぼって言う。

「おままごと！」

と、夕樹のぬいぐるみの一つをおれに手渡す。え、おままごとにぬいぐるみって要るの？

「ゆいはこのこ」

と、別のぬいぐるみを夕樹にさしだす。夕樹は呆れまじりに手を伸ばして、はつとした。

おれに背を向けるようにしゃがみこんで、朝子ちゃんへ言う。

「……朝子、僕の部屋に入った？」

「うん」

「……えつと」

朝子ちゃんの抱きかかえたデイベアに手を伸ばし、何かする夕樹。

「これ、どこで見つけたの？」

「いすのした」

「勝手に僕のものつつちゃダメでしょ」

「だって、かわいいんだもん」

「朝子、いい？ そういうの、どろぼうって言うんだよ」

おれにはよく見えないので分からない。そつと身体を横に倒してみると、夕樹の手には先ほどまでデイベアが被っていたふりふりひらひらの何かが握られている。確か、ヘッドドレスとかいう名称やつじゃなかったつけ。

「……ごめんなさい」

と、泣きそうな顔で謝る朝子ちゃん。夕樹はそれを手にしたまま、妹の頭を優しく撫でた。

そして、落ち着いたところでおれを振り返る夕樹。

「……えつと」

手にしたものをとつさに引き出しへ隠すが、意味はない。

「それ、何？ つつーか、お前の持ち物なの？」

夕樹が苦い顔で視線をさまよわせる。朝子ちゃんはベッドの上に座り込んでぬいぐるみと見つめ合っていた。

扉を開けて外に誰もいないのを確認して、夕樹がおれのすぐそばへ腰を下ろす。

「見なかったことにしてくれないかな？」

「無理」

即答すると、夕樹が泣き出しそうな顔をする。

「言っても、笑わない？」

「笑わない」

「僕のこと、嫌いにならない？」

「なるわけねーじゃん」

だっておれがよるじに接近するには、夕樹の存在が必要不可欠なのだから。

夕樹は深く溜め息をつくとき、ジュースを一口飲んでからベッドの下に手を伸ばした。

ごそごそと取り出されたそれは、衣類を入れるのに使うプラスチック製の箱だった。その中から、綺麗にたたまれて袋に封印されている衣装を取り出す。

広げて見せた衣装は、ふりふりひらひらの愛らしいピンク色の口リータ服。

「……僕、女装するのが、趣味……なんだ」

と、小さな声で告白をする。

「……」

あー、なんて言うかな。意外だったというか、ショックというか、でも夕樹なら似合いそうだとか。

朝子ちゃんがおれらの空気を読んだらしく退室していった。

「へ、変だよ。自分でも、分かってはいるんだけど……その」

と、夕樹は顔を赤くして俯いた。おれは箱に手を伸ばし、他にも似たような服があるのではないかと探る。

「あ、ダメ……っ！」

夕樹が声を上げたが、構わずに一つ取り出してみる。今度は黒、いわゆるゴスロリである。

隣の部屋からよるじが聞き耳を立てるような、がたつという物音がしたが、夕樹はそれどころではない様子だった。

ゴスロリを再び箱にしまって、おれはふりふりひらひらの服を抱きしめている夕樹へ言う。

「別に良いんじゃない？」

夕樹だって人間だ、ひとつくらいおかしい趣味嗜好があったっておかしくはない。それどころか、おれは不思議と安心していた。変なのは自分だけじゃなかった。

「むしろすつきりしたよ。お前、こーゆーのが好きだったんだな」

「……ミオ」

夕樹は手にした服を丁寧にたたむと、また袋へしまった。

「ありがとう、ミオ」

「ううん」

それから夕樹は先ほど引き出しにしまったものを取り出して、小さな声で言う。

「僕ってさ、漢字で書くと『ゆうき』にしか読めないでしょ？ 女の子でも通用する名前だから、それでネットで買い集めてるの」
「へえ」

夕樹でも悪知恵は働くらしい、ちょっと意外だった。

「たまに、宿題やるから誰も入らないでって嘘ついて……着てみた
り、して」

「それで興奮するの？」

「こっ、興奮！？ 違うよ、僕はただ」

顔を真っ赤にさせながら、夕樹が言う。

「可愛いものが、好きなんだ。だから、人から可愛いって言われる
のも、けっこう好きで」

そんなお前もまた可愛いわけだが、おれの趣味じゃないので手は
出さない。隣にはよるじもいるだろうし。

「そっか。ユイも、やっぱり変だったんだな」

「へ、変って、確かにそうだけど、僕は……っ」

「はは、やっぱり類は友を呼ぶんだなあ。何か楽しくなってきた、
おれ」

と、笑う。

夕樹は不満そうにしながらも、箱に入った袋たちを見つめると言

った。

「……ちよつと、お願いがあるんだけど、良い？」

「何？ 出来る範囲で引き受けるよ」

おれが彼に視線をやると、夕樹はおれの目をじっと見つめた。

6・夜司？

結局、あいつはずっと弟の部屋にいた。何か話をしていたようだが、「あ、ダメ……っ！」とか「興奮するの？」とか、何だかいやらしい言葉しか聞こえなかった。だが、その後の弟の様子はいたって普通だったので、俺が想像するような事態にはなっていないはずだ。

それにしても、だ。

「ちよつと出かけてくる」

「あら、こんな時間にどこへ？」

母親の質問には答えずに、玄関の扉を開ける。

「夕飯までには帰ってくるのよ」

と、背中に声がかかったが、俺は振り返らなかった。

向かう先は駅前だ。

あいつは家に帰ると見せかけて、俺に電話して来やがった。『よるじに会うの忘れてたから、外で会おうよ』とか言つて。

弟の部屋で何をしていたか気になっていた俺は、仕方なく家を出た。

「あ、来た来た」

と、にっこりする美音。

俺は彼を睨んだままで問う。

「さつき、弟の部屋で何してた？」

美音はじつと俺を見つめると、言った。

「場所、移そう」

そして駅の中へ入っていく。

着いたのは、この前二人で来たホテルだった。まあ、男二人で静かに話せる場所と言ったら、ここくらいしかない。美音は俺を誘っ

てくるだろうし、予想は出来ていた。

「朝子ちゃん、可愛いね」

と、美音はにっこり笑ってベッドに座った。

「……まあな」

俺は相手から距離をとり、扉近くの壁にもたれかかる。

「よるじは、夕樹ゆいつきと仲良し？」

「……そんなに仲は良くない。この数年、互いの部屋に入ったことないし」

素直に答えを返すと、美音は「ふうん」と、考える様子を見せた。
「じゃあ、知らないのか。よるじも家族には内緒にしてるんだもんね」

何を言っているのか分からなかった。

「自分が同性愛者だってこと、隠してるんでしょ？」

はつとして、俺は彼を睨み付ける。

「ばらすつもりはないよ。おれはただ、よるじが好きだけ」

「……何が言いたいんだ、はっきり言え」

「んー、言えないよ。おれはただ、あんたと付き合いたただけだしと、立ち上がる。静かに俺の前まで来ると、弟の前では決して見せない顔をする。

「キスしてみれば、分かるよ」

俺の肩に手を置いて、唇を近づけてくる。仕方がないので、俺も普段と違って気を引き締めた。

「お前と付き合う気はない」

「何で？」

あと数センチのところだった。

「弟の友達と付き合うなんて、馬鹿げてる。それにお前は最初、俺を騙した」

「別に年齢を詐称するくらい、どうってことないでしょ」

高校一年生にしては妙に色っぽい声を出す。

「生意気な奴は気に食わない」

強く言つと、美音は離れた。

「何だ、残念。猫被つてるおれの方が好き？」

と、またベッドに腰を下ろす。俺は何も返さなかった。

「たぶん違ふとは思うけど、一応聞くよ。夕樹は、男が好き？」

目を逸らしていた。俺はそんな彼を見据えて答える。

「まさか。どうしてそう思うんだ？」

「うん……類友だから」

意味が分からなかった。いくら何でも、兄弟揃って同性愛者なんて……俺が言えたことではないが、ありえなかった。

「夕樹は普通の子だよ、うん」

と、一人で勝手に納得する美音。ついて行けなくて、俺は言う。

「話はそれだけか？」

「おれの彼氏になつてよ」

「断る」

「……何で？」

どこか寂しそうに言つて、美音は制服のネクタイを外した。

彼が何を求めているかは分かつていた。顔を背けて俺は言う。

「さつきも言つただろう。お前は弟の友達だ」

「でも、好きになつちゃつたらしょうがないでしょ？」

美音はワイシャツのボタンを外して上半身を晒す。

「ねえ、やつちゃん？」

家族にしか呼ばれていない愛称で呼ばれて、ムカツと来た。

「その名前で呼ぶな」

「じゃあ、何て呼んだらいい？」

今まで通りで良い、と答えそうになつて口を閉じた。相手のペー
スにはまつたら最悪だ。

「やつくん？ それとも、夜司^{やつかさ}？ 今まで通り、よるじの方が良い
かな」

「うるさい、黙れ」

苛々していた。彼のほつそりした身体が、見たくないのに見えて

しまう。

誘うだけで、行動に移してくれないのがせめてもの救いだっただ。下手に身体を触られたら、苛々が性欲へと変換されてしまいそうだった。

「もしかして、他に好きな人がいるの？」

「いない」

「じゃあ、何で？ おれと付き合ってよ」

「もう、恋はしないと決めたんだ」

「……どうして？」

俺はどう答えるべきか迷った。美音には全てを見抜かれてしまう気がして、何故だか怖かった。

「苦しい思いでもした？」

「……」

「そうだよ、おれなんかより長く生きてるもんね。おれは、むしろ恋がどんなものか知らないから、もしかするとあんたのことも、本当は好きじゃないかもしれない」

「……」

「でもおれ、もう身体売るのに飽きたんだ。誰か特定の一人だけに抱かれない」

まだ十六年しか生きていないのに、ませたことを言う。それが俺は気に食わないのに、美音は分かっているのか、ただ無視しているだけか。

「そして今は、おれはあんたに抱かれないと思ってる」

目を向けると、美音は自嘲するように微笑んでいた。

「おれ、男の人に抱かれている時が、一番、自分を感じられるんだ」
「……」

「みんなそうだと思うけど、おれ、誰かに必要とされていたからそれは十六歳の主張だった。思春期まった中の、誰もが通り過ぎる思考の渦の中。」

「それと同時に、おれは誰かを必要としてる。それが、あんたなん

だよ」

そう言って美音は俺を見た。何かを見透かすような、真っ直ぐであどけない瞳だった。

ああ、彼はちよつとませていて生意気だけど、弟と大して変わらない普通の少年だ。

過ちを犯して、自分を責めて、悩んで、迷って、怒って、自分を許して、甘えて、泣いて、わめいて、もがく。

「呼び捨てにしてくれば良い」

俺もまだその渦から抜けきれずにいるから、思わずそう言ってしまった。

「……夜司」

美音が小さな声で俺の名を呼ぶ。

俺は溜め息をつくと、ベッドに腰を下ろした。

「まだ付き合うわけじゃないからな」

と、彼の唇へ唇を重ねる。 ファーストキスだった。

7・夕樹？

ふりふりのスカート、ひらひらしたレース、愛らしい花柄にきらきらした髪飾り。考えるだけで気分が高揚する。

塚田さんみたいな可愛い女の子に生まれたかった。けれども、僕は女の子になりたいわけではなくて、女の子の好きなものが好きなかだけ。

女装だつて、最初はそんなに興味がなかった。中学二年の時、たまたまインターネットで女装をしている男性のブログを見て、意外と出来るものなんだなつて思ったから、やってみた。結果は今の僕につながっている。

今年のお正月にもらつたお年玉は、ほとんどが服に換わっていた。今では女装専門のネットショップもあるので、時間を見つけては品定めをして、家族に内緒で購入しているのが現状。

本当はメイクにも挑戦してみたいのだけれど、買う勇気がなかった。買ったとしても、メイクの仕方が分からない。母さんに聞くのはまずいから、どうしようもなかったりする。

だけど、美音が理解のある人で良かった。内心は「お前、変態なんじゃねえの？」と、言われやしないかドキドキしていた。けれども現実には僕を嫌うこともなく、これまでと変わらずに接してくれて、本当に嬉しかった。

「……なんつーか、完璧だな」

「え、本当？」

僕が思わず表情を明るくさせると、美音は言った。

「悪い意味で、な」

「……」

やっぱり美音は意地悪だ。

僕がしょんぼりして床に座り込むと、美音が僕に手を差し伸べた。

「それじゃあ行こうぜ、お姫様」

ドキッとして、きゅんとする。

「う、うん！」

手を取って立ち上がる。美音は今日、僕の願いを叶えようとしてくれていた。

「あ、ちよつと待って」

はっとした僕は鞆から靴を取り出す。衣装に合わせたピンク色の厚底ワンストラップシューズ。

「……靴まで」

と、美音が少し目を丸くする。

「だってこれがないと歩けないでしょ」

「そうか？」

「そうだよ」

実際に靴を履いて出歩くのは初めてのことなので、靴擦れしなにかちよつと不安だ。こういう靴って、けっこう痛いらしいし。

この時のために購入したポシェットの中には財布と携帯電話、家から拝借してきた絆創膏と定期兼用のICカード。よし、準備万端意外とこのポシェット、色々入るんだよね。

「行こう、ミオ」

「おう」

美音が部屋の電気を消し、廊下へ出る。相変わらず静かな家だった。

「本当に、誰も帰ってこないの？」

ちよつと心配になって尋ねると、美音は笑った。

「帰ってこないよ。姉ちゃんは大学の寮に入ってるし、両親は朝から晩までドライブデート」

「ミオの両親って、ラブラブだよな」

ちよつと羨ましいなと思いながら僕は言った。すると美音はどこか冷めた調子で言う。

「離婚しないように、無理してやってるだけだ」

そんな言い方はひどいと思うが、彼の家庭に口を挟むことは出来ない。

玄関で靴を履き、青々と晴れた外へ出る。

「……ちよつと歩きにくい、かも」

厚底の分だけ重みが出るので、いつものようには歩けなかった。

玄関の鍵を閉めた美音が僕を振り返って言う。

「手、繋ぐか？」

「ううん、いい」

いくら美音でも、一緒に手を繋いで歩くのは嫌だった。なんといつか、僕の乙女心が暴走しそう。

もう九月も終わりに近づいていた。風はすっかり冷たくなって、季節の移り変わりを感じる。

「うーん」

僕の方をじろじろと見て、美音が唸る。

「な、何？」

「いや……ユイ、身長伸びちゃダメだなと思って」

「ダメ？」

「うん。兄貴みたいになって欲しくない」

「……そ、そう？」

美音のいう意味がいまいち分からない。確かにやつちゃんは背が高いし、男らしい顔だけれど。

「それにほら、成長期来たらお前、その服似合わなくなるぞ」

「ええ！？」

ドキッとした。男であるからには一刻も早い成長期を望むが、そう言われてしまうと複雑だ。ただでさえ、高内さんとは身長差がほとんどないというのに。

美音が僕から目を離し、僕は少し俯きながら歩く。

今日はこれから、二人で原宿に行く予定だった。ピンクを基調とした花柄のロリータドレスに白のニーハイソックスと厚底靴、白のレースがあしらわれたポシエット。ロリータするならやっぱり髪は

長い方が良いのでエクステでカバーして、頭にはピンク色のヘッドドレス。これこそ、僕が望んだお姫様。

メイクはしていないのですっぴんだが、眉を整えるくらいはした。もつとも僕はまだ顔が幼いので、上手くすれば女子中学生に見えるかもしれない。それなら、別にメイクしてなくても良いよね？

ちなみに美音は、黒で統一したロックスタイルだった。本当は王子様スタイルが良かったのだけれど、美音にそこまでさせられない。僕の隣を歩いてくれるだけで、ありがたいのだから。

幼い頃から密かに胸に秘めていた願望を、こんな風に形に出ただけで僕は満足だった。僕はお姫様で、隣を歩くのが僕の王子様。愛らしいお姫様を、かっこいい王子様がエスコートしてくれるのだ。

「で？ 原宿行ってどうするの？」

駅が近づいてくると、美音が僕に尋ねてきた。

「歩くの。竹下通りとか、表参道？ とか」

原宿は僕の憧れだった。ふりふりひらひらのお店がたくさんあるって言うし、行き交う人も僕みたいない……否、ゴシック&ロリータの女の子たちだと聞くし。

「お前、原宿知らないな？」

見抜かれた。

「え、あ、うん」

「まあ、いいや。休日人は多いから、はぐれないようにしろよ」と、美音は言った。

移動はちよつと窮屈だった。ふわりと広がったスカートは潰されるし、厚底のせいで階段の上り下りも苦勞する。美音がそばでサポートしてくれなかったら、確実にこけてた。

原宿駅ではいろんな人たちが電車を降りて、僕たちもその中に交ざった。

狭い通路の先に改札があり、美音が僕を見て言う。

「あれが竹下」

改札の向こう、横断歩道を渡った先に広がる賑やかな通り。
ドキドキする胸を抑えつつ、改札を抜ける。

「うわぁ、人がたくさん」

「だろ？」

行き交う人々で混雑し、賑わう。今にもはしゃぎ出したかった。

竹下通りへ入ると、僕は何度目かになる視線を浴びる。電車の中
ではおじさんやおばさんにじろじろ見られ、ここではむしろ同年代
の子たちから憧れのような視線を向けられていた。僕、女の子だと
思われてるかな？

「ミオは、来たことあるの？」

がやがやする道を歩きながら、隣にいる僕の王子様へ言う。

「二回くらいな」

「そうなんだ……いつもは、どこ行くの？」

美音は少し考えると、僕を見て笑った。

「特に決まってるないな。一度目は姉ちゃんの付き添いだったし、二
回目だって大して遊んでねえもん」

「そうなんだ」

と、納得する僕。

思っていたよりもロリータ人口は少なかった。どちらかというと
カジュアルや古着系が目立つ。たまに派手な色に髪を染めた人もい
たけれど、それは本当にごく稀で。

「……意外と僕、目立ってる？」

すれちがう女の子たちが僕を見て何かひそひそと言葉を交わすの
が見えた。

「だろうな。遠目に見たら可愛いんだけどな」

「え！？」

「嘘だよ」

「……もう、ミオってば意地悪なんだから」

別に、男だとはれたって構わないのだけれど、やっぱり好奇の目

にさらされるのは怖かった。だけど、それ以上に僕はこの可愛い格好で原宿を歩きたかったんだ。

「あ、良い匂い」

「クレープ屋だな。食うか？」

向かって左の方にあるお店でクレープが焼かれていた。甘くて良い匂いがする。

「……うん」

悩みに悩んで、僕は頷いた。どうせお腹は空くのだから、先に腹ごしらえしたって良いだろう。というよりも、普通にクレープが食べたい。甘い物はそんなに好きじゃないけれど、今日は特別だ。

しつこいようだけど、僕は女の子の好きなものが好きであって、可愛い女の子のやることを同じようにやるのが好きなだけだ。

僕は男性だし、ホモでもない。性同一性障害でもない。僕は大多数の男性がそうであるように、女の子が好き。

ただ、ふりふりひらひらの可愛いものが大好きなだけの、男の子だ。

許されるなら毎日女装して過ごしたいし、可愛いものに囲まれて暮らしたい。

僕は夕樹^{ゆいつき}。男として生まれて男として育ち、男としての自覚がある。ただ趣味が少し、人と違うだけ。

8・美音？

人混みの中を歩くのにはもう慣れたが、竹下通りはやっぱ異常だと思う。疲れた。

夕樹はむしろ、夢を叶えて満足げ。以前よりも明るくなった気さえる。

「滝口」

欠伸をしているおれの元へ、高内がやってきた。

「何」

眠いんだけど、という含みを込めて言う。高内は教室内をちらちら見渡すと、言った。

「静かなところで」

「おれに告白でもするつもり？」

「違うわよ」

即答されてちよつとがっかりした。

仕方なく席を立ち、高内の後を追って教室を出る。

あまり人の来ない奥の方まで来て、高内は立ち止まった。

「昨日、あんたどこ行ってたの？」

「は？ えっと……原宿」

高内がおれの目を見て、尋ねる。

「可愛い女の子と歩いてたでしょ？ ロリータの目覚めた。」

「……え、何のこと？」

知らない振りをしてみるが、時すでに遅し。

「あたし、見ちゃったのよ。地元で」

「へ、へえ」

「へえじゃないでしょ！ 誰よ、あの子」

「……えっと、おれの妹」

「あんた、妹いないでしょ」

さすがに中学からの付き合いだと、嘘で誤魔化すのも難しい。

「顔がよく見えなかったから分からないんだけど、なんか知ってる人のような気もするのよねえ」

「ばれるかと思った。否、ばれるのも時間の問題か。」

「その時、いーしゃもいたんだけど、やっぱり分からないっていうし……」

「せめてクラスが違っていれば何とか誤魔化せそうなのだが、生憎と高内の言う可愛い女の子は夕樹なわけで。」

「滝口、原宿でデートしてたの？ あんな素敵な子と？」

「いや、えつと、まあ、うん」

「羨ましい！ 教えなさいよ、誰なの？」

「それは言えない」

「どうして？ あ、疑ってるわね？ 安心しなさいよ、襲ったりしないから」

「やっぱり高内はレスビアンなんじゃなかるうか。」

「でも、言うなって言われてるし」

「と、おれは最後まで口を閉じているつもりで言う。」

「じゃあ、名前は良いから高校の子かそれ以外か、答えなさいよ」

「え？ えつと……」

「高校の人だと言ったら、彼女はどんな行動に出るだろう？ 考えているとチャイムが鳴った。」

「あ、チャイム」

「大丈夫よ、まだ予鈴だもの」

「高内は相変わらずおれの顔をじっと見つめていた。おれは困惑しながら、仕方なく「高校の子」と、返した。」

「ただでさえ疲れているのに、もっと疲れた。高内は可愛い女の子が大好きらしい。そんなことを平気で口にするから、レスビアン疑惑が浮上するのに彼女は分かっているのだからだろうか。」

「更衣室で体操服に着替えていると、誰かが言った。」

「雨が降って来たから体育館だつて」

ああ、やっぱりか。……傘、持ってきてねえや。

男子たちが口々に何か言う中、夕樹もおれへ言う。

「体育館か、何するんだろうね」

「バレーかバスケットあたりじゃね？」

と、返して、おれはジャージを羽織った。

雨足は意外と速く、あっという間に大粒の雨になった。体育館の屋根を叩く音がうるさい。

「やっぱりバレーだった」

体育教師の指示で、みんなで手分けして館内にネットを張る。

反対側では女子が同じようにバレーボールの準備をしていた。

「眠い」

やることなくなると、おれの呟きに夕樹が言った。

「保健室行く？」

「行つてどうするんだよ」

と、おれは笑う。そして、コートでチーム分けをしているクラスメイトたちの中へまざった。

おれはそこそこ運動神経が良い。クラスの中では背の高い方に分類されることもあり、バレーボールではしたくもないのに活躍出来てしまう。

一方、未だに成長期の来ない夕樹はちょこまかするばかりで、バレーボール向きではなかった。サッカーなら、少しは上手かった気がするのだけれど。

適当なチーム分けのおかげで夕樹と同じチームだった。おれとしては、敵チームにいる夕樹の方をばん狙って打つのが楽しいのだけれど、仕方がない。

チームメイトもすっかりおれを頼っている様子だし、つまらなかつた。またこうして、退屈に授業が終わってしまうのかと思うとむなし。

試合が終了し、コートの外へ出て休憩する。その間に別の奴らが

試合に臨む。

女子の方は男子よりも賑わっていた。体育会系の女子が多いからだろうか。

夕樹は相変わらず高内の方をちらちら見ていた。高内も体育会系ではあるが、たまにすごいドジをする。ほら、今もサーブが強すぎて壁にぶつかってるし。怪力だな、あいつ。

「やっぱり、運動出来る人の方が良いよね」

と、夕樹が呟き、おれは男子の試合に目を向けて言う。

「大して変わらないと思うけどな」

顔が良ければ運動が出来なくてもモテるし。

「……うん」

女子の試合が終わった。一方、男子の方は白熱していた。気分が乗ってきたのか、良い試合展開だ。

「だけど、男ならやっぱり、さ」

と、また何かを呟く夕樹。どうやら満足行くまで女装した反動で、今度は男としての自分に悩み始めたようだ。

「勝手にしろ。今更、男らしくなろうなんて」

床を蹴る音がして振り向くと、夕樹の姿がなかった。かと思えば、夕樹は高内の目の前で頭を抱えていた。どうやら、ボールが飛んできたらしい。

「藤堂くん!？」

「っ……怪我は、ない？」

「な、ないけど……藤堂くん、頭っ」

男らしかった。好きな女を身を挺して守る。馬鹿らしいけど、男らしかった。

夕樹の頭を直撃したボールを塚田が取りに行き、コート内にいる女子へ渡す。

「大丈夫だよ、これくらい」

と、笑う夕樹。普段は頼りない奴だけに、高内もドキッとしている様子だ。

「ダメよ、保健室行きましょう」

と、高内は言っと、夕樹の腕を取って体育館を出て行った。分かりやすく慌てる夕樹が面白かった。

青春だなあ。

「ねえ、滝口くん」

「何？」

一メートルほどの距離をとって、塚田がおれの隣へ座ってきた。夕樹の様子が変だとも言うつもりか？

「りのちゃんから聞いたと思うけど、昨日のあの子」

「……またその話が」

と、おれはうんざりする。塚田は他の奴らに聞こえないような声量で、言った。

「藤堂くん、だよな」

はっと塚田を見る。ばれた！？

「わたしね、そういうの見抜く自信だけはあるの」

塚田の横顔は綺麗だった。正面から見た時とは違って、大人びている。

「でも、高内は」

「りのちゃんに言っと、色々危険な気がするから言わなかったの」

「……そうか」

「うん。どうしてあんなことしてたのか、聞きたい気持ちはあるけど、りのちゃんみたいに聞き出すことはしないよ」

「……うん」

大人しくて消極的で、自分から行動するのが苦手だと言っていたはずの塚田とは、別人のように思えた。

「罰ゲームって感じでもなかったし」

塚田は見抜いていた。ただ、他の奴らに聞かれては困るだろうと気を遣ってくれているのだ。

「お前って、良い奴だな」

素直に思ったことを口にする、塚田はちらっとおれの方を見て、

照れたように笑った。

「そんなことないよ」

女友達なんてのも、案外悪くないかもしれない。

9・夜司？

履歴書が無くなった。買いに行くのもめんどくさい。

一次で受かつてても、二次の面接で必ず落ちる。成績は悪くないのに、どうしてだ？ 答えは、俺の態度が悪いから。

とりあえず髪の毛は清潔な長さにして黒髪で、スーツもばっちり着こなして、鞆も無難なものを選んでいる。言ってしまうと、典型的なリクルート。模範的。

「なかなか決まらないわね、就職」

と、嫌味に言ってくる母親。

「しょうがないだろ、今はどこも募集人数が少ないんだ」

「でも、やつちゃんならすぐに見つかりそうなのに」
期待されても困る。

「まだ来年だってある。一つくらいは内定くれるって」

と、俺は自分へ言い聞かせるように言う。でないと、就活そのものを諦めてしまう気がした。実際、何人かは家を継ぐとかフリーターで良いとか言って、就活を諦めるらしい。

「そうね。前向きにならないとね」

母親の声援は嬉しいが、そんなことだけで頑張れるほど俺は器用じゃなかった。

「最近どうよ？」

「二十五連敗達成」

「奇遇だな、オレもだ」

サクマは相変わらずへらへらしていた。

「面接で、やる気あるの？ って聞かれた」

と、俺が言つと、サクマは笑い出す。

「何それ、マジで？ お前、ダメじゃん」

「どうも俺は、相手に何も伝わらない顔をしているらしい」

「あつははは、ひつでえー」

俺がひどいのか、それとも面接官か。どちらにしても、サクマの笑い声はうざい。

「だからもう一回、模擬面接受けようと思ってる」

と、溜め息をつく。しかし、何度模擬面接をしても「ばっちりよ、藤堂くん」と、言われるだけなのだが。

「何が悪いんだろうな、本当に」

と、サクマも笑うのをやめて言う。

「お前の場合はあれだな、控え室で大人しくしてられない」

「え、そうかな？　じゃあお前はあれだ、えっと、顔が怖い」

「は？」

俺が睨み付けると、サクマはまた笑って言う。

「クールなのは良いんだけど、感情表現乏しいじゃん」

……図星だった。笑うことはしても、怒ることはしない。落ち込むことはしても、楽しむことはしない。それがここ数年の俺だった。「それにさ、お前って緊張してても、してないように見えるよな」
「そういうことは、もっと早くに言ってくれ」

と、俺は苦笑する。今更ありがたい指摘をされても、活かすまでに時間がかかるじゃないか。

「あれ、自覚なかった？　悪いね、夜司^{やつかさ}」

そう言ってサクマはまた、へらりと笑う。

しかし、そうと分かれば努力をするだけだ。緊張してるってことをアピールして、もっとこう感情表現豊かに……めんどくさい。

「ダメだ、めんどくせえ」

と、机に頭垂れる。

「そんなのみんな同じだろう？　頑張ろうぜ」

「そうだな。頑張れ、サクマ」

「オレだけかよっ」

普段と変わらず突っ込みをしてくれるサクマ。大学では、こいつくらいしか仲良くしている相手はいなかった。顔見知り程度の知人

なら他にもいるが、くだらない話で盛り上げられるのはサクマとだけだ。

「あーあ、お前が内定もらえれば、オレだって頑張れるのになあ」
「何で？」

「だってさあ、お前に負けたくないじゃん？」

「……そうか」

サクマはこう見えて負けず嫌いな一面がある。そのことを思い出して、俺はまた息をつく。

「一ヶ月くらい、何も考えないで過ごしたい」

「内定もらえりゃ、あとは好き勝手できるだろ」

「就活のことで頭がいっぱいになるのが嫌だ。うんざりだ」

「確かに。けどさ、他の誰かのせいにしたところで何も変わらねえじゃん」

「そうなんだよな……でも、もしも一日だけ社会の枠から外れて生活できるなら」

「……可愛い女の子と遊ぶ」

「妹はやらんぞ」

「な、幼女とは言っていないだろ」

「お前は危険人物だ。ロリコン俺なら……」

そう言っただけ俺は顔を上げた。そのまま仰け反って天井を見上げる。
「好きな奴と、だったら過ごしたいな」

社会の枠組みから外れたら、俺は両親の幸福きたいに応えなくても許されるのだろう。それなら、好みの奴と一緒にくだらない話をして、どうでもいいことをして、だったら過ごしたい。

「お前、好きな奴いんの？」

姿勢を戻すと、サクマが頬杖をつきながら俺を見つめていた。

「いや」

そう答えを返すと、頭の中に美音の顔が浮かんだ。すぐにかき消して、俺はまた言う。

「いたら、とつくに告白してる」

出会い系サイトを見ても、良い奴がいなかった。年下がまず少ない。

二十六社目の面接を終えて、乗り換えの途中にある喫茶店で軽く食事をした。俺みたいなリクルートスーツを着た奴らは、どこにいたって見かける。それだけみんな、切羽詰まって行動を起こしているのだろう。

時間はまだ十五時だった。

あまりにも退屈で、けれども家に帰るのも億劫で、残り僅かなコーヒーを飲む振りをする。

悩んでいた。俺は他の奴らよりも感情を表に出すのが苦手だった。俺の信頼する大人には、一度大きな声で泣けばいいと言われたが、そんなこと出来ない。なら一度、思い切り怒ってみると良い、とも言われた。けれども、何に怒ればいいか分からなかった。

俺の目の前に立ちをはだかる壁は、相変わらず破れない。まるで元の形を記憶しているかのように、いつも変わらずそこにある。

「そっちから連絡くれるなんて、嬉しいな」

と、美音は笑った。

「良い奴がいなかったんだ」

そう返して、俺は目的地へと歩き出す。

「おれ、今日ドSって言われちゃった」

「は？」

「は？」
「夕樹に」

と、にこにこしたまま言う。

俺は何も言わずに溜め息をついた。自分のしていることは、美音を喜ばせるだけだった。

これまでと同じようにホテルへ着くと、美音も少しは落ち着いた様子を見せる。

部屋へ入ると、美音が口を開いた。

「スーツ、かつこいいね。おれ、ドキドキしちゃう」と、抱きついてくる。

キスを乞う美音を振り払い、スーツを脱ぐ。

「脱いじゃうの？」

「当たり前だ。汚れたら困るだろ」

美音は名残惜しそうにしていたが、構わずに俺はネクタイをほどく。

「……ねえ、夜司」

俺の方へ再び接近し、美音が問う。

「男女の間に、友情って成立すると思う？」

「は？」

思わず彼を睨んでしまう。それはノンケ特有の疑問じゃないか。成立したっておかしくないだろ」

世の中にはレズビアン of 女性とゲイの男性が友情結婚することだってあるのだ。むしろ、疑問に思う方がおかしい。

「……そっか」

と、またキスを乞う。

呆れながら触れるだけのキスをする、俺は美音へ背を向けた。

「シャワー、浴びてこい」

「うん」

美音は俺に従順だった。それが何故か悲しくて、俺は自己嫌悪に陥る。純粋な少年の恋心を、俺はもてあそんでいた。

10・夕樹？

よりにもよって、高内さんと塚田さんに女装姿を見られていた。美音から聞いた話では、塚田さんには完全にはばれている、という。確かに美音と高内さんは同じ中学校だから家が近かったり、最寄りの駅が同じだったりするのは当然だ。けれども、見られていたとは思わなかった。もっと注意深く周囲を見ておくべきだった。

ああ、どうしよう。

「でもさあ、高内は悪い奴じゃないし、塚田にはばれてるんだし、告白した方が早くね？」

と、ある日の帰りに美音は言った。

「告白って言っても……」

戸惑う僕に彼は言う。

「高内なんて可愛い女の子大好きって公言してたし、むしろ評価上がったりしてな」

そしてにやにやと意地悪な笑み。

僕は真剣に悩んでいるのに、美音はいつも不真面目だ。

「塚田さんは受け入れてくれたのかもしれないけど、高内さんまで分かってくれるとは思えないよ」

無意識に俯いた僕はそう言つと、じっと口を閉じた。

「……でも、ユイ」

十月の寒い風を感じながら、とぼとぼ歩く影二つ。

「おれにカミングアウトした時、どう思った？」

「え？」

顔を上げて美音を見る。

「お前のこと、嫌だって拒否しなかったじゃん？ その時、お前はどう思った？」

珍しく真剣な目をしていた。

胸の痛いところを突かれたように、僕はドキツとして前を向く。

「……気分が軽くなった。なんか、不安とか後ろめたさとか、そういうのがなくなった感じ」

「だろ？ それがあのだ二人にも分かってもらえたら？」

「……すごく、楽」

家族には言えないことを理解してくれる友人がいるのはありがたい。自分を隠す必要が無くて、ほっとする。

「言うだけ言ってみようぜ。少なくとも塚田は、理解あるはずだから」

「うん……そうだね」

美音が僕の背をぱしっと叩く。不思議と勇気が沸いてきて、僕は再び「うん」と、頷いた。

「わー、滝口の家人入るの初めてー。お邪魔しまーす」

と、遠慮無く上がる高内さん。塚田さんはむしろ遠慮がちに「お邪魔します」と、言うだけだ。

先に美音の部屋に来て荷物を置いていた僕は、これから起こりうる出来事を頭の中で繰り返しは、そのたびに緊張していた。

「部屋で待つて。飲み物取ってくる」

と、美音が奥に消えていき、僕は高内さんと塚田さんを彼の部屋へ案内する。

美音の部屋はすっきりしていた。子ども部屋と言うよりも、一人暮らしの男性が住まうような部屋だった。

「あつさりしてるわね。男ってこんなもんなの？」

「でも、滝口くんって感じがする」

口々に感想を漏らす二人へ苦笑しながら、僕は床に置いた自分の荷物を隠すように腰を下ろす。

間もなく美音がグラス四つとジュースのペットボトルを抱えて戻ってきた。

「っていうか、今日は何の用なのよ」

と、高内さんがガラステーブルにグラスを並べている美音へ言う。

抱えたペットボトルをテーブルへ置いてから、美音は言った。

「お前の知りたがってたロリータ、教えてやるよ」
はっとする高内さん。

「え？ 誰だれ？」

美音はグラスにジュースを注ぎながら、あごで僕を示した。塚田さんは何も言わずに様子を伺っている。

高内さんは僕を見ると、もう一度美音へ尋ねた。

「え？ 誰？」

「だから、そこにいるだろ」

と、ペットボトルの蓋を閉める美音。

高内さんがまた僕を見て、今度は大きな声を出した。

「ええ！？ うっそー！？」

僕、苦笑い。塚田さん、おかしそうにくすくす笑い。

「嘘じゃないよなー、ユイ」

と、美音が僕へ言って、ついにその時は訪れた。

「うん。あの、その……」

言葉で言うのが難しくて、僕は鞆から服を取り出した。

「これが、その時に着てた服なんだけど」

ピンク色の花柄。ふりふりひらひら。

「……え、藤堂くん？」

「ぼ、僕の私物、です」

高内さんは目を丸くして、口をぽかんと開けていた。

「あ、あとポシェットと、エクステ……」

身につけていたものを取り出して見せると、塚田さんが言った。

「ああ、だから髪の毛長かったんだね」

開いた口がふさがらない高内さん。そんな彼女を見て、美音が意地悪に言う。

「高内、その顔ぶさいくだぞ」

「っ！ だ、だって、ちょ、ちょっと……待って、あの、いーしゃ？」

「何？」

「あんた、分かったの？」

「うん」

友人の裏切りに、高内さんはとうとう頭を抱え込んでしまう。

「それで、藤堂くんは男の娘なの？」

と、何事もなかったかのように塚田さんが僕へ問う。男の娘、というのは女装をする少年のことで、僕は言ってしまうばそうだった。

「うん、実はそうなんだ。僕、女装が趣味で……」

全てばらした。塚田さんはいつもと変わらない笑顔を見せて、言う。

「そうなんだ。素敵な趣味だね」

「……え？」

予想外の反応に、僕は目を丸くした。

「わたし、そういうのって嫌いじゃないよ」

と、塚田さん。その微笑みはまるで、天使のようだった。否、女神か？ どちらにしても素晴らしい！

「ありがとう、塚田さん！」

すると突然、高内さんがテーブルを叩いた。びくつとして僕は思わず縮こまってしまう。

「藤堂くん、ひどいじゃない」

「え……？」

「まさかこんな、こんな……」

と、肩を振るわせる高内さん。美音と塚田さんが見守る中、僕はただ彼女の様子をうかがうしかできない。

沈黙が部屋を包み、やがて高内さんがぱっと顔を上げた。

「可愛い子だなって！」

「……は？」

「藤堂くんなら似合うわ！ 似合うに決まってるじゃない！ 何で今まで教えてくれなかったの？」

えっと、あの、状況が飲み込めません。

美音に助けを求めると、美音もびつくりしているようで首をひねるばかりだ。

「女装？ そんなの、どんと来いよ！」

と、高内さんは興奮した様子で言う。どうやら、僕は何か、彼女の中の押してはいけないスイッチを押してしまったようだ。

「りのちゃん、二人が困ってるから落ち着いて」

塚田さんがそう言うて、高内さんを落ち着かせる。

「ああ、そうね。ごめんなさい」

と、息をつく高内さんだったが、すぐにまた僕を見て言う。

「でも、可愛すぎる藤堂くんがいけないのよ」

「え、あ……ごめん、なさい」

思わず謝ってしまった。

「それよりも、その服着て見せてよ」

と、期待するような目を向けられて、僕はようやく彼女に拒絶されていなかったことに気がついた。というよりも、美音の言うように評価が上がった。

「じゃあ、お前ら外出ろ」

美音がそう言うて部屋の扉を開ける。高内さんと塚田さんが廊下へでると、美音はすぐに扉を閉めた。

「良かったな、ユイ」

と、僕へ笑う。

「……う、うん」

何だか胸がドキドキしていた。あの二人に理解してもらえて、それどころか気に入ってもらえて……本当に良かった。

11・美音？

高内がこんな奴だとは思わなかった。ましてや、女装した男を見てにやにやするだなんて。

「かーわーいーいー」

と、携帯電話のカメラ機能を有効活用する高内。先ほどから、シヤッター音ばかり聞こえていた。

「ねえねえ、今度はメイクもちゃんとやろうよ」

「あ、良いわね！ あたし、教えてあげるっ」

「え、本当に？」

「もっちろん！ ね、いーしゃ」

「うん」

会話の内容もガールズトークに限りなく近い気がする。この部屋には男がおれ一人しかいないような感覚だ。

「ありがとう」

メイクを教えてもらえることがよほど嬉しいのか、自然と笑みを浮かべる夕樹。ゆいつき

そしてそれを、すかさずカメラに収める女子二人。……何が楽しいんだ？

まったくついて行けなくなったおれは、ただぼーっとしていた。高内はもしかすると、レズビアンではないのかもしれない。

ついこの前まではたまに話をする程度のクラスメイトと、一緒に昼飯をする仲になってしまった。

「この雑誌、ずっと読んでみたかったんだ」

「そうなの？ じゃあ、貸してあげるね」

塚田からロリータファッションを中心に取り上げる雑誌を受け取る夕樹。

「ありがとう、塚田さん！」

嬉しそうにしながら、雑誌をめくってみる。

「あたし、こういうのは見る方が好きなのよねえ」

「え、高内さんも着てみたら似合いそうなのに」

「……お世辞？」

「ち、違うよっ」

ぱつと顔を赤くして、夕樹はまた誌面に目を落とした。

どうやら高内は見るのが好きで、塚田の方が夕樹の趣味と似通っているらしい。で、おれは夕樹の後について行けばかりで、相変わらず置いてけぼりだ。

「あ、この服可愛い」

女子と大差ない感覚で次々にページをめくっていく夕樹が、何だか遠く感じた。これまでは一番そばにいたはずなのに。

「滝口くんは、何か趣味とかないの？」

と、塚田が退屈にしているおれへ気を遣ってくる。

「趣味つつつても……漫画とか、ゲームとか、普通だよ」

自嘲するように言ってみせて、おれは後悔した。これでは会話が持たない。

「でも、あんまり本持つてなかったよね」

「え、そうかな？」

「うん。部屋の中、あんまり物がなかった様に見えたし」

と、塚田。一度入っただけのおれの部屋を、彼女はばっちり記憶しているらしかった。

「……まあ、借りて読むことが多いしな」

ゲームだって、友人に借りてやるのがほとんどだ。

「だと思った。他に好きなものはないの？」

「え？ うーん……」

おれは小さい頃から、何に対しても受け身だった。他の奴らと同じように体育会系のクラブに入ったこともあるけれど、高校でも続けるほど好きじゃなかった。

強いて言うなら、姉ちゃんの影響で何枚かCDを買って聴いてる、

くらいかな。でもそれも、結局は聞き手という受け身だ。

「CDは買ってるけど、聞くだけだよ」

と、おれが答えると、塚田は言った。

「コピーしたりしないの？」

「コピーって？」

「コピーバンド。よく言うじゃない？好きなミュージシャンを真似^ビするって」

塚田の口からそんな言葉が出るとは思わなかった。どうやら彼女は、いろいろなことに精通しているらしい。

「いや、別に……」

と、おれが否定すると彼女はがっかりする。

「そうなんだ、残念。でもCD買ってるなんて、すごいね」

「……そうだな」

今の時代、ネットワークを経由すればどんな音楽も買えてしまう。CDの売り上げは昔よりも落ちていると聞くし、おれのように買う若者もあまりいないという。CD、好きなんだけどな。

「わたしなんて、いつもネットで買っちゃうから、ちょっと羨ましいな」

と、塚田は言う。それが心からの言葉なのか、そうでないのかは分からなかった。

けれども、その後の言葉は妙に新鮮で。

「バンドやってる人たちってかっこいいよね。ギター弾いたり、歌ったりして、憧れない？」

そんな風に意識したのは初めてだった。確かに音楽を作る人たちはすごいと思うし、演奏するのもすごいと思う。ただ、憧れを抱くほどの興味はなかった。

「……ああ、言われてみればそうかも」

結局おれは、人と違う道を歩いていると思ひ込んでいただけで、受け身というつまらない世界に捕らわれていたのか。

「滝口くんは、ライブとか行ったことある？」

「うつん、ライブは一度もない。姉ちゃんはよく行ってるけど」

「あ、お姉さんいるんだ？　じゃあ、今度誘ってあげるね」

「え？」

目を丸くしたおれに彼女は言う。

「わたしね、好きなバンドがいて、たまにライブ見に行くの」

「……へえ」

「りのちゃんは興味ないから別の人と行ってたんだけど、その子とあまり都合も合わなくなっちゃって」

なるほど、だからおれを誘って一緒に行こう、というわけか。

「滝口くんさえ良ければ、一緒に行こう」

と、塚田が微笑む。

もしそれが嘘であっても、嬉しかった。塚田はおれの世界を広げてくれた。新しい世界を教えてくれた。

夕方になると、たまにメールが来る。

『今夜、会えないかな？』

社会に埋もれた性欲を発散させようという、いつか出会ったおじさんからだ。

夜司にキスされたあの日から、おれは彼のことばかり考えていた。やつかさそれ以外のことと考えられないくらい、真剣に。

だからこういった誘いにも、いっさい返信しなくなっていた。彼からのメールなら、すぐにでも返信を打つのに。

けれども、これを恋と呼んでいいのか、おれにはまだ分からなかった。

夜司のことは好きだ、大好きだ。毎晩、会いたいと思う。

夜司は大人だから、きつとおれの気持ちを知りながら、他の男たちと同じようにおれを扱う。それはとても悲しくて、苦しい。おれの気持ちが彼に届いていないのは、すごく嫌だった。

だけとおれは、やっぱり彼から離れられなくて、まるで飼い主に従順な犬のように、夜司の元を目指してしまう。

分かっているのに、止められない。

苦しいのに、考えてしまう。

泣きたくなるくらい胸を痛めるのに、夜司はおれのことなどちつとも考えてくれやしない。

おれはいつだって、夕樹の後ろにいる彼を想っているのに。

「夜司、好きだよ」

四度目の夜だった。

「……ねえ、夜司」

おれに背を向ける彼の、痩せた身体にそつと手を触れる。

「夜司は、どうしておれと寝てくれるの？」

彼の身体がぴくつと動いた。

「分からない」

と、夜司が言う。

「分からないけど、お前が一番、都合が良い」

「……おれは、犬？」

思い切って尋ねると、夜司は頷いた。

「ああ。綺麗な犬だ」

嬉しくなかった。おれが本当は、愛情を求めて飢えていることを知っているのは、夜司だけなのに。

「おれは夜司に恋をしている」

「……」

「それなのに夜司は、ひどいよ」

今更相手を間違えたなんて考えても、遅い。

ずっと背を向けていた夜司が、上半身を起こした。まさか、帰るだなんて言わないだろうかと思っていたら、夜司はおれを見下ろした。

「本当のお前は、どこにいる？」

12・夜司？

目を丸くする美音をただ見下ろした。

「俺はお前のことが分からないんだ。お前は一体何者で、俺に何を求めているんだ？」

聞きたかったことを言葉にすると、幾分か気が楽になった。

「おれは美音、滝口美音。夕樹^{ゆいつき}の友だちで、夜司^{やつかさ}のことが好き」

最初に出会った頃よりも大人びて見えた。この頃の男子は成長期だから、身長だつて伸びる。

「おれがあんたに求めるのは、恋だよ」

と、美音は身体を起こした。

俺の頬に手を添えて、キスをする。

「おれはやっぱり、恋がどんなものか分かっていないから、それを夜司に教えて欲しい」

美音の手を取って、今度は俺の方から口づけた。深く舌を絡めて、美音を侵す。

恋なんて辛いだけだ。大多数^{たいてい}の世界に生きていれば、それも人生のスパイスとして楽しめるのかもしれないが、俺たちには辛いだけ。

「やめた方が良い」

「どうして？」

彼の細い首に右手を回す。

「お前が思うよりも、辛いものだ。どんなに苦しんだところで、最終的には何も得られない」

美音は微動だにしなかった。じつと俺の目を見つめて、何か考えるようにしている。

「夜司は恋を知ってるんでしょ？ なら、おれにも教えてよ」

嘘だった。美音はすでに恋を知っている。俺に恋をして、十分に辛い気持ちえ、苦しみを味わっているはずだ。

「その人に殺されたいと本気で願えるなら、それが恋だ」
もう片方の手を、美音の首に持つて行く。

「……殺されるのは構わないけど、おれは生きたいよ」

と、美音は俺の両手を退かした。

「生きて、夜司に愛されたい」

「……そうか」

美音が本当に知りたいのは愛だ。そしてそれは、かつての俺が望んだものとまったく合致している。

「おれは夜司が好き」

と、俺の胸にもたれかかってくる。

俺は何も言わずに彼を抱きしめた。俺は、この幼い少年に対して愛しさを覚えていた。切なさやときめきとは違う、何か小さな亀裂から宝石を取り出すような、慎重な痛み。

「弟には、何て言えば良い？」

「隠し通さないの？」

「いつかはばれる」

「……その時は、おれが先に好きになつたって言おう」

美音は俺のために犠牲になつても良いらしい。

「そしておれは、夕樹の友だちをやめる」

簡潔な答えだった。美音は俺の腕から抜け出して、顔を近づけた。

「夜司はそのまま」

と、どこか遠くを見て言う。その意志の強さは脆かった。触れれば、すぐにでも壊れてしまう。

「美音」

これ以上先へ進んでしまつたら、俺は彼を愛してしまう。

弱くて、脆くて、危なげで、ませていて、生意気で、意地悪で、馬鹿で、ガキで。臆病な本心を隠して、怖い物知らずを演じて、目の奥に孤独を押し込めて、強気な態度で笑う。

それでも、それこそが俺の求めた一つの理想。俺が支えてやるのだと、強がった弱虫。

……美音。社会の枠組みから外れても、そばにいて欲しいと願う。
「夜司？」

首を傾げる少年へ、そつと口づける。

「俺は大人じゃない。まだ未熟で、不完全だ。それでも美音、俺はお前を」

「おれだつて不完全。だけどおれからしたら、夜司は完全。だからおれは、夜司が好き」

「……ずっと一緒にいよう」

大多数からはじき出された俺を、美音は優しい顔で受け入れた。

「それってプロポーズ？」

「ああ、そんなようなものだ」

弟は元気だった。

何かと妹の世話を焼くし、家事も手伝う。

ぼーっとしている俺を見ては、呆れたように笑った。

「やつちゃん、暇なの？」

「いや、やることはたくさんある」

「じゃあやりなよ。退屈してないでさ」

そしてまた、忙しそうに家の中を行ったり来たりする。

「……そうだな」

就職活動はまだ終わっていない。二十六、二十七とまた連続で落ちた。サクマも相変わらず連敗記録を更新し、未だに二人とも負け組だ。

大学も授業が始まり、今は文化祭の準備で忙しい。

「そつだ、夕樹」

「何？」

妹のぬいぐるみを大量に抱えながら、弟が俺の前で立ち止まる。

「お前ら、文化祭何やるの？」

「あー、何だろうね。分かんないや」

と、後をついてくる妹から逃げるように洗面所へ。

兄弟間の会話も、本当に少なくなった。ただでさえ五つも年が離れているので、関心事がずれる。

「やつちゃん、ゆいがあそんであげてって」

と、何故か俺の元に来る妹。

「は？」

「やつちゃんはたいくつだから、あーちゃんとあそぶの」

どうやら俺の気を紛らわせようと弟が頼んだらしい。悪くはないが、妹の相手をするとはからどつと疲れが出る。

「ゆいと遊ぶ」

「ちがうのー。ゆいがやつちゃんとあそんでっていったのー」

「やつちゃんはな、これから仕事なんだ」

「しごとー？」

「ああ、お昼寝するんだ」

「！ おひるねはおしごとじゃないよー」

「大人には仕事なの」

と、立ち上がる。

「えー、だってママは、おひるねはあーちゃんのおしごとだっていつてたよ」

歩き出した俺の後に付いてくる妹。昔は可愛かったが、喋るようになるという疲れる。

「じゃあ、朝子も立派な大人だ」

「あーちゃん、おとな？」

「ああ、大人だ」

「……やつちゃん、おひるねしちやだめ！ あーちゃんとあそぶのー」

頭も回るようになってきて、簡単には騙せなくなってきた。

「じゃあ、一緒に寝るか？」

「おひるね？」

「そう、お昼寝だ。朝子にとっても俺にとっても大事な仕事だ」

「でも、くまさん、ゆいにとられちゃったの」

「は？」

振り返ると、妹は俺を精一杯見上げて言った。

「くまさん、きれいきれいするんだって」

合点がいった。妹のぬいぐるみを洗おうというらしい。いや、もしかすると今現在洗っているのか。

「やっちゃんと一緒に嫌か？」

「いやじゃないけど、あーちゃん……つぶされちゃう」

切実な問題だった。どうも妹は、背の高い俺よりも背の低い弟の方が好きらしい。まあ、無理もないのだけれど。

「いいか、朝子。ゆいもな、いつかは俺みたいにでかくなるんだぞ」と、俺はその場にしゃがみ込んで言った。

「朝子だって同じだ。大人になると、みんなでかくなる」

「そうなの？」

「ああ。だからゆいだって、いつかはお前を潰すんだ」

「潰さないよ！ 何言ってるんだよ、やっちゃん」

と、タオルで手を拭きながら弟がやって来た。

「っていうか、何の話？」

「昼寝の話」

「やっちゃん、やることってもしかして？」

「ああ、何か文句あるか？」

いつの間にか妹は弟の脚にしがみついていた。

「母さんに叱ってもらおうか？」

と、弟が呆れたように言って居間へと向かう。

俺は腰を上げると、その背中に舌を出してから自室へ向かった。

普段と変わらずに接している限りでは、弟が俺と美音の関係を疑っている様子はない。それよりも今は毎日楽しそうにしているし、不真面目な兄のことなんてちっとも気にしていないようだ。

それならそれで良かったし、弟が高校生活をエンジョイしているなら、俺もあまり心配することはなかった。

13・美音？

夜司^{やつかさ}が分かつてくれた。おれに『好きだ』と言ってくれた。「ずっと一緒にいよう」と。

昔は意味の分からなかったバラードも、今なら理解が出来る。言葉だけでは足りない、想うほどに募る愛しさ。想うほどに、胸を刺す痛み。

「明日、お姉ちゃん帰ってくるって」

と、夕食前に母さんが言う。

「へえ、珍しいね」

適当に相づちを打って食卓の上を見回す。いつもと変わらない簡単なおかずばかりだ。

「これ、探しておいて、だって」

と、母さんは携帯電話の画面をおれに向けた。そこに書かれた指示を読んで、頷く。

「ああ、分かった」

姉ちゃんが昔よく聞いていたCDだった。確か引き出しか棚にあるはずだ。

「美音に直接メールすればいいのにねえ、まったく」

と、呆れた風に溜め息をつく。おれはただ笑いながら、帰りの遅い父さんを思った。昔、本気で二人が離婚の話し合いを進めていたのを知っているだけに、こういう日は不安になる。その一方で姉ちゃんはおれたちの存在が二人を喧嘩させることもあるのだと教えてくれた。だからたまに、おれは家以外の場所で夜を越す。

二人きりの夕食は会話が少ないおかげでさっさと終わった。

忘れないうちに姉ちゃんの部屋に入って目的の物を取り出しておこう、と考えてから「ごちそうさま」と、言う。

食器を片付けることなく、姉ちゃんの部屋へ向かった。

久しぶりに扉を開けると、変な匂いがした。電気を付けて、窓を少しだけ開ける。

冷たい空気が変な匂いをさらっていき、おれは机の引き出しに手をかけた。昔から変わらぬにあるその中からCDを探るが見つからない。

仕方なく別の引き出しを開けてみたが、記憶にないのでやっぱり違った。

それにしても、何故今更CDなんて取りに来るのだろう。おれにCDコンポを譲ったから、CDももう聞かないと全部置いていたはずなのに。

引き出しを全て探したが見つからず、おれは棚に目を向けた。

本来は本棚のはずが、CDラックと化している。それもレンタルショップに並んでいるCDのように、ずらりと。

よく聞くCDを引き出しに入れていたのは五年以上も昔の話だったと思い出す。きっと、姉ちゃんは家を出る際にすべてこの棚に入れてしまったのだろう。

おれが幼稚園に通っていた頃は、両親もまだ仲が良かった。古い記憶では、父さんと母さんの好きだった曲に合わせて、姉ちゃんがおもちゃのピアノを弾いていた。おれはただ、その音楽に合わせて手を叩いた。

音楽一家とまではいかないが、両親ともに音楽が好きだった。姉ちゃんはその影響でCDを買うようになったと言い、おれはその姉の影響を受けて育った。

「お、あった」

一枚のCDを取り出して、ジャケットを見つめる。

今ではすっかりその地位を確固たるものにし、かつての栄光ばかりがテレビに取り上げられる四人組のロックバンドだ。おれも彼らの曲は好きで、たまに聞きたくなる。

塚田はきっと、曲を聴くだけではなく、バンドそのものに憧れを抱いているのだろう。歌って、ギターを弾いて、ベースを奏で

て、ドラムを叩く。大勢の人に囲まれて、ステージでスポットライトを浴びる。そんな姿に。

姉ちゃんの部屋を出て、自分の部屋に戻った。

約半年前に譲り受けたコンポの電源を入れ、取り出したCDをセツトする。

動作音がしたあとに一曲目が流れ出した。姉ちゃん曰く、叶わな
い恋を歌った曲だ。

ベッドに座り、CDケースから歌詞カードを取り出して横へ置いた。

歌を歌うにしても、歌詞を書く人が必要だ。それも、メロディにあつた言葉でないとダメなわけだから、それって結構大変だ。普段、何気なく聞いている曲も、おれには想像できない努力の賜物なのだろう。

CDに合わせて、小さな声でサビを歌う。

それから間奏。 ギターソロだ。

おれにはよく分からないけれど、かつこよく聞こえた。アコースティックギターに代わって鳴り響くエレキギターの、ギューーンという音。

叶わない恋は、最後にどうなるか分からずに終わる。ただ、あなたの幸せを毎日祈っていると歌うだけで、そこから先は何もない。

当時はよく分からなかったけれど、今はなんとなく分かる気がした。恋には二つの側面があつて、一つは辛い気持ちを味わうだけの苦しい面で、もう一つは相手の笑顔を望んだり幸福を祈ったりして安らかな思いに包まれる面だ。

つまりこの曲は、苦しいけれども相手のことを想って、ただ幸せになって欲しいと祈るものなのだろう。おれが夜司を想う時に感じる、彼さえ幸福でいてくれるならそれでいい、という気持ち。

「……ああ」

恋だ。これが恋だ。

後ろに倒れ、歌詞カードで両目を覆う。

けれどもおれは、夜司のそばにいたい。誰よりもあの人のそばにいて、幸せになりたい。結婚なんて出来なくて良いから、ただずっと一緒にいたい。

悲痛な声でヴォーカルが叫ぶ。あなたの幸せを祈っている……あなたの幸せを、今はただ……そしてフェードアウト。

「カラオケ、行きてーなあ」

二曲目のポップなリズムに合わせるように、身体を起こす。

歌詞カードをCDケースにしまつて、ベッドを降りた。

おれも何か、始めてみよう。

翌日、学校から家に帰る途中で寄り道をした。楽器屋だった。そんなところに入るのは初めてなので、ちよつとドキドキしていた。

店内に並べられたギターはどれも輝いて見え、近くにあった一つのぞき込んで値段を見た。一万と四千円だった。

奥の方へ行くと値段が上がった。先ほどとは桁が違い、さすがに高価すぎると思うてすぐに店を出る。

ギターは意外と高かった。楽器だから当然といえば当然か。……でも、あれを軽音部の奴らは買つて使うんだから、すごいな。

だが、おれだつて金がないわけではない。男たちと寝て手に入れた金がほとんど手つかずで残っている。ただ、それを使ってギターを買うのは気が引けた。

「はい、これ」

おれがCDを手渡すと姉ちゃんは言った。

「ありがとー！ 大学でね、同じ寮の子なんだけど、趣味の合う友だちが出来たの」

「ふうん」

夕飯の支度で忙しくする母さんの代わりに、おれは姉ちゃんの向かいへ腰を下ろす。

「でね、CD貸してあげるって言ったんだけど、家に置いてたの忘れて」

と、姉ちゃんは笑った。

「つつーか、何で夏休み戻ってこなかったの？」

「そうよ、美歌^{みか}。忙しかつたの？」

と、母さんが台所から口を挟んだ。

姉ちゃんはCDを鞆にしまつて返す。

「だって大した距離じゃないもん。帰ってこようと思えば二時間で着くんだよ？」

どうやら、めんどくさかつただけらしい。

「だからって今日みたいな日に来なくても」

と、母さんは困ったように言うが、顔は嬉しそうだった。

「大丈夫、ご飯食べたらずぐ帰るから」

底抜けに明るい調子で笑う。姉ちゃんが大学の寮に入ったのは、この家で両親を刺激しないためだった。それなのに、おれにはずつとここにいると言う。

「で、高校生活はどうなの？ 楽しい？」

「うーん……まあ、楽しいかな」

と、おれが答えると、姉ちゃんは嬉しそうにおれの頭に手を伸ばした。

「そーかそーか。それは良かった。好きな子は出来た？」

そう言いながら、おれの頭を撫でる姉ちゃん。一年前からおれが無断外泊するようになった理由を、彼女は知っているはずなのだけだ。

「いないよ。仲の良い女子はいるけど」

と、おれは言った。聞き耳を立てていた母さんが「あら、初耳」と、どこか嬉しそうに呟く。

「おお、青春だねえ。いいなあ、あたしもあの頃に戻りたいなあ」
「姉ちゃんはどうなの？」

聞き返すと、姉ちゃんはおれの頭から手を離して言った。

「楽しいよ、毎日。アルバイトはきついけど、それも含めて楽しくやってる」

ふふふ、と満足げに笑う姉ちゃん。おれは一つ息をついて、言った。

「それなら良かった」

「あ、今、馬鹿にしたでしょー？　ちよつと見ない間にまた生意気になっちゃって、こいつは」

と、姉ちゃんはテーブルに身を乗り出しておれの頭を先ほどよりも強く撫で始めた。痛い。

「ちよ、姉ちゃん！　痛いって、あ、ちよつと」

椅子から降りて避難する。しかし姉ちゃんは、久しぶりに弟と触れあえるのが嬉しいのか、逃がしてはくれなかった。

「みーおーんー？」

がしつと捕まえられ、また頭を撫で回されるかと思いきや、姉ちゃんはやんは言った。

「あれ、あんた大きくなった？　背、伸びてるじゃん」

「え？」

姉ちゃんから解放されて、おれは普通に立つ。正面で向かい合う姉ちゃんは、おれよりも五センチ近く小さかった。

「あー、やっぱり大きくなってー！　母さん、美音ったら可愛くない！」

騒ぎ立てる姉ちゃんに母さんが笑う。

「当たり前でしょ。男の子だもの」

「えー、あたしだって背高い方なのにー」

と、文句する姉ちゃんにおれは呆れてしまった。意識して親を笑わせようと必死になる様子は、まさに親孝行だ。おれにはやっぱり出来そうにない。

「ってゆーか、あんた髪長いよ。テラロング」

「え？」

「切ってあげようか？　男ならばっさりしないとねー」

と、手をはさみの形にしておれに向ける。

「別にいいよ。つつか、これくらい普通だし！」

もちろん、そんな言葉で諦める姉ではなかった。

「みーおーんー？」

と、再び迫ってくる姉ちゃん。危険を感じて逃げ出すおれだが、やっぱり姉には勝てない。だが正直、おれもいじめられるのが少しだけ楽しかった。姉ちゃんに脇腹をくすぐられて、必死に抵抗をする。

それでも姉ちゃんはきつと、別れ際にまた言うのだ。

『父さんと母さんを泣かせちゃ、ダメだからね』

非行に走るな、という意味ではない。二人が上手くやっていけるよう常に見ている、ということだ。それと同時に、二人を刺激するな、というメッセージでもある。

夕樹はおれの家庭を羨ましいと言ったけれど、羨ましいのは夕樹の方だ。夜司のような兄がいて、朝子ちゃんのような可愛い妹がいて、普通の両親がいる。

普通の、ごく一般的な家庭。離婚なんて言葉を両親の口から一度も聞いたことのない、とても平和な家庭だ。

14・夕樹？

美音が珍しく一人で行きたいところがあると、先に帰ってしまった。

「藤堂くん、駅前の百円ショップ行こう」

「え？」

「百円を舐めちゃダメよ」

と、高内さんが声をかけてきた。いろんな意味でドキツとしたが、話を聞いていくとメイク道具は百円ショップで揃えられるから、ということらしい。

「別に買うのは他の日でも良いんだし、今日は見るだけでも」

高内さんがそう言っただけで僕を見るので、目を逸らして頷いてしまう。

「そ、そうだね」

「よし、決定！ さっそく行きましょう、そうしましょう」

と、るるるん気分で歩き出す高内さん。普段はどちらかというとクールな印象の強い彼女だが、こうした一面もあり、とても可愛い。

僕は気を取り直して彼女の隣へ立った。

「塚田さんは？」

「いーしゃは今日、お稽古なんですって」

「けいこ？ 何かやってるの？」

「ピアノよ。あの子、外見に似合っただけで音楽好きだから」

「そうなんだ、初めて知った」

二人で歩くのは、あの体育の授業以来だった。保健室へ連れて行かれた後も、高内さんは僕のそばに付き添ってくれていた。

僕はもう、それ以来どうして良いか分からず、ただ高内さんはやっぱり素敵な人だと想うばかり。僕自身、頼りない性格なので、しっかり者の高内さんにいてもらわなければダメなんだと思う。

下駄箱で靴を履き替え校舎を出る。

高内さんはやっぱり笑顔で、いろんなことを喋った。僕は頷いた

り、相づちを打ったり、話を聞いていて。

学校から離れたところで、高内さんは唐突に呟いた。

「あたしね、藤堂くんを見て気づいたの」

「何に？」

僕が首を傾げると、高内さんは足元に目を落として言う。

「女の子が好きなんじゃなくて、可愛い子が好きなだけ。あたしはやっぱり異性が好きだ、って」

ドキッとした。それは僕に対しての告白なのか、ただのカミングアウトか、それとも……。

「だからね、その……」

高内さんが何かを言おうとして口ごもる。そんな彼女を見るのは初めてで、思わず胸がときめく。

そうしている間に駅前へたどり着いてしまった。行き交う人が多くなり、高内さんは言った。

「やっぱり何でもない」

「……そう」

彼女が何を言いたかったのか、僕は勇気が無くて聞けなかった。百円ショップに入ると、高内さんは慣れた様子で化粧品売り場へ向かう。

その後に付いていくと、想像していたよりも数多くの商品が並べられていた。

「とりあえず基本はファンデーションとチークに、アイメイクはこっち」

と、高内さんが隣の棚を指さす。

「これ、全部百円？」

「もちろんよ」

「……すごいなあ」

見ているだけなのにわくわくしてきて、僕は思わず財布を探った。所持金は……千二百円。そうだ、今日は漫画を買おうと思って多めに持ってきたんだった。

「買っ？」

と、高内さんが僕の顔をのぞき込んでびくつとした。

「あ、えっと……悩んでる」

「そう。まあ百円だし、買って損はないと思うけどね」

と、高内さんが別の棚に目を向けて、僕は小さく息をついた。確かにメイクはしてみたいし、いつかは買うつもりでいた。けれども、今日買うべき物か？

「あ、藤堂くん」

呼ばれて振り向くと、高内さんは手にした何かを僕へ差し出した。「マニキュアも一つくらい持ってるの良いかもよ」

それは僕の好みときわめて近いピンク色のマニキュアだった。口リータにも似合いそうだ。

「確かに良いかも」

と、高内さんからマニキュアを受け取って眺める。これも百円なんだよね……うーん、買おうかな。

結局僕は高内さんに勧められたものの全てを買ってしまった。基本的なものばかりではあるが、化粧水や化粧下地なんかも売られていたので次はそれらも買ってみたと思う。

そんなに大きな買い物じゃなかったので鞆に入った。これなら家族にばれないで済む。

「ネットでもメイクのやり方って載ってるから、そういうのを見て何回か試してみると良いわ」

「うん」

「慣れるまで大変だけど、上手くいくと嬉しいし」

「うん」

「自分の顔を知るのにも良いのよ、メイクって」

「うん」

電車の中で二人、がたんごとんと揺られていた。

「藤堂くん、話聞いている？」

「うん。……え？」

はつとして、僕は高内さんを見た。

「もう、おもちゃを買ってもらった子どもみたい」

と、呆れる高内さん。まったくその通りで、僕はすっかり浮かれていた。今日の夜、みんなが寝静まった頃にさっそくやってみようと考えていたのだ。

「可愛いから許すけど」

どこかすねたように言って、高内さんは口を閉じた。僕はただ「ごめん」と、謝る。

高内さんが降りるのは僕よりも三つ後だった。アナウンスが僕の降りる駅名を告げて、ちよつと悲しくなる。

がたんごとん、会話のない二人。

徐々にスピードを落とした電車が、駅に着く。

「じゃあ、また明日」

と、僕は席を立って扉の方へ。

開いた扉の先に足を踏み出すと、後ろから彼女の声がした。

「藤堂くん！ あたしね、あたしっ」

立ち止まって振り返ると、必死な様子で高内さんが扉のそばに立っていた。

「藤堂くんのが、好きなの……！」

「っ……！？」

恥ずかしくて顔が真っ赤になる。高内さんはすると、すっきりした様子でにっこり笑った。

「返事、待ってるから」

「た、高内さん！ 僕、僕も」

アナウンスが鳴って扉が閉まる。言わなきゃ、と思った。今伝えないと、後悔する。

「僕も高内さんのこと、前から好き！」

扉の向こうで彼女が頷いた。動き出す電車を見送って、僕は今起きた出来事を頭の中で反芻する。……告白、しちゃった。

だって、彼女が僕のことを好きだって言うから……りよ、両想いって奴だ。そう、僕は高内さんとめでたく両想いで……ば、僕たち、付き合うのかな？ 恋人になったら、まずは何をするんだっけ？ えーと、キス？ あ、セックス、はもつと親密になってから。

ああ、嬉しすぎる！

しかし、僕の一日はまだ終わりではなかった。

「朝子、正直に言ってごらん。どうしてこれがここにあるの？」
両親が僕を見ていた。

「……い、いすのした、にあった、から」

と、朝子は目を逸らして言う。それが嘘であることを、僕は見抜いていた。この前と同じ場所にあるはずなんてないのだ。

「嘘はダメだよ、朝子。怒ってないから正直に答えて」

「っ、ひぐっ、あ、あーちゃん、あーちゃん、なにも……うええーん」

泣いてしまった。子どもは卑怯だ。

僕は朝子から取り上げたヘッドドレスを手に、自分の席へ着く。何もかもが終わりだった。

「今まで、隠しててごめんなさい」

と、僕は父さんへ言った。母さんが朝子をあやし、僕はそんな妹を憎らしく思う。

「ちよつと待ってて」

そう言っただち上がり、僕は自分の部屋から秘密の箱を取り出し、その中のいくつかを手に戻った。

「僕、こういう服を着るのが、趣味なんだ」

テーブルにそれらを置くと、両親はほぼ同時に溜め息をついた。

「女装してたのか」

と、父さんが言う。

「……うん」

「朝子は知ってたのね」

大声で泣きわめく朝子の背をぽんぽんと叩く母さん。

知っていたと言うより、僕が遊びのつもりでヘッドドレスを付けてあげたのをすっかり記憶し、かつそれを朝子は気に入っていたんだろ。だから僕の部屋に入ってはヘッドドレスだけを盗み出し、お気に入りのぬいぐるみにかぶせていたのだ。

「でも、僕はただ女装するのが好きただけだよ」

誤解しないで欲しいと言うと、父さんは何も返してくれなかった。「僕は女の子が好きだし、彼女だって出来た。だから、僕のはただの趣味なんだ」

玄関の方から音がした。どうやら、やっちゃんが帰ってきたらしい。

「女の子みたいな可愛い物が好きで、僕は決して男の人が好きとかじゃない」

「……どうしたの」

疲れ切った顔でやっちゃんが顔を出す。母さんがテーブルの上を指さすと、やっちゃんはそれを見て目を丸くした。

「夕樹が女装していたんだ」

と、父さん。

僕はさらに居心地が悪くなって、何も言えなくなってしまった。

「……女になりたいとか？」

「違う！僕はただ、可愛い物が好きなんだ」

やっちゃんの質問に僕が返事をすると、やっちゃんは興味がなさそうに言った。

「ただの趣味なら、特に問題ないだろ」

と、自分の部屋へ行ってしまう。見放されたような気がして寂しくなる。

けれども、僕の言いたいことをやっちゃんが代わりに伝えてくれていた。ただの趣味なら問題はないはずだ。

父さんが溜め息をつきながら寝室へ身を隠し、母さんはまだ朝子

をなだめていた。

僕は拳をぎゅっと握りしめて、父さんにも聞こえるような声で言う。

「やめろと言われても、僕はやめないから！」
だって好きなんだもの！

15・夜司？

自分の部屋に入って俺は息をついた。胸がドキドキしている、あの重たい空気と弟の女装趣味で。

「ってゆーか、何だあの服。ふりふりでひらひらで、ゴスロリとかロリータとか、もうコスプレみたいなもんじゃないか。それをあの弟が？ 否、確かに弟は昔から気が弱かったし頼りなかったし、小さい頃はいつもぬいぐるみを抱いてて、それはそれで可愛かったけれど……そういう趣味だったなんて。」

「ああ……」

その場にしゃがみ込み、頭を抱える。両親がどう思っているか確かめもせずに逃げ出してしまったことを、俺は後悔していた。弟の趣味が受け入れられなかったら、俺はどうなる？ 勘当されるのか？ 考えたくもない。

立ち上がり、鞆を机の上に置く。上着を脱いで、適当に放り投げた。

隣の部屋から物音がした。弟も自分の部屋に逃げたらしい。

俺がベッドに腰を下ろすと、壁の向こうからがそこそと音がした。あの服をしまっているのだろうか。

「……」

たぶん、ここで俺が声を出せば弟にも届く。壁の厚みは大したものじゃなく、ちよつと大きめの声で喋れば問題ない。

けれども何を話したら良いかが分からなかった。弟はきつと落ち込んでいるはずだ。救いの手を差し伸べてやりたいと、本当に思う。

「やっちゃん、ありがとう」

ふいに弟の声がしてびつくりした。俺が先に声をかけるつもりだったのに、先を越されてしまった。

「……なあ、夕樹」

壁の方に身を寄せて、俺はまとまらない考えを口にする。

「あのさ、俺は、その…… お前が女装するのは構わないと思ってる」
『……うん』

「父さんと母さんがどう思ったかは知らねえし、どうしても思ってたの
かも分かんないけど……俺は、気にしないから」

弟も壁のそばにいろらしく、こつともたれるような音がした。

「つつーか、家族だからって何でも受け入れられるものじゃないと
思うし、隠しておきたいことのひとつくらい、みんな持つてるだろ
うし」

『やつちゃんも、隠し事ってある？』

「え、俺？ 俺は……まあ、そうだな」

弟よりもひどい隠し事を俺は持っている。口にすると、家庭が崩
壊しかねないほどの爆弾を。

「言いたくないことが、ひとつだけある。聞かれても、答えたくな
いことが」

『そうなんだ。じゃあ、聞かないでくね』

「うん……だから、その、お前はお前のままで良いよ。女装したき
やすればいいし、無理して男らしくすることない。今までと変わら
ずに過ごせよ」

俺の口から出る言葉は俺が聞きたい言葉だった。カミングアウト
した時、そうして受け入れて欲しかった。

『……ありがとう』

弟の声が少しだけ震えていた。鼻をすする音がして、俺は弟が泣
いていることを知る。

「これくらい、当たり前だ。俺はお前の兄貴なんだぜ」

壁一枚隔てた向こうで弟がくすつと笑う。

『そうだね。……ありがとう、お兄ちゃん』

「おう」

数年ぶりにお兄ちゃんと呼ばれて胸がくすぐったくなった。

しばらくの間、時々聞こえてくる弟の嗚咽を聞いていた。

「酒でも飲むか」

『……僕、まだ高校生だよ』

「今夜は特別だ。飲みたくないなら、俺が代わりに飲んでやるよ」

『……飲む』

俺はにっこり笑って、弟へ言った。

「じゃあ、こっち来い」

弟が涙を拭いて立ち上がる。自分の部屋を後にして、俺の部屋の扉を叩く。

すぐに俺が扉を開けてやると、弟は泣き止まない顔のまま微笑んだ。俺がカミングアウトした時には、真っ先に弟に受け入れて欲しいと思った。

「お前、知ってたんだな」

いつものホテルで、俺は言った。

「え、何のこと？」

と、美音は首を傾げて俺を見る。

「夕樹のことだ。あいつ、女装が趣味だった」

「……ああ、ばれたんだ？」

窓際に立つと、遠くにちらつと夜景が見えた。

「妹がな、あいつの衣装を盗んで、それで発覚したらしい」

「そっかあ。朝子ちゃん、お手柄だね」

美音が隣へ立ち、俺と同じ方角に目を向ける。

「だが、あいつはノンケだ」

「うん、知ってる」

「女装したり、可愛い物を集めるのが趣味なんだと」

「そうそう。よく知ってるね、やつかさ夜司」

俺は美音を軽く睨み付けた。

「俺を何だと思ってる？」

「就活で忙しい大学生」

「そっでしょ？」と、言わんばかりに美音が上目遣いをしてくる。

「……そっだな」

ベッドへ歩み寄り、無造作に寝転がる。

「あれはコスプレみたいなので、究極的には自己満足だと話したら、母さんは理解ってくれた」

美音が俺の頭の横に腰を下ろす。

「お父さんは？」

「何も言わない。面倒なことが嫌いな人だから、関わりたくないんだろう」

「寂しいね」

「そうか？ 生まれてからずっと変わらないからな。でも、俺はあの人の気持ちが分からない。弟も、そうだと思う」

美音の左手が俺の頭を撫でた。額にかかった髪を横へどけて、美音は言う。

「おれもそんな感じだよ。両親のことが分からない」

「……そついや、お前の家って」

と、俺が視線を向けると、美音は言った。

「姉ちゃんがいるけど、今は大学の寮に入ってる。だからおれと両親の三人暮らし」

なんとなく納得した。美音はきつと、親との距離が遠いのだろう。「だから、こうして外泊しても怒られないんだな」

「え、おれ何も言っていないのに」

目を丸くしながらも笑う美音。その、少年から大人へと変わりつつある手を取って、手のひらに口づけた。

「ごく普通の家庭なんてどこにもない。誰だって、何かしら問題を抱えているものだ」

「……そつだね」

美音が寝転がり、俺の頬にキスをする。

「今日の夜司は、ちよつと哲学的」

「いろいろ思うところがあってな。弟がカミングアウトして、俺もようやく現実に直面した」

「……カミングアウトするの？」

「すぐにはしないさ。心の準備が必要だ。だけど、怖くて出来そうもない」

と、俺は溜め息をつく。

「おれもきつと、出来ないなあ。っつーか、おれの場合は本気で家庭が壊れる^え」

みんなばらばら、ぐしゃぐしゃに壊れて……親子の縁も切れる

美音の言葉は、張りつめたピアノ線のようにだった。切れそうで切れない、切ることが出来ない。

「だからおれは、ずっと黙ってるよ。夜司のことも、ばれない限りは誰にも言わない」

と、俺の方に身を寄せて、目を閉じる。

「……俺は、でも、いつかは言わなくちゃ。今までは隠し通せると思っただけど、現実には甘くないんだ」

美音の呼吸音。

「女と結婚したって離婚したら意味がない。なら、弟のように主張する方がよい」

自己主張をして、社会に反していても自分は自分だと、声高く叫んで。

「やっぱり俺、ダメなんだ。どうしたって、男を抱きたいと思う」

「それで良いよ、夜司。もしカミングアウトして、両親からひどい仕打ちを受けた時は、おれと二人で駆け落ちしよう」

目を開けた美音がそう言っ、俺の頭の横に手をついた。俺を見下ろす体勢になって言う。

「それで、二人幸せに暮らすの。おれは夜司のそばにいられるなら、今まで築き上げてきた物全てを捨てても構わない」

顔を近づけてキスをする。

美音の言っていることは空想だった。男二人が駆け落ちして上手くやれるはずないし、それこそ海外へ行かないと俺たちは祝福されることなどない。

「無理だ。お前はまだ子どもだし、せめて大学を出ないと今の時代、

職にありつけない」

「フリーターで良いよ」

「アルバイトだって、そう簡単には見つからないぞ」

「……じゃあ、身体売る」

と、美音が俺を見下ろした。俺は少し戸惑って、彼へ言った。

「もう、やめたんじゃないのか？」

美音は答えなかった。別に今更、彼を独り占めしたいだとか、他の男に触れさせたくないとかを言うつもりはなかった。初めは俺も、そっち側の人間だったから。

「お前が何しようと思手だ。けどな、惚れさせたり、他の奴に惚れるのだけはやめろよ」

と、俺は腕を伸ばして彼を抱きしめた。美音が力を抜いて、息をつく。

「おれだって同じこと考えてるよ」

美音の胸の鼓動を感じていた。生きている、その当たり前前のごことが愛しかった。

16・美音？

夜司^{やつかさ}の様子が変なのは気づいていた。でも、夕樹^{ゆいつき}の女装癖がばれたなんて知らなかった。学校でそんな話はしなかったし、それどころか高内と顔を合わせてはどぎまぎしていた。おれはそつちのことばかり気になって、まさか藤堂家にそんな出来事があったとは思わなかった。

「ねえ、夜司」

長い間抱き合っているのに耐えられなくて、おれは口を開いた。

「今日は、一緒にシャワー浴びよう」

夜司は間を置いてから返答した。

「ああ」

まだ彼は、考え事に夢中になっていた。

夜司から離れてベッドを降りる。

出来るだけ明るい調子を装って風呂場へ向かったが、振り返ると夜司はようやく身体を起こしたところだった。

おれはそんな彼の動きを見つめる。のろのろとこちらへ来るのを確認し、おれは脱衣所で一足先に衣服を脱ぐ。

その内に夜司も服を脱ぎ始めて、やっぱりおれは先に風呂場へ足を踏み入れる。シャワーから熱いお湯を出していると、夜司がやっとなんて入ってきた。

おれを見つめて、顔を近づけ、キスをする。深く深く舌を絡めて、夜司の骨張った手がおれの腰を抱いた。

風呂場でのセックスは最高だった。今までと違って、今夜はより深いところで繋がれた気がする。

「おれさ、やっぱり運命だなんて思っんだ」

「は？」

ぬくぬくしたベッドの中で、おれは隣にある彼の体温を確認する。

「おれと夜司は、出逢うべくして出逢ったんだ。さつき、そう確信した」

「さつきって、いつ？」

「やってる最中」

夜司が呆れた様子で溜め息をついた。

「勝手に言ってる」

普段の彼に戻っていた。もう難しいことは言わないだろうと思つて、おれは言う。

「最初に会った時は、普通の大学生としか思わなかった。だけど、今では週に一回は会わないと落ち着かないんだ」

夜司は反応しなかった。

「学校は楽しいし、友だちだって出来て満足してるはずなのに、それ以外の時間はいつも夜司のことを考えてるよ」

「……そうか」

「夕樹の前で夜司の話をしそうになるくらい、おれの中は夜司で溢れてる」

夜司も同じ気持ちだと良い、と思う。けれども、夜司は言った。

「お前が羨ましいよ」

「え？」

彼の左手がおれの頬を撫でた。

「俺はもう、そんな恥ずかしいこと言えない」

否定の言葉のように聞こえ、おれは不安になる。

「でも、夜司だっておれのこと」

「そうだな、好きだ。守りたいと思う。だけど、今の俺はもっと他に考えるべきことがいくつもある」

やっぱり否定だった。夜司の言う「好き」は、おれの「好き」とは違う。

「じゃあ、おれのどこが好き？」

そうと知っても継りつきたくて、聞いてみた。

夜司はおれをじっと見つめてから、おれの右手に指を絡める。

「弱いところが」

「……」

何かが違っていた。おれは彼から愛されているはずなのに、それを実感できる返答ではなかった。

「確かにおれは弱いよ。けど、おれが聞きたいのはそういうことじゃない」

繋いだ手を離して、背を向ける。

「やっぱり、お前は分からないな」

と、夜司が言った。おれも、夜司のことが分からなくなっていた。好きなだけじゃ、ただ身体を繋げるだけじゃ、何にもならないってことなのか？ こんなにも愛しているのに。

「だけど美音、お前は……きつと何か、勘違いしている」

「何かって何？」

「分からない。お前はまだ子どもだから、何でも思い通りになると思ってるんだろう」

「……思っていない」

無意識にあった自意識が疼く。おれは、家族のこと以外では何でも思い通りに出来るはずだった。

「あと……お前は、お前が思っているよりも大人じゃないぞ」

その通りだった。おれは子どもだ。昔よりは大人だけれど、やっぱりまだ子ども。

「もしかすると、弟の方が大人かも」

「……嘘だ」

夕樹の方がおれより上なんて嫌だった。おれの方がいるんなことを知っているし、大人のはずなのに……ただ、そう思いたいだけの自分がいることも分かっていたから、なお嫌になる。

「嘘だ」

もう一度呟いて、おれは身体を丸める。

夜司は何も言わなくなると、やがて寝息を立て始めた。

おれは何か、間違えているのだろうか。何か誤解をして、何か正しくない道を正しいと思い込んでいるのだろうか。考えたって答えは出ないのに、答えが欲しくて苛々する。

「ねえ、ミオは文化祭どうする？」

「え？」

はつとして夕樹の方に目をやる。

「文化祭だよ。受付とかやる？」

と、夕樹は首を傾げた。おれはまったく興味がなかったが、今はホームルームでその話し合いをしている最中だった。おれたち一年はアトラクション系の出し物をするのがこの学校の通例だ。

「まあ、ただの迷路だからそんなに人数は要らないみたいだけど」
そう言つて夕樹が黒板の方に目を向け、おれもそちらに視線をやる。黒板には一日目、二日目と書かれており、それぞれが三つの時間帯に区切られていた。一つの枠の最低人数は三名だ。

「……半分以上は仕事無し、か」

おれは呟いて顔を戻し、夕樹も前を向いて頷いた。迷路は全員で作るが、それが終わったら後は好きにしていいたいと言うことだ。だったらおれは面倒なことはやらない。

「興味ないからパス」

「え、やらないの？」

「やりたいの？」

「……えつと」

と、夕樹が黒板の方をちらちらと見やる。一日目の午後に、高内と塚田が早い者勝ちとでもいうように自分たちの名前を書いていた。
「つつーかさ」

おれは呆れた顔を夕樹に向けた。

「お前、あいつと付き合ってるの？」

「……えつと」

と、夕樹が俯く。以前、塚田にも聞いてみたが「どうだろうね」としか言われなかった。高内からそんな話は聞いていない、という

ことだった。

「あの、何かね、一応その、両想いにはなれたんだけど、まだ発展途上って言うか……その……」

どうやら、学校ではなかなか二人きりになれないので、確かめようがないらしい。

「電話すりゃいいじゃん。番号知ってるだろ？」

「う、うん……そうなんだけど、勇気が無くて……」

女々しい。

おれは呆れると、夕樹の背を押して教室の前方へ向かった。

他の女子たちが二日目の枠に名前を書いていたが、構わずにおれは白いチョークを手取る。

「さっさと書け。お前見てると苛々する」

と、おれは夕樹へチョークを差し出した。

「……」

夕樹がそれを受け取って、高内と塚田の下に「藤堂」と書き入れる。きつと塚田は空気を読んで、チャンスがあれば、高内と夕樹を二人きりにしてくれることだろう。

席へ向かうおれに塚田が遠くから声をかけてきた。

「滝口くんはやらないの？」

「悪い、興味ねえんだ」

と、おれは少し大きめの声で答え、自分の席へ着く。

夕樹は何を思ったのか、おれのそばを離れて二人の方へ行ってしまった。別に構わないが、他の男子のことも少しは考えてやってほしい。女子と仲良く話が出来る男子なんて、最初はおれくらいしかいなかったんだぞ。入学して半年経った今でも、未だに女子と会話の出来ない男子は何人もいる。

そしてこれは勝手な憶測だが、ごく一部の男子は塚田に気があるはずだ。そんな彼女たちと仲良くする夕樹は、きつと羨ましい以外の何者でもない。まあ、初めにその視線を向けられたのはおれだったが。

「……」

でも、変わったなと思う。夕樹は初め、まったくイケてない奴だった。おれも好んで地味にしているから、ちょうど良い相棒だと思ったのに、今では自分から女子に声をかけられる男になっていた。おれと高内のやりとりを間近に見ても、決して口出ししなかった奴が。

人はきつと、それを成長と呼ぶのだろう。あいつは変わった。確かに変わった。おれを置いて、大人に近づいていた。

夜司の言葉の意味がようやく分かった。けど、分かりたくなかった。

机に顔をうつぶせて、眠るふりをする。おれは変わっていなかった。その弱さ故に、変わることが出来ないでいる……。

17・依紗？（前書き）

2 / 1 一部修正。

17・依紗？

今日の滝口くんはご機嫌斜め。プライベートで何かあったのかな？

一方、藤堂くんはいつもと変わらない。りのちゃんとの仲は日ごとに深まっている様子。うん、それは良いことだ。ヘタレ男子が成長していく様を見るのは面白い。出来れば、りのちゃんから詳しい話を聞きたいけれど、彼女は色恋に慣れていないからあまり話してくれない。

入学して間もない頃は、藤堂くんは受けだと思っていた。自己紹介の時に言葉を囁んだから。滝口くんは攻めだと思っていた。どちらかといえば背が高いし、自己紹介がとても簡潔だったから。

そんな二人が仲良くしてるのを見るのは楽しかった。たまたま気の合ったりのちゃんは滝口くんと同中だったから、なおさら観察しやすかった。

でも、まさかりのちゃんがあのヘタレに惚れるとは……人って分らないなあ。

ホームルームが終わってりのちゃんと一緒に教室を出ようとしたら、藤堂くんが割り込んできた。

「あの、一緒に帰らない？」

と、相変わらず弱気な誘い。りのちゃんが「うん」と、女の子らしく答える。

藤堂くんの後ろには滝口くんもいたが、彼はやっぱり不機嫌な様子だった。

みんな名前がた行なので、自然と下駄箱で混雑した。高内と滝口なんて隣り合わせだから、相変わらずのやりとりが聞けて面白い。

「あ、滝口邪魔」

「お前がな」

それから外へ出て、夕暮れの空気を吸う。

駅へ向かって歩き出すと、最初は四人並んでいたのが、自然と二つに分かれる。りのちゃんと藤堂くん、後ろにわたしと滝口くん。前方の二人は他愛のない話をして盛り上がっていた。本来はもっと、違うことを話すべきだと思うんだけどなあ。

滝口くんは何か考えているのか、ずっと口を閉ざしたままだ。

わたしもそんなに話したいことがないから、構わなかった。ただ……彼は、やっぱり、藤堂くんの後ろ姿に何かを見ているような気がした。

「わたしは別に、滝口くんと付き合いたいわけじゃないけど」
口にしてみると、隣の彼がわたしを見下ろした。

「滝口くん、もしかして誰かに恋してる？」

「……は？」

一瞬遅れて彼が目丸くした。これは凶星かな。

「だって、そんなに思い悩む滝口くん、初めてだよ」

彼が口を閉ざした。わたしのことをどう思っているかは知らないが、わたしが人を見抜けるということは知っているはずだ。

「まだ十月だけど、わたし、ずっと見てたんだ。だから分かるの」

「……塚田さ、何者なの？」

と、彼が問う。わたしはもう隠さなくても良いかと思い、告白をする。

「わたしね、漫画を描いてるの。ぶっちゃけ、ボーイズラブなんだけど」

滝口くんはしばらく前方を見ていたが、ふとわたしを見て、ぱつとまた前を見た。

「ごめんね、隠すつもりはなかったんだけど、わたし、腐ってるんだ」

「……ああ、そう」

「だから人間観察してるの。そうしたら、他にもいろいろ分かるよ
うになっちゃって」

えへへ、と笑うわたし。

滝口くんはすると、言った。

「ボーイズラブって、あれだよな。男と男の」

「そう。いわゆるBLね」

「……えっと、じゃあ、お前は……えっと」

珍しく滝口くんが困惑していた。彼の言いたいことは何となく分かっていたので、先に言っておける。

「滝口くんが男子に興味あっても、別にわたしは構わないよ」

彼が小さな段差に足を取られてよろけた。どうにか転ばずに済んだ彼が、わたしを睨む。

「……あのな、塚田。もう少し小さい声で言えよ」

「あ、認めた」

「っ！ ち、ちが……」

言いかけて彼が溜め息をつく。やっぱりわたしの観察結果は当たっていた。

「お願いだから、あいつらには言うなよ？」

「言わないよ。わたしだって、まさか滝口くんと藤堂くんが萌えるなんて言えないもん」

滝口くんがまた溜め息をついた。

わたしはくすくすと笑って、ただ今の状況を楽しむ。

「でも、ただ見てるだけだから安心して」

萌えの対象にはするけれど、わたしは別にどうこう言ってもりはなかった。

「藤堂くんは男の娘だし、りのちゃんとカップリング成立しちゃったのは残念だけどね」

現実でリア充されると、妄想がしにくくなる。りのちゃんの幸せを壊すつもりはないから、やっぱり何も言わないけれど。

「でもさ、塚田」

「何？」

滝口くんは前の二人を見て言った。

「たぶん、お前が思ってるのと現実が違うぞ」

「え、わたしが何思ってるか分かるの？」

「……たぶん、あいつが下だろ？」

「あ、図星。すごい」

わたしが喜ぶと、滝口くんが溜め息まじりに言う。

「ついでだから言うておくけど、おれ、そっちだから」

まあ、何てこと。っていうかちよつと待ってよー、滝口くん経験あるの？

「へえ、そうなんだー。素敵な妄想のタネをありがとう」

と、わたしはにっこりした。ってことは、相手は藤堂くん以外の誰かだ。滝口くんの清らかな身体をもてあそぶ男の人！ 妄想が爆発ね！

「……いや、別に」

そう言っただけ滝口くんは苦笑いを浮かべた。

別に同性愛を悪いことだとは思わない。だってBL大好きだもん。百合だって好きだし、自分自身、現実的な問題として百合はいけると思う。

だから同性愛に対する偏見はないし、差別もしない。

滝口くんがそっちの人だと思ったのは、女子の話題で盛り上がらないことを知ってからだった。そういう時はだいたい、藤堂くんが一人で喋ってる。だから変だと思ったんだ。

で、よくよく彼を観察していると、目の輝きが他の子と違っていた。言葉で説明するのは難しいのだけれど、妙にぎらついているのだ。彼にはもう一つの顔がある、確信した。

「そっか、あの滝口くんがねえ……」

独り言を言っただけふうと息をつく。わたしが今描いているのは、彼らをモデルにした漫画だったのだが、続きを描く気がもう起きない。

漫画研究会に所属しているわけでもないのに、誰かに見せるつもりはなかった。コンテストに出す気だって無い。ただどやっぱり、

一度描き始めたものはきちんと完結させたいから、困った。

「結局、誰に恋してるか聞けなかったし」

描きかけの原稿では、二人が誰もいない放課後の教室でいちゃいちゃしようとしていた。誰にも知られてはいけない、二人だけの甘い関係。

……現実とは逆、だったんだよね。ここ最近の藤堂くんはやけに積極的で男らしい一面を見せるようになり、一方の滝口くんはネコであることを告白したのだ。わたしの妄想は儚く崩れ去った、わけでもなかった。

「え、実は逆？ 逆なの？」

はっと原稿を見下ろすと、わたしの頭の中で物語が進行しはじめる。物語はこれからが良いところだ、今更受け攻めを入れ替えなくて支障はない。いつも強気で意地悪なのに、実は相手から攻められてドキツとしちゃったりして……きゃー！

鉛筆を手にし、新しい原稿にがさがさと思いついたものを描き始める。

ヘタレ攻めと強気受けだ。わたしにとっては新しい世界……！

『あの、僕、本当は……』

『何？ ちゃんと言えよ』

『……き、君のことが』 以下、自重。

いくら腐っていても、二次元と三次元の区別はきちんとしていなければならぬ。

そう考えると、わたしは滝口くんとは嫌いじゃない。わたしにあんなことを言ったのも、それだけ信頼されているからだろうし。だからわたしは彼の恋を応援するし、何かあったら助ける準備は出来ている。

りのちゃんと藤堂くんがくつついてしまった今、滝口くんを支えるのはたぶん、わたしだ。滝口くんは友だちが多い方じゃないし、かといって一人にいるのも好きじゃない人だから。

滝口くんが望むなら、彼が本当はゲイだったこと、他の人たちにばれないように手助けもしてあげよう。どうせわたしは恋愛に興味がない。

今は漫画を描いている方が楽しいし、学校の他にピアノのお稽古もあって毎日忙しいのだ。そのどれもが自分の好きでやっていることだから、なおさらそれらを見捨てて恋に走るなんて出来ない。

それなら、せめて現実のマイノリティを助けたいと思うのが私の心情だった。

けど、それがただの自己満足にしかなりえないことも薄々気づいてる。滝口くんだって、明日からわたしのことを避けて生活し始めるかも。

まあ、わたしは誰かに危害を加えるつもりが無いから大丈夫だとは思う。それに進級したらクラス替えがあるから、滝口さんと疎遠になる日はそう遠くない。

りのちゃんや藤堂くんとも疎遠になる日が来るかもしれないのは、わたしの意思ではどうしようもないことだ。

それなら、わたしは今までと変わらずに生活するだけ。いつものように男の子たちを見て、一人静かに妄想するだけだ。

18・夜司？

あれから弟はそれまでと変わらずに過ごしていた。その堂々とした姿に、父親も許しかけているんじゃないかと思う。

一方の俺は相変わらず内定がもらえないでいた。聞いた話では、百社受けて一つも内定のもらえない奴もいるそうだ。それにくらべると、俺はまだまだ努力が足りない。

「たまに大学在学中に起業するやついるじゃん？ あれ、誰か誘ってくれねえかな」

と、サクマはついに現実逃避を始めた。

「無理だろ。つつーか、何の会社起こす気だ」

俺がそう言い返せば、サクマががっくりと頂垂れる。

「だよなあ。起業するには資金もいるし、やっぱそう簡単には出来ないよなあ」

「どうして俺たちは内定がもらえないんだと思う？」

「え、不真面目だからじゃね？」

「残念、答えは努力が足りないからだ」

サクマが目を丸くして俺へ言う。

「急に真面目になっちゃって、どうしたんだよー？」

気持ち悪いぞ、とわざとらしく距離を置いてみせるサクマ。

俺は構わずに歩く速度を速めて言った。

「待っているだけじゃ何も始まらない。俺たちは自分を磨く必要がある」

「オレ、頭悪いから分かんない」

「しね」

「あ、ひどっ」

ふっと笑って、サクマの方を振り向いた。

「今は、自分の前にある壁をやつつけるのが先決なんだ」

サクマが首を傾げて俺の名を呼ぶ。俺はそれを無視して、今もま

だそこにある壁に目を向けた。

美音と出逢ってから二ヶ月が経とうとしていた。

俺はたぶん、自分も自分の思うより大人ではないことを分かっている。美音との間に距離が生まれようとしているのも、きっとそれが原因だ。

美音の方から連絡が来て、すっかり定番となったホテルへ二人で向かう。

俺がこの場所を知っているのは、いつか出会った男に教えてもらったからだ。後にネットで、男が二人で行けるホテルに名前が挙がる場所だと知った。

「ねえ、やつかさ夜司……」

俺の身体を愛撫しながら、美音は言う。

「現実って、何が起こるか分からないものだね」

それから上に跨って、俺の鎖骨に口づける。
「まるで空想フィクションみたいだ」

軽く噛んで、その跡を舌で舐める。俺はただ、その感触に身を委ねていた。

「だからきつと、おれと夜司は上手くいかない」

美音が俺の股間に手を伸ばした。ぞくつとして、俺は彼を見る。

「だって今朝ね、夢を見たんだ」

「……美音」

彼は自嘲するように笑っていた。

「みんなにおれらのことがばれて、別れざるを得なくなるの」

「もついい」

と、俺は背を向けるように起き上がり、彼を退かした。

「お前はまた、そうやって俺を惑わすんだろっ」

美音は俺の背中にもたれると、女みたいに白い腕で俺を抱きしめた。

「……そうかも」

俺が美音のことをどれだけ想っているのか、深く知りもしないで。

「だってさ、おれ、ばれちゃったんだ」

「嘘はやめろ」

「本当だよ。クラスの女子に見抜かれた」

どうしたらいい？ と、彼が小さな声で問う。俺は答えられなかった。

「夕樹ゆいつきの兄貴と付き合ってるなんて……」

この前は自分が犠牲になると言ったのに、いざその危険が訪れると心が揺らぐ。まだ青臭いガキでしかない証拠だ。

でも、俺にはある一つの確信があった。

「ずっと隠したままではいられないんだ。覚悟しろ」

腹を決めて向き合わなければ、目の前にある壁は破れることなどない。

「……夜司は、決めちゃうんだね」

「ああ、俺にはもう時間もない」

「おれは？」

未だに動揺している様子の彼を乱暴に抱き寄せた。

「夕樹にだけ話すさ」

「……怖い」

「大丈夫だ、俺が守る」

自分のことに精一杯で、まだ世界を知らない少年の唇にキスをした。

もう二度と戻れないなら、先へ進む以外に方法はない。弟は優しい奴だから、きっと受け入れてくれる。理解ってくれる。

「それでも、怖いよ」

と、彼は両目を伏せた。

「いつかばれてしまうなら、家族にもばれてしまうくらいなら、死んだ方がずっとマシだ」

そうしてまた、美音は俺の心をぎゅっと締め付ける。まるで、この世界に二人しかいないような感覚にさせる。

「大人になるためにも必要なことだ」

と、俺は彼の左手をとった。指を絡めて、強く握りしめる。

俺だって、本当なら逃げ出したい。だけどそれが出来ないのが現実だから、今はただ二人の愛を信じていたい。

しばらく就活を休むことにして、俺はサクマに言った。

「俺は今日、お前に告白をする」

「何を？」

と、いつもと変わらない返答。それを俺は好機と見なす。

「今までずっと黙ってたけど、俺、彼氏がいるんだ」

サクマは無表情になった。それが真面目な顔つきのようにも見え、ちよつと面白いと思ってしまう。

やがてサクマはへらりと笑った。

「なあんだ。知ってるよ、そんなことくらい」

今度は俺が表情を無くしてしまう。ばれていた？

「だってお前が女に興味ないってこと、ほとんどの奴が気づいてるぜ」

「……マジで？」

「ああ、マジ。オレはお前のこと面白い奴だと思っし、プライベートルドで何してたってどうでもいいって思う」

と、サクマ。

思わず俺は俯いてしまった。言わなくても、知ってる奴は知っていたというのか。

「ついでだし言っちゃうけど、お前、そーいうオーラ出てるよ」
「……」

何だか恥ずかしくなってきた。俺は他の奴と同じようにしていたつもりなのに、第三者からそんな目で見られていたなんて思いたくない。

「なんてゆーか、才能ある奴って絶対にどこか抜けてるんだよね」と、サクマが言う。俺はただ頭の回転が早いだけだというのに……

…と、考えてはつとする。確かにサクマの言う通りかもしれない、俺の感覚は周囲とまったく違っていたのだから。

「どうやら俺は、自分のことを全然分かっていなかったらしい」
呟いて頭を抱える。

「気にするなよ。それって個性だろ？」

「……本当にそう思ってくれるのか？」

聞き返すと、サクマは変わらない笑顔で言った。

「もちろん。ちょっと少子化を促進するくらいで、大した問題じゃないさ」

嫌味なのか冗談なのか、ちょっと判断に困った。

でも友人の言葉は素直に嬉しかったので、俺は顔を上げて言う。

「そうだな。ちょっと自信出てきた」

「お、良かったなあ。でも就活は落ちろ。落ち続ける」

「は？　じゃあ、一つも内定もらえなかったら、その時は抱かせるよ」

「えー、それちょっと怖い。前言撤回、一刻も早く内定勝ち取って」と、サクマが笑う。

俺も笑って、いつもよりも解放された気分のまま言った。

「お前も早く内定取れよ」

これまではうだうだと時間を潰しているだけの俺たちだったが、きつとこれからは違う。互いを蹴落とそうとはせず、共に同じ立場から戦えるはずだ。

目の前にあった壁には、拳を打ち付けたその場所から亀裂が入っていた。ぐにやりと曲がることはせず、元の形に戻ることもなくなっていた。

19・美音？

『大学の友人に言ったら、あっさり受け入れられたんだ』
電話越しに聞こえる夜司やつかさの声は、どこか清々しかった。

『だから、この勢いで家族にも話そうと思う』

「……そう。がんばってね」

おれは意味の分からない言葉を返していた。本心では、カミングアウトなんてしてほしくないのに。

『ああ。話が上手くいったら、また連絡する』

「うん」

『美音とのことは、別の日に、弟にだけ話そうと思ってる』
「うん」

『……その時は、お前も一緒だからな』

冷たい刃がおれの心臓を突き刺す。おれはカミングアウトなんてしたくない。

『じゃあ、また後で』

通話の切られた携帯電話を見つめ、おれはぎゅっと口を閉じる。

夜司は何にも分かってない。

夜司がカミングアウトするのは自分のためだ。おれのためなんかじゃない。

おれは夜司の前でしか、現実逃避はしないことにしていた。なのに、夜司に「現実を見る」と言われてしまったら、おれの居場所が無くなるじゃないか。夜司はどうして、おれを置いてカミングアウトしてしまうのだろう。おれには理解できない。

夜司がもし、家族に受け入れられてしまったら、おれはどうなる？ おれだけ、ずっと隠れんぼを続けるのか？

ひどすぎる。夜司は意地悪だ。

おれはこんなにも、夜司のことを想っているのに。おれとずっと一緒にいるって言ったのに。おれはまた、泣く場所を失う。

夜司にしか見せない顔がたくさんあるのに、おれはまたそれらを隠して現実を見つめ続けるのか？ 嫌だ。

おれはカミングアウトなんてしない。

本音を言えない母親を、気まぐれで裏切り者の父親を、健気で狂った姉ちゃんを、おれは知っているから。

おれはカミングアウトなんてしない。

あの日、現実から逃げるのは良くないことだと知っていたおれは、ありのままを受け入れようとした。でも姉ちゃんが、美音と離れたくないと喚いて、両親を考え直させた。

それから、ずっとおれはありのままを受け入れて生活していたのに、おれが中学三年になった時に姉ちゃんが言った。

『美音はもつと泣くべきよ。自分の好きなことをして、人の顔色を伺わないで』

それから数日後に売春を始めた。最初はただ、男の人と接触しただけだった。そのことを姉ちゃんに言うと、彼女は呆然と笑った。『あはは、変なの！ 何で、美音……あんだ、この家の長男なのに、ああ、おかしい。でも、面白い。これで終わりだ、全て、何もかもあんだがそっちの人間なら、あたしは一体、今まで何を守ってきたの？』

底抜けに明るい姉ちゃんが珍しく涙したのをよく覚えている。おれは悪いことをしていた。

それから姉ちゃんは何を思ったのか、おれに売春を続けろと言った。

『飽きるまで続けて、いつか全てをばらして、この家をあんだの手で崩壊させるのよ』

姉ちゃんは狂っていた。それはきつと、あの日から。

だからおれは、この家庭いえを壊せない。姉ちゃんが守り続けてきたものを、おれは壊せない。

カミングアウトなんて絶対にしない。

姉ちゃんに命令されても反抗する。だっておれは、この家が好きだから。

だからおれは、この場所を嫌う。そうすることでしか保てない絆を、大切に守る。

寂しい夜に限って、男たちからの連絡はなかった。それがまた寂しくて、おれは自室で涙しそうになる。

夜司のことを考えるのも苦痛で、おれは別のことを考えることにした。

携帯電話を開いてウェブに繋げると、打ち慣れた文字を入れて検索をかける。

エレキギターに関するサイトがいくつも表示され、おれはそれらをひとつひとつ見ていく。

時間のある時にエレキギターについての情報を集めていたおれだが、未だに分からないことだらけだった。

『廉価なギターは玩具だから、買うならきちんとしたものを』
いろんなことが書いてあった。

『湿気やほこりに弱いので、ギターはスタンドにかけて置いておく』
やると決めたわけじゃないけれど、わくわくする。

『弦にも色々種類がある』
場合によってはずいぶんとお金がかかりそうだ。

『大きく分けてストラトキャスターとレスポールの二種類がある』
おれがかっこいいと思うのはレスポール。

『初心者向けのセットは、意外と馬鹿に出来ない』
三万くらいから売られているそうだ。それ以下の物はあまり信用ならないという。

「……」

おれがもし、エレキギターを始めたら、塚田は何て言うだろう？
かっこいいと憧れの視線を向けてくれるだろうか？

夕樹はどう思うだろう？ おれのこと、イケてるって思うかな。

高内は？　またいつもみたいにおれを馬鹿にして、どうせすぐに飽きるんでしょ？　ギターが可哀相だわ、とか言つのか？

「……」

両親はどう思うだろう。

応援してくれるのか、それとも反抗的だと言っただろうか。

姉ちゃんはきつと、明るい調子で笑っただけだ。かつこつけちゃって、まだまだお子ちゃまね、とか言っておれの頭を撫でるに違いない。

……ああ、だけど。

おれもあの舞台に立ってみたい。今まで考えもなかった夢の世界を、見てみたいんだ。

暗く陰気な現実から距離を置いて、あのライトの下に立ってみたい。白く眩しく輝いて、たくさんのお声を聞きながら音を伝えたい。塚田に言われなかったら考えもしなかった、新しい世界なんだ。おれは独りでも良いから、自分を伝える手段を持ちたい。これまですつと受け身だったから、その反対側へ行ってみたいんだ。

その晩、おれは夢を見た。

念願のエレキギターを買って、必死に練習して、みんなの前で弾いてみせる。

あの頃の父さんと母さんが笑顔でおれを褒めてくれて、姉ちゃんがおれをぎゅっと抱きしめて言う。

『美音、これからは自分の好きなように生きなさい』

はっとしたおれはギターを床に落としてしまって、拾い上げるとそれはかつての四人が笑顔で写っている写真に変わっていた。

そしておれは心から願うのだ。

どうか、夜司がおれから離れていきませんように　と。

20・夕樹？

僕のポシエットが朝子に奪われた。妹もどうやら、ふりふりでひらひらなものが好きらしい。

「朝子、それ、返してくれないかな？」

「いや」

と、朝子は肩に提げたポシエットを両手で抱きしめる。

「僕は、あげるとは言っていないよね？」

「でもダメなの」

「それがないと、困るんだけど……」

と、苦笑する僕。別に少しくらいなら貸してあげても良いのだけれど、白いポシエットなので汚されたら大変だ。

すぐその台所では母さんが洗い物をしていた。こちらをちらつと見たが、何も言わないでいてくれて安心する。

「そんなに気に入ったの？」

呆れまじりに尋ねると、朝子は言った。

「うん。あーちゃんもね、ゆいみたいになるの」

彼女は女の子なので特に問題はないけれど、僕の影響を受けてそうなるのはいかなものか。と、いうより。

「朝子……僕のケータイ、見た？」

「……ううん、みてない」

と、分かりやすく嘘をつく僕の可愛い妹。

「えーと」

僕の待ち受けは女装した僕が高内さんと一緒に写っている写真だった。二人にカミングアウトした夜、何故か塚田さんから送られてきた。

話したって無駄だと思い、僕は朝子を抱き上げると居間へ連れて行った。父さんはまだ帰ってきてないし、やつちゃんは部屋にいたので、ゆっくり遊んであげてからポシエットを取り返すつもりだっ

た。

朝子をソファに座らせ、部屋の隅に放置されていたぬいぐるみを取り上げる。

「ほら朝子、くまさんが一人で寂しいって泣いてるよ」

と、妹の隣へ腰を下ろし、ぬいぐるみを朝子の前に出す。朝子ははつとすると、ぬいぐるみに手を伸ばした。ぎゅつと胸に抱きしめて、言う。

「くまさん、ごめんね」

なんだかんだで純粋な妹。このまま無垢に育って欲しいと思うけれど、僕の趣味が今後、どう影響するか……。

そうして朝子と遊んでいたら、父さんが帰ってきた。

母さんがせつせと夕食の準備をし、今日も一人で食事をする父さんの相手をする。僕の両親はあまり会話がなければ、互いによく気を遣う。それが良いことなのかどうかは、まだ僕には分からない。食事を終えた父さんが新聞を読む。その様子を耳で聞いていると、片付けをしていた母さんが僕に言った。

「ゆい、そろそろ朝子、眠らせないと」

「え、ああ」

どうやら僕はぼーっとしていたらしく、気づくとぬいぐるみが無理矢理ポシエットに詰め込まれていた。胴体から上がりきらずに、ぶらんと頂垂れている。ちよつとシニール。

「朝子、そろそろ寝る時間だよ」

「えー」

立ち上がって妹の手を取る。

食卓にいた父さんがちらつと僕らを見やって、朝子が父さんの方へ向かう。

「パパ、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

と、この時ばかりは優しく笑う父さん。かつては僕らも、あんな風に笑いかけられたのだろうか。

それから朝子を母さんの寝室へ向かわせようとしたら、やつちゃんが食卓に現れた。飲み物でも取りに来たのだろうかと思ったら、彼は言う。

「父さん、話したいことがあるんだけど、良い？」

片付けを終えた母さんが朝子を抱きあげる。

「っていつか、みんなに話がある」

母さんが振り向いた。僕はただその場に佇んで、やつちゃんを見ていた。

「ちよつと待ってて」

と、母さんが寝室へ向かい、数分後に朝子を寝かしつけて戻ってきた。その時には僕もやつちゃんも、自分の席に座っていた。

母さんが席について、やつちゃんが様子をうかがうように僕らを見やる。

「それで、話って？」

なかなか切り出さないやつちゃんを見かねて、母さんが尋ねた。どうやら、良い報告だとも思っているらしい。しかし僕は、何か違うと感じていた。

やつちゃんが背筋を正して両親を見る。

「俺、ずっと隠してたことがあるんだ」

母さんがはつと表情を変え、期待するのをやめる。

「……俺は、男が好きだ」

場の空気が重くなり、どこか異空間にいるような気がした。やつちゃんの声がまた言う。

「だから俺は、女性と付き合えないし、結婚だって今の法律じゃ出来ない。俺は、生まれついでゲイの同性愛者だ」

「やつかさ夜司……」

母さんが何か言おうとして、言えずに口元に手を当てた。頭が混乱しているらしい。僕も、いまいち状況が把握できなかった。

やつちゃんは俯いて「今まで黙ってて、ごめん」と、言う。

ああ、やつちゃんがああの際に言った『言いたくないこと』は、これ

だったのか。

父さんがやっちゃんをじっと見ていた。僕の時よりも厳しい視線だった。

「どうして、揃いも揃ってお前たちは……」

と、父さんが溜め息をつく。僕のことはもう終わったはずなのに、やっちゃんのせいで蒸し返された。

やっちゃんは何も言わず、真剣に話を聞く態度を示す。

「俺にはまったく理解が出来ない」

そう言い切った父さんは僕たちを見て、怒りに似た表情を浮かべる。

「どうしたら、そんな風になるんだ」

「違うの、あなた。夜司は昔から」

「お前には聞いてない」

母さんの言葉を聞かずに、父さんは僕たちを睨み付ける。静かな口調が僕をびくびくさせた。

「俺は理解してほしいなんて思わない。ただ知って欲しい」

と、やっちゃんが言うと、父さんは怯んだように口を閉ざして、また溜め息をつく。

「勝手にしろ」

がたと席を立ち、寝室へ向かう父さん。その言葉の真意が分からなくて、怖かった。やっぱ僕も、まだ父さんに許してもらえたわけではないらしい。

母さんはそんな父さんを見送ってから、静かにやっちゃんの方を見て言う。

「夜司は、昔からそうだったのよね。気づいてたのに、何もしてあげられなくてごめんなさい」

と、泣き出しそうに笑う。

やっちゃんは何も言わなかった。

「母さん、分かってたはずなのに……いつか、こんな日が来るって……」

母さんが俯いて涙を流し始める。その涙はきつと、自分を責める涙だ。

「良いんだ。分かってくれただけで、俺は十分だから」

「でも……だって、ずっと辛い思いを、あなたにはさせて……」

「うん。そんなことない。俺だって、ついこの間までは自分を隠してた。将来は適当な女性と結婚して、隠し続けようと思ってたんだ」

やっちゃんの口からそんなことを聞くのは初めてだった。僕の場合はばれたのがきっかけだったが、彼の場合は隠し続けることに耐えきれなくなっただけらしい。

「……ごめんね、やっちゃん。でも、これからは、母さんたちに気遣わなくて良いからね」

と、母さんが涙を拭いながら言う。それから話を聞いていただけたの僕に顔を向けた。

「ゆいも、無理に男らしくしないで良いのよ。だってそれが、あなたなんでしょう？」

ドキッとした。嬉しかった。僕は、母さんに理解されようとしていた。

「うん」

けど、それしか答えることが出来なかった。本当は『ありがとう』って言いたいのに。

すると、やっちゃんが母さんへ言った。

「ありがとう」

そして立ち上がり、廊下へ出て行く。僕は母さんとやっちゃんを交互に見て、兄を追った。

「っ、やっちゃん」

部屋の前でやっちゃんが立ち止まり、僕を振り返る。

何て言えばいいのか分からなくて、何か言いたい言葉があつて、ただ僕は彼を見上げる。

「えっと、あの……その」

やつちゃんは僕の言葉を待ってくれていた。頭の中を整理して、言葉をよくよく考えて、口に出す。

「僕は、別に良いと思う。僕が僕であるように、やつちゃんもやつちゃんであるべきだよ」

「……ありがとう」

にこつと微笑んで、やつちゃんは自室へと入って行ってしまふ。扉が閉まるのを見送って、僕はもつと他に言うことがあったのではないかと後悔を始めた。

同性愛者だからって差別するのはおかしいし、男が女装するのも悪いこととは思わない。僕が女装を楽しむのと同じ事で、やつちゃんは男を好きになるからやつちゃんであ……ああ、考えがうまくまとまらない。

僕も自分の部屋に入ろうかと思ったら、やつちゃんが扉の下から一枚のメモを差し出してきた。

『今はまだ言えないけど、お前にはもう一つ言わなきゃいけないことがある』

「……僕に、だけ？」

やつちゃんが扉の向こうで小さく「ああ」と、肯いた。

どういふことが分からなかった。だけど、今はまだ言えないだけで、きつといつかは話してくれるのだろう。

「分かった。僕、待ってるね」

と、返事を返して、僕は自分の部屋の扉を開けた。

21・美音？

朝になつても、夜司やつかさからの連絡はなかった。カミングアウトは失敗したのだろうか？

携帯電話を何度も開いては閉じて、ただ彼からの連絡を待つ。でも、もしも失敗したのだとしたら……。

「ユイ、おはよう」

教室に入ってきた夕樹ゆいつきへ手を振ると、夕樹はおれを見てその場に立ち尽くした。

「……おはよう」

と、それだけ言つて自分の席へ着く夕樹。

様子が変だった。昨日の夜、何があつた？ と、正直に聞けないのが悔しい。夕樹はきつと、おれと夜司がつながってるなんて予想もしていないのだ。

携帯電話を机に置いて、前方の壁掛け時計に目をやる。チャイムが鳴るまで、あと五分以上あつた。

夕樹はやつぱり、何か思うところがあるらしい。事情を知っているおれはそう思ったが、第三者からすれば落ち込んでいる程度にか見えない。

「ねえ、ミオ」

理科室から教室へ戻る途中、夕樹が立ち止まった。

「何だよ」

と、一歩先で止まってから振り返る。夕樹はおれの顔をじつと見て、ぎゅつとおれの袖を掴んだ。

「相談したいことが、あるんだけど……良い？」

「……チャイム、鳴っちゃうぜ」

次の授業は国語なので移動も準備もないが、サボるのはさすがにまずい。

「う、うん……そうだよね」

と、夕樹が歩き出し、どこか寂しそうな顔でおれの横を通り過ぎていく。その背中にはっとして、おれは呼び止めた。

「ユイ」

立ち止まった夕樹が振り返り、先ほどと同じように寂しそうな、それでいて悩ましげな顔を向ける。

どうしたら良いか分からなかったけれど、今日は初めて授業をサボろうと思う。

「さっさと教室に荷物置いて、屋上行こう」

そう言いながら、おれも歩き出した。

屋上と言っても開放されている場所ではないので、その手前の踊り場に二人で腰を下ろした。

立ち入り禁止の鎖がかけられていたが、跨いで中へ入れる程度のものだった。その為にこの場所を有効活用する生徒は多く、近くを通るとたまに話し声が響いていた。

そして実際に入って分かったが、意外と明るい。

「で？」

「あの、あのね……」

窓からさしこむ日光が、空中に浮いた埃を照らし出す。

「僕の女装が、家族にばれたんだ」

とつくに知っていたことだけれど、おれは知らない振りをする。

「何で？」

「……妹が、また僕のことを勝手に盗んで、それではれた」

背中を丸めて溜め息をつく夕樹に、おれはどう言葉をかけるべきか分からない。

「それ以来、父さんと全然話をしなくなって……昨日、ね」

ふわふわ浮遊する埃をぼーっと見つめる。

「言って良いのか、分かんないけど……あの、内緒だよ？ ミオにしか話さないから、どうか黙っててね」

と、夕樹はおれへ言う。その先を知っていたおれは、ただ首を縦

に振った。

夕樹が一つ息をついて、さんそ空気を吸う。

「やっちゃんかね、ゲイだってカミングアウトしたの」

「……そうか」

授業中だからか、余計な物音が一切聞こえてこなかった。本当の意味での静寂だ、とおれは思う。

「そうしたら、父さんがね……僕たちのこと、理解できないって怒って」

そりやそうだ。それが親というものだ。異質な子どもをすんなり理解して受け入れてくれる親なんて滅多にいない。

「やっちゃんも、落ち込んだ。もしかしたら、あの後、泣いてたかも」

「……それで？」

連絡がない理由がやっと分かった。やはり失敗したのだ。夜司はきつと、おれに心配をかけられなくて、連絡する余裕もなかったから。

「僕は別に、やっちゃんがゲイでも構わないし、受け入れてるつもりだよ。だけど、父さんのことを考えたら、どうしたら良いか分からない」

だからカミングアウトなんてしちゃいけなかったんだ。夜司は馬鹿だ、自分で自分の首を絞めている。

「……でも、ミオに話したってどうしようもないよね。ごめん」

「いや……でも、話してくれて嬉しいよ」

と、おれは夕樹の肩を抱く。

「うん。絶対、誰にも言わないでね」

「ああ」

言うはずなんてない。おれは夜司のことを知っているし、その彼を愛している。何も知らない第三者に話すつもりなんて、これっぽっちもなかった。

彼にメールを打つたら、電話がかかってきた。

『昨日は連絡できなくて悪かったな』

「おれ、すごく心配したんだよ。今朝だって、ずっと待ってた」

夜司は少し間を置いて言った。

『あいつ、お前に話したんだな』

「うん」

『……そんなつもりじゃなかったのに、巻き込んだ。家族に話した後、ずっと俺、考えてたんだ』

「考えてたって、何を？」

『両親のこと。父さんは怒らせちゃったし、母さんを泣かせたから。夕樹は受け入れてくれたけど、想像してたよりも辛かった』

弱気な言葉だった。夕樹の言ったように、本当に夜司は泣いていたのかもしれない。

「今から会わない？」

と、おれが誘うと、彼は即答した。

『無理だ。電話^{いま}だって、精一杯なんだ』

「……」

『美音の前で、変な姿は見せられない』

「……分かった」

互いの顔が見えないから、夜司は弱音を平気で吐けた。おれは彼のどんな姿も等しく愛せる自信があるのに、彼が嫌がるなら仕方がない。

『……ごめんな、美音』

「ううん」

夜司が深く溜め息をつく。

『明日か、明後日には元に戻るから』

「うん」

『そうしたら……夕樹に何て話すか、考えよう』

たくさん傷ついたはずなのに、夜司はまだ傷つこうとしていた。そうすることが最善だとは、まったく思えない。

「もうやめようよ」

『え?』

「だって、話したら、夜司はまた傷つくだけだ」

『……でも、ずっと隠し続けている方が辛い』

それはきつと正論なのに、おれはまだ、そこまで大人になれなかった。

「だからって、ばらして何が得られるの? また、自分の首を絞めるだけじゃないか」

夜司が黙った。

「おれはもう、十分だと思う。夜司はこれ以上、嫌な思いをすることないよ」

だけど本当は、おれがばらしたくないだけだった。夜司はきつと、そんなことくらいとうに見抜いて。

『お前だって知ってるだろ? あいつが優しい奴だってこと』

思い通りに行かなくて、悔し涙が溢れる。

『心配しないで良い。あいつはお前から離れていかないし、嫌いになることもない』

「……」

『きつと、俺たちを祝福してくれるさ』

言い聞かせるようなその言葉で、おれの頬を涙が伝った。すぐにもう片方の手で拭ったが、止まらない。

『……美音?』

夜司の声はおれの胸を締め付けるだけだった。すぐに泣き止もうとするが、自分の意思ではどうにもならなかった。

携帯電話のボタンを押して、通話を一方的に切る。

何度拭っても、おれの涙は止まらなかった。床に置いた携帯電話が着信を告げ、おれはその上に枕をかぶせて無視した。

どんなに強く目を閉じて、飽きずに涙は頬を伝って服を濡らす。夜司は馬鹿だ。おれはそんなこと、少しも望んでいないのに。

22・夜司？

美音の言うことは間違っていないかった。俺は自分で自分の首を絞めている。その手をどければ良いだけなのに、今は耐えなければならぬ。

俺たちにとってカミングアウトは諸刃の剣だ。自身を解放するための手段でありながら、それまで構築してきた人間関係を失う恐れもある。ただの自己満足でエゴだと言う人がいるのは、それが第三者に及ぼす影響からだと思う。された方は戸惑うし、悩むし、その人自身とそれまでのようには向き合えなくなる。けれども俺たちからしたら、告白することで初めて、自分の人生を自分らしく歩めるようになるのではないだろうか。

少なくとも俺は、そう考えて行動をした。

「お前がどうしても嫌だって言うなら、強制はしない」

昼間と違う賑わいを見せる夜の街で、俺は美音にそう言った。

「……嫌だ」

先ほどこらずと俯いて顔を上げない美音が言う。

街灯の下は妙に明るくて、俺は溜め息をつく。

「でも、ちゃんと話すからな。お前のこと、全部」

「……嫌だ」

美音が駄々をこねる。弟に知られるのが嫌なのは分かるが、俺の彼氏である以上は、いつか覚悟を決めなければならない。

「どうして？」

「……嫌だから」

「ワガママ言うなよ」

理由も話せないのに嫌だと繰り返すばかりでは、どうしようもなかった。

携帯電話を開いて時刻を確認する。まだ日が沈んでから三時間ほ

どしか経っていなかった。

「何が嫌なんだ？ あいつに話すのが？ それとも、俺といるところを見られたくないのか？」

美音は相変わらず地面を見つめていた。

「……どっちも嫌だ」

呆れた。まるで幼い子どもだ。俺の妹が見せる態度と変わらない。
「電話でも嫌か？」

と、俺が問うと、美音が少し顔を上げた。

「……嫌だ」

と、また顔を伏せてしまう。いい加減、俺も苛立つてきた。

「美音、嫌がるのもいい加減にしろ」

「……」

「どうせいつかはばれるんだぞ。それなら早い方が良い」

「でも嫌だ。おれは言いたくない」

「何で？」

「……嫌だから」

むかつく。先ほどから延々と同じ会話を繰り返していた。

「強制するつもりはないが、お前は逃げてるだけだろう？」

美音は何も言わなかった。俺は無意識に舌打ちをして、携帯電話を操作する。

「今からあいつを呼び出す」

はっと顔を上げた美音が、絶望するような表情で俺を見た。構わずに携帯電話を耳に当てる俺。

街の雑音がやけにうるさく思えた時、美音が俺の手から携帯電話を奪おうと手を伸ばした。それを避けて、俺はまた舌打ちをする。部屋に放置しているのか、出なかったのだ。

美音がどこか安心した顔を見せ、俺は苛立ちながら携帯電話をポケットへしまう。

あともう少しで破れそうな壁なのに、その先へはまだ進めない。弟はきつと受け入れてくれるのに、美音がそれを拒むせいだ。

覚悟するにはそれなりに勇気が必要。けれども、俺は美音を甘やかすつもりはなかった。いたちごっこにも、いつか飽きる。

就職活動を再開させたものの、求人は以前よりも減っているような気がした。それに加えて、いまいちな企業ばかりが目立つようになっていた。

大学から帰る途中で、俺は地元のファミレスに寄った。とりあえずドリンクバーを頼んでから、美音へメールを打つ。

返信を待つ間に飲み物を取りに行った。

それからコピーしてきた求人情報を見比べていると、返信が来た。美音からだ。

『すぐに行く』

たった一言だけのメール。どうやら彼はまだ、決意出来ずにいるらしい。どうせ今日も、あいつは「嫌だ」と言うだけだろう。想像が付くから、俺はメールを新規作成する。

送信を終えると、再び求人情報に目を向けた。

十五分ほど経った頃に、待ち人はやって来た。

「やつちゃん」

と、声をかけて俺の向かいへ座る。

「早かったな、夕樹^{ゆいつき}。何か頼むか？」

「え、別に良いよ。それより、話して？」

俺は散らかしたプリント類を一つにまとめながら答える。

「ああ、お前に会わせたい人がいるんだ。そろそろ来る頃だと思うんだけど」

弟はちよつと緊張した様子で店内を見回す。

鞆にプリント類をしまい、手元に置いた携帯電話を開く。彼からの連絡はなかった。

どんな反応をされるか、正直不安だった。嫌われるかもしれないと分かっている、俺は大人げなく痺れを切らしていた。

頭の中でどう言い訳しようか考える。弟も口を閉じて、何か別のことを思っている。

ふと目にした弟は、見慣れない上着を羽織っていた。細身ですっきりしたデザインの灰色のパーカーだ。

「お前、そんなの持ってたっけ？」

俺が尋ねると、弟はちよつと嬉しそうにして言う。

「うん、もらったんだ。あんまり着ないからあげるって言われて」「誰に？」

「え、えつと、その……僕の、彼女に」

と、恥ずかしそうにする。言われてみればレディスだな、とぼんやり思う。家系的なものなのか、藤堂家には痩せている人が多い。父親がまさにそうだし、俺も弟も似たような体型だった。

「似合ってるよ」

「え、そう？　ありがとう」

弟は嬉しそうになつこりして、また店内をきよろきよろと見回す。そして何かを発見したらしく、目を丸くした。

ほぼ同時に気づいた俺は言う。

「遅かったな、美音」

はつとした弟が俺を見る。美音はその場に立ち尽くすと、気まずそうに顔を背けた。

席を立て美音のそばへ行く。

「何突つ立ってるんだよ」

「……夜司^{やつかさ}、裏切った」

小さな声で言つて、俺を睨む。

「こうでもしないと、お前はいつまでも決心しないだろ」

と、俺は彼の手首を掴んだ。美音が抵抗する前に席へと連れて行く。

戸惑う弟へ俺は言った。

「これが、俺の紹介したい人だ」

隣に美音を座らせて、逃げ出さないよう、しっかりと手を繋ぐ。

「……え？」

俯いて顔を上げない美音と俺を交互に見る弟。

俺は一つ息を吸って、はっきりと告白した。

「俺たち、付き合ってるんだ」

「……え？　ちよつと、え？　どういうこと？」

美音は口を開かなかった。

「そのままの意味だ。美音とは、ネットで知り合った」

逃げ出す隙を伺っているのか、じっとしたまま動かない美音。

「ネット、って……どういうことなの、ミオ」

「……」

美音は否定も肯定もしなかった。その様子を見て、弟が言葉を失う。

「だから、お前にはちゃんと言わなきゃいけないと思ってたんだ」

と、俺。向かいにいる少年が頭を悩ませ、やがて真剣な声で問う。

「ミオも、そうだったの？」

俺の隣にいる少年は肩を震わせ、呟くように言う。

「ああ、そうだ」

三人の間に、あの時と似た重い空気が流れる。美音はちらりと俺を見て、また顔を背けた。

夜のファミレスは静かだった。俺たちの感情とは裏腹に、細かい

雑音が調子よく流れている。

「そっか……そうだったんだね」

弟は納得したようにそう言って、優しい目を美音へ向けた。

「僕、安心したよ。やっちゃんとミオなら、きっと」

「もういい、何もかもおしまいだ」

弟の言葉を遮って、美音が俺の手を振りほどく。

「美音！」

逃げ出す彼に腕を伸ばしたが、それも振り払われてしまった。

「二人とも嫌いだ、大嫌いだ！」

と、捨て台詞を吐いて店の外へ出て行く。

「……」

「……」

互いに無言になってしまふ。美音は夕樹を拒絶して、俺からも遠ざかってしまった。

俯いた弟が言う。

「二人なら、幸せになれるって思ったのに……」

俺はただ溜め息をついて、彼へ詫びた。

「ごめんな、夕樹。でも、言わずにはいらなかった」

「……うん」

美音を追いかけても良かったが、どうせ言われることは分かっている。『どうしてあんなことしたんだよ!? 夜司の馬鹿!』と、いったところだろう。でもあいつのことだから、下手な真似はしないはずだ。

23・夕樹？

びつくりした。やっちゃんと美音が付き合ってるなんて、考えもしなかった。それどころか、美音もそうだと思わなかったから、戸惑った。

だけど、少し考えたら分かったんだ。

美音はいつもクールで、何を考えているのか分らないところがあって、ちよつと思議な人だけど、普通の人と同じように、やっちゃんという人に恋をしていたんだ。美音はやっぱり、僕と変わらない普通の人だったんだ、って。

それにやっちゃんと美音はすでに付き合っていて、二人とも互いのことをすでに知っていたんだ。僕が今さら口を出したって意味がない。二人が本当に相手を好きでいるなら、良いんじゃないかと思うんだ。

それに僕は、僕を受け入れてくれた大切な人たちを否定することなんてできない。だから、僕は二人の幸せを願うよ。

二人がそうありたいと本気で思うなら、僕も僕でありたいと思うだけのことだ。他の人なんて関係なくて、自分として在るために僕もやっちゃんも、美音も、堂々と自分を主張すればいい。

やっちゃんが言ったように、理解してもらう必要はないのだ。ただ知っていて欲しい、それだけで良い。

僕がそうして自分の悩みに結論を見いだしても、美音はまだその渦中で蹲っていた。

「どうしたの？」

高内さんが僕の顔をのぞき込んできて、はっとした。

「え、いや、別に……何でもないよ」

「そう？」

「う、うん」

文化祭は退屈だった。塚田さんが気を利かせて、僕と高内さんを入り口係にしてくれたけれど、僕はそれどころじゃなかった。あの日からずっと、美音とは言葉を交わしていないのだ。

今朝も美音は出席をとったきり、一人でどこかへ行ってしまった。自由時間である今日もしくは明日、美音と話が出来なかつたら、きつとずっとこのまま、離ればなれになってしまふ気がした。そんなの嫌だし、美音だって何か理由があつて僕から逃げているだけだと思う。その何かを解決することが出来れば、前のように仲良く出来るはずだ。

「滝口のことでしょ？ 何があつたかは知らないけど、放っておけば良いのよ」

と、高内さんは言う。放っておくのがまずい状況なので、僕は適当に返事を返す。

「うん、そうだね」

「っていうか、あいつはワガママなのよ。自己中ってゆーか？」

「そうなの？」

「そうよ、絶対そう。自分は傍観者って顔しながら、独りでいるの嫌がるし。中学ん時から、何にも成長してないわ」

「……そう、かもね」

美音は初めて見た時は大人っぽいと思ったけれど、一緒にいればいるほど、そうでもないことが分かってきた。言ってみれば、彼は年相応なのだと思う。だから、やつちゃんみたいな大人の人を選んだのだろう。

だけど僕は美音じゃないので、彼が今、どんな思いでいるかは分からない。もしかすると、本気で僕のことを嫌いになっているのかもしれない。

……考えるほどに、思考はネガティブになっていく。

僕は顔を上げて、無理に笑顔を作った。今日は待ちに待った文化祭だ、楽しまなくては。

しかし、仕事が終わると、塚田さんが僕を見て言った。

「滝口ちゃんと仲直りしないで良いの？」

「え、えっと……」

思わず悩んでしまうと、高内さんが僕の袖を軽く引つ張る。

「放っておきなさいよ」

「うん……でも、やっぱりちゃんと話したい、かな」

僕が素直に答えれば、塚田さんが優しく笑う。

「じゃあわたし、滝口くん探してくるね」

と、階段を下りていく。

「……仲直り、出来るかな」

「さあね。けど、やっぱり何かあったみたいね」

「う、うん……」

僕は困惑して、それまで見ていた方向から視線を逸らす。

高内さんの問いは僕にとっても、美音にとっても酷だった。伝えてしまったら、僕はまた美音に嫌われてしまうように思えて、ぐっところえる。

「あの、詳しく話すと長いんだけど、何か、僕、ミオに嫌われちゃったみたいで」

そう言つと、無意識に溜め息が出た。

「喧嘩？」

「まあ、そんな感じ」

高内さんは納得すると、明るい調子で言った。

「じゃあ、いーしゃから連絡来るまで、二人で回りましょう」

と、僕の腕に腕を回す。

「え、あ、うん」

ドキッとした。歩き出す高内さんに合わせて、僕も歩きだす。

「あたし、お腹空いちちゃった」

「そうだね。何か食べに行こう」

いつもリードするのは高内さんだったけれど、それが一番心地良い。

高内さんはきっと、彼女なりに僕を心配してくれているのだろう。
そう思うと嬉しくて、僕は気分が良くなる。

美音のことは今は忘れて、塚田さんに任せよう。

24・依紗？

滝口くんに電話したけど通じなかった。メールも入れてみたが、返信が来るか不安だ。

賑わう校内で一人、彼の姿を探し歩く。

藤堂くんと滝口くんの仲がおかしくなったのは、ちょうど十日前のことだった。あからさまに滝口くんは藤堂くんを無視して、話しかけても冷めた返答しかしなくなった。

わたしやりのちゃんにはそれまでと変わらず接してくれたが、その態度がまた藤堂くんを傷つける。

文化祭では完全に別行動なので、藤堂くんはすっかり一人で抱え込んでしまっていた。りのちゃんは、そんな彼をひどく心配しているが、不器用なので口に出して言えない。だからわたしが動く。

でも、やっぱり彼からの返信はなかった。文化祭ではサボる生徒も多いと聞くし、帰ってしまった可能性もある。

廊下の隅に立ち止まって、わたしはぼーっと考えた。

何故、あの二人があんなことになったのかは分からない。だけど二人とも、きつと仲直りしたいと思っているはずだ。だって彼らは最高のコンビ、まるで夫婦のように息のあった二人なんだ。

気を引き締めようとした時、段ボール製の看板を掲げた生徒がわたしの目の前を通り過ぎていった。

『軽音部』

ああ、そういえば軽音部は毎年、ライブをやっているんだっけ。去年は友だちと観に行ったなあ。それで気に入って、この学校を受験したんだった。

そして看板が見えなくなっただけでピンと来た。

ライブ会場は一階にある教室をひとつ、貸し切って作られたものだった。中庭にはずらりと出店が並んでいるので、こうした隅の方

に追いやられてしまいうらい。

中へ入ると、すでにたくさんのお客が集まっていた。前方に設置されたステージを無視して、滝口くんの姿を探す。

小柄なためか、移動するのは比較的楽だった。ただ、滝口くんらしき影はどこにもなく、そうこうしている内にライブが始まってしまった。

ゆっくり見たい気持ちはあったが、ひとまず外へ出ることにする。廊下には人気がなく、静かだった。みんな、軽音部のライブに飲み込まれてしまったようだ。

漏れ聞こえてくるロックンロールを背に、周囲を探してみるが、やはり彼の姿はない。帰ってしまったのだろうか。そんなひどいことをするような人だとは思わないし、思いたくなかった。

中庭に通じる扉から外へ出てみる。

まだ教室からそんなに離れていないからか、壁越しに音が聞こえてくる。

出店に沿うように椅子と机が設置されていて、軽音部とはまた違った賑わいを見せていた。こんなところに一人でいるなんて考えにくかった。

それでも一応見てみようと思って歩いていくと、横目に知った顔を見た。

立ち止まって振り返る。

「……滝口くん、発見」

元々設置されているベンチに彼は腰掛けていた。

「何の用だよ」

彼もこちらに気づいていたらしく、そう言っただけわたしを見る。

わたしはその隣へ行って座ると、滝口くんへ言った。

「探してたんだよ」

「何で？」

ちよっと困った。いきなり本題に入るのはまずいだろう。

「軽音部のライブ、一人で行くの寂しいから」

とつさに嘘をつく、滝口くんは納得した。

「ああ、そういうことが」

そして前方に顔を向ける。わたしも賑わう出店で先輩達がせわしく働くのを眺めた。

それから、滝口くんがぼつりと呟く。

「おれ、ギターやろうと思うんだ」

「え、本当に？　すごい、もう買うつもりのギターって決めてるの？」

とっても興味深い発言だったので、思わず食いつくわたし。

「いや……だけど、金ならある」

「そっかー。良いなあ、弾けるようになったら聞かせてね」

につこり笑いかけると、滝口くんもにやっと笑う。

「ああ、二番目に聞かせてやるよ」

二番目？　いや、わたしが一番でも困るけど、ちよつと気になるなあ。突っ込む？　でも、聞くのちよつと怖いなあ。

「塚田、ピアノ出来るんだろ？」

「え、うん。出来るけど」

「じゃあさ、いつか二人で曲作ろうぜ」

滝口くんにしては積極的な発言だった。その変化にわたしはちよつと嬉しくなつて言う。

「うん、良いよ」

作曲はわたしもやってみたかった。ただ、一人でやるのは大変そうだから手を出さずにいたのだが、二人でなら出来る気がする。

「たぶん、今年中に買うから」

「うん」

「買ったら……写真撮って、塚田にも見せるよ」

「うん」

背中から聞こえてくるロックンロールが風と一緒に吹き抜けていく。

わたしは前に顔を向けると、本題を切り出した。

「藤堂くんと、何があつたの？」

彼がわたしから視線を外して言う。

「……別に」

「隠さないでよ。わたしもりのちゃんも、二人のこと心配してるんだよ」

滝口くんはしばらく間を置いてから、ベンチに背をもたれて頭上を見上げた。

「塚田じゃなかったら、言う気にはならないと思う」

「うん」

「おれ……夕樹の兄貴と付き合ってるんだ」

滝口くんの二度目の告白は、とんでもないものだった。

「え？」

「だから、あいつの兄貴と付き合ってるの」

兄貴？　そういえば藤堂くんにはお兄さんと妹がいるって聞いたことがあつたけど、そのまさかのお兄さんと滝口くんが？　な、な、な、萌えなの。

「その、お兄さんもそっちの人だったの？」

「うん」

「……えつと、それで？」

藤堂くんのお兄さん、ぜひ会いたい！

「で、それを彼氏にばらされた。おれは言いたくなかったのに」

そうだよ、普通は隠すよね。じゃあ、何で？

「何で、そのお兄さんはばらしちゃったの？」

滝口くんはまだ空を見ていた。

「いつかばれるなら、早い方が良いつて」

「……そう」

確かに隠し事や嘘つて、いつかはばれるものだ。自分がどんなに完璧だと思つても、必ずどこかに穴がある。

「おれさあ、すげー感情的になつて、ユイに嫌いだって吐き捨てて、逃げ出したんだ」

自嘲するように言って、滝口くんは首を元に戻す。

「馬鹿だよな。なのに、おれはあいつとどう接したらいいか分からなくなってる」

「……なるほどね」

自分で蒔いた種を片付けられなくなってしまったらしい。お兄さんとういつた経緯で付き合うようになったのかは知らないけれど、気まずいのは分かる。

「本当は謝りたいんでしょ？　ってゆーか、謝らなきゃ」と、わたしは言った。

滝口くんがこちらを見て、不安げに俯く。

「勇気がない」

「何言ってるの、滝口くん。このままだと、一生仲直りできないかもよ？」

「……それは、分かってる」

「じゃ、謝ろう！　わたしがそばにいてあげるから立ち上がって彼を見る。」

「……でも、あいつは」

弱気な言葉を口にしそうになって、滝口くんは口を閉じた。

「大丈夫だよ。わたしだったら応援するもん」

「……でも」

イラッ

「滝口くん、女々しい！　らしくない！」

急に声を張り上げたわたしを見て、滝口くんが目を丸くする。

「謝るったら謝るの！　藤堂くんはそんなことで嫌いになるほど、悪い人じゃないわ！」

と、わたしは彼の腕をとって立ち上がらせた。もう片方の手で携帯電話を取りだし、藤堂くんへ電話をかける。

静かなところが良いと言うので、文化祭の時だけ立ち入り禁止のテープが貼られた校舎に入った。

「……ユイ」

先生に見つかったら怒られるだろうけど、賑わいの声が届かないので静かなのだ。

「あの時は、本当にごめん」

少し離れたところで床に座りこみ、彼らのやりとりに耳を傾けるわたしとりのちゃん。

「おれ、やっぱりお前のこと、嫌いになんてなれない。夜司^{やつかさ}のこと
も……」

「そうだよ、良かった」

「え？」

「僕、本当に嫌われたんじゃないかって不安だったんだ。やつちゃんも、すごく心配してたよ」

「……ご、ごめん」

「あの……そのね、ミオ。僕は、二人がそれで幸せなら口出しはしないよ。むしろ応援する」

「……ユイ」

「だってミオは僕のこと、受け入れてくれたもん。なら、今度は僕が受け入れる番でしょ？」

あー、可愛いなあ。藤堂くんには、ずっと今のまま変わらないでいてほしい。汚れた社会の中で唯一咲く花のように、いつでも癒しを提供して欲しい。

「だから安心して、やつちゃんと幸せになつてね」

「……うん、そうだよ。ありがとう、ユイ！」

やつちゃん、というのは、どうやら藤堂くんのお兄さんのことらしい。名前は。

「夜を司るって書いて、やつかさって言うんだって」

と、りのちゃんがわたしの耳に口を寄せた。

「りのちゃん、知ってるの？」

小さな声で聞き返す。

「ええ、話だけは聞いてるから。でも、まさかの展開よねえ」

「うん…… 事実は小説よりも奇なり、だよな」

リアル男の娘が身近にいることも驚きだったが、そのお兄さんと滝口くんが付き合っているというのも、不思議な縁だ。

「まあ、薄々気づいてはいたけれど…… 滝口が同性愛なんて」

と、りのちゃんが小さく溜め息をつく。これも良い機会だと思つて、わたしは言った。

「でも、りのちゃんだって似たようなものでしょ」

「…… いーしゃ？」

りのちゃんが苦笑しながらこちらを見たが、わたしは気にすることなく、にこりと笑った。

「それよりもミオ、ちゃんと後でやつちゃんにも謝つてね？ 就活が上手く行かないって理由付けて、部屋に引きこもってるんだから」

「…… ああ、そっか。うん、分かった。ちゃんと連絡するよ」

ふいにりのちゃんは呆れたように言った。

「お兄さん、背が高いんですって。頭一つ分違うつて言つてた」

「つてことは、百八十くらいあるのかな？ 大きいねえ」

そうか、滝口くんは背の高い人が好みなのか。でも、滝口くんもまだまだ伸びそうなんだけどなあ。身長差が…… 萌えが…… うーん。

「本当にごめんな、ユイ」

「ううん。僕の方こそ、ごめんね」

どうやら仲直りは成功したようだ。これでまた、安心して二人の掛け合いが見られる。

「お兄さん、会つてみたいなあ」

「うん、あたしも」

25・夜司？

美音からの連絡が無いだけで、こんなにも自分が動揺するとは思わなかった。メールも、電話も、全て拒否されているだけなのに。会社見学の予約をしても、通話が切れた途端に俺は溜め息をついていた。就活は必要不可欠だから仕方がないが、美音もまた、俺には必要不可欠なようだ。

「……」

あれから十日。

夕樹ゆいつきの方も美音と距離が出来てしまったという。話しかけても無視される、と。それは俺も同じ状況にあった。しかし顔を合わせない分、気が楽である。

俺と美音だけの問題であれば良かったと、本当に思う。あいつがもつと大人になれば、きっとこんなことにはならなかった。そう思うと、弟には本当に申し訳ないことをした。

携帯電話を手に取り、メールの作成画面を出す。あまりしつこいと嫌がられるだけなので、あまりメールはしたくない。あの翌日と翌々日に、やはり心配で何度も電話をかけてしまっただけに、いい加減放置するべきだ。頭でそうと分かっても、心はやはりもやもやして行動を起こさずにいられなかった。

何て打とうか考えてばーっとする。

今日は確か、高校の文化祭だったな。弟はどうだっただろうか？ 楽しめただろうか？ 美音は、ちゃんと学校へ行っただろうか？ 『文化祭、どうだった？』

と、文章を打とうとして、やめた。明日もあるのだから、今日聞くことじゃない。

画面を待ち受けに戻し、携帯電話をぱたんと閉じる。

もうすぐ弟の帰ってくる頃だし、また何かなかったか話を聞こう。いつものように話が出来なかったと言われても、落ち込まな

いように心の準備をしておこう。

息を一つ吐いて、携帯電話を机の上に置く。暮れていく窓の外を少し眺めて、カーテンを閉めた。

机の隅に置いたデジタル時計を見つめる。光る文字盤が次の数字を示すと、携帯電話が鳴り出した。

はっとしてすぐに手に取る。開いた画面には『美音』の二文字。胸が高鳴るままに、俺は携帯電話を耳へ当てた。

「もしもし、美音？」

『あ、夜司^{やつかさ}？ あ、あの、おれ……』

小さな声だった。俺は言いたい言葉を飲み込んで、待つ。

『ごめん。……おれ、ワガママだった。本当にごめん』

「いいや、それよりも夕樹とはどうなってる？」

冷静を装って尋ねる俺。それは顔を合わせていないから出来たことで、直接会っていたら堪えきれずに美音を抱きしめていただろう。

『うん……今日、仲直りした』

「……そうか」

『ユイは、おれのこと応援するって』

「ああ」

『……本当に、ごめん』

弟の帰宅する音がした。妹がいつものように廊下を駆けていく。

「謝ることないさ。俺の方こそ、勝手なこととして悪かった」

『うん』

「ごめんな、美音」

素直に俺が謝ると、美音が少しだけ明るい口調になって言う。

『うっん。おれ……夜司のそばに、いて良いんだよね？』

「当たり前だろう」

『……うん』

美音が溜め息をつく。

弟にも言わなきゃ、と思った。俺も美音と仲直り出来た、と。

『明日、会おうよ』

と、いつもと変わらない調子で俺を誘う。

「でもお前、文化祭だろ？」

『うん。だから、来てよ。おれ、案内するからさ』

俺はちよつと笑って返答をする。

「そうだな、分かった」

美音がにっこり笑った気がした。

『約束だからね、夜司』

「ああ」

結局、通話を切った頃には夕食の時間を過ぎていた。途中で弟に呼ばれたが、無視してしまった。

慣れない長電話で疲れていたものの、遅れて食卓へ着く俺。

「今まで何してたの？」

と、母親に問われ、素直に答えた。

「電話してた」

「誰と？」

「彼氏。いただきます」

母親によそつてもらった白飯を口に運ぶ。母親は間を置いてから呟くように言う。

「……やっちゃん、大きくなったわね」

母親だからこそ、何か感慨深いものがあつたのだろう。それから居間でテレビを見ていた弟たちへ声をかけに行ってしまった。

「二人とも、そろそろお風呂入って」

「えー」

構わずに俺は食事を続けた。昨日まではさほど味を感じなかった食事も、今では美味しいと思える。

「あ、僕、ちよつとやることあるから、先に入って良いよ」

「あら、そう？　じゃあ、あーちゃん、ママとお風呂入りましょう」
「えー」

それから母親が妹を連れて廊下へ出て行くと、弟が俺の向かいの

席へ腰を下ろした。

「美音と仲直りしたよ」

「知ってる。さっきまで、ずっと電話してた」

弟は嬉しそうに笑って言った。

「良かったね、やっちゃん。僕も安心だよ」

別の意味が込められていそうだ、と思う。すると、弟はやはり言
った。

「すごく違和感あるし、慣れるまで戸惑っちゃうと思うけど、お幸
せにね」

兄弟間で恋愛の話なんてしたことがなかった。けれども、弟は俺
の何かを感じていたのだろう。

「……ずっと僕、不思議だったんだよ。やっちゃんは不真面目なの
に彼女が出来ないから、どうしてだろうって」

「別に不真面目だからモテるわけじゃないぞ」

「うん、今はそれくらい分かってる。けど、中学の時、本当に不思議
だったんだよ」

そう言って弟は、また嬉しそうな顔を作った。

「ミオはああ見えて寂しがりだから、あんまり放置しないであげて
ね」

俺の方があいつのことは知っているような気がするが、まあ良い
だろう。

「ああ、分かった」

と、麦茶の入ったコップに手を伸ばす。半分ほど飲んで、テーブ
ルへ置く。

「でもさ、やっちゃん」

「何だ？」

茶碗に入った残りの白飯を、おかずと一緒に口の中へかきこんだ。

「僕たちって、おかしな兄弟だよな。父さんが言ったように」

俺は頷くことも、否定することもしなかった。

ただ口の中を空にしてから言う。

「それが俺たちだ。どっちも、今さら治せるようなものじゃない」

「……うん、そうだよね」

コップに口を付けて、中身を全て飲み干した。

弟は俺を見て、何か考えるような様子を見せる。食事を終えた俺は食器を重ね、席を立つ。

「ねえ、やっちゃん」

背中にかかった声に耳を傾けながら、台所の流しへ食器を置いた。俺が振り返るのとほぼ同時に弟が言う。

「美音の、どこが良いの？」

「……」

難題だった。思わず動きを止めた俺は、考えながら食卓へと戻る。

「あー、その……」

再び席へ腰を下ろし、向かいにいる弟の顔を見る。

「聞くな」

「えー、教えてくれたって良いのにー」

と、声を上げる弟。俺が顔を隠すように俯くと、生意気盛りの弟は言った。

「やっちゃん、恥ずかしいの？ 僕、誰にも言わないのに」
「そういう問題じゃない。」

「あ、ちなみにミオはね、やっちゃんの何が良かったって聞いたら」

「何してんだ、お前！」

とつさに声を荒げると、弟は笑った。

「教えてくれなかったよ」

「……」

はめられた。恥ずかしすぎるぞ、俺。

「いくら弟の僕でも、やっぱり恥ずかしいと思うよねえ」

と、笑う。弟がちよつと性格悪くなったような気がするの、気のせいだろうか。

何だか嫌になって、俺は溜め息をついた。

26・美音？

壊れると思った、世界が。

おれという存在が他人に明かされてしまったら、おれの世界は壊れるはずだった。

だけど、現実とは違った。おれが世界を壊そうとしていたんだ。

おれは自分自身に戸惑っていたから、こんな苦しい世界なら要らないと、目を逸らしていた。

自分さえ見えない自分なら、誰も愛してくれなくて良いと嘘をついて、おれは孤独に溶けようとしていた。

本当は一人じゃ何も出来なくて、この世界と真正面から向き合う勇氣もまだ無い、ただの子どもだった。そのことを知らされて、おれは無力だと実感するのが嫌だったんだ。

そうして目を背け続けるおれを引き戻してくれたのは塚田だった。おれを求める人はたくさんいるけれど、おれが求める恋人は夜司^{やつかさ}だけだった。おれが求める親友は、夕樹^{ゆいつき}だけだったんだ。

塚田はそのことをおれに気づかせてくれた。彼女は大人だ、おれなんかよりもずっと。

独りでいじけて、くだらない見栄を張っていたおれを、無防備なまま叱ってくれた。そんなのはおれらしくないと、無理矢理おれの腕を掴んでくれた。

おれは馬鹿だった。まだ子どもで、何にも知らなくて、ちつぽけで、生意気ばかり言って、ワガママにみんなを振り回していた。

…… 本当に、ごめん。

「時間、余っちゃったね」

「そうだな、文化祭が終わるのって」

「四時半。あと三時間以上あるよ」

昨日よりも賑わう校内を、二人で歩いていた。

「じゃあ俺、帰ろっかな」

と、夜司が言い出して、おれは驚いた。

「え、何で？ 今日は暇なんですよ？」

引き留めたくて、彼の前に立つ。

「うん、でも、もうやることねえし」

確かにその通りだ。文化祭と言っても、二時間もあれば全て回りにきれてしまう規模だった。

「……じゃあ、待ってて」

と、おれは言った。

「荷物とつてくる」

「は？」

目を丸くする夜司に、おれはにっこりした。

「行きたいところあるんだ、おれ」

夜司はすぐにおれの意図に気づいて言う。

「外、出て大丈夫なのか？」

「だって暇じゃん。時間までに戻ってくれば平気だよ」

「……分かった。行つてこい」

と、夜司が笑う。おれは頷くと、すぐに荷物を置いている教室へ向かった。

昼間の街を二人で歩くのは初めてだった。日曜日だからか、人通りも多い。

制服姿のおれと、私服姿の夜司。人はきつと、おれたちがどんな関係にあるかなんて想像もしない。

「で？」

「うん、確かこの辺だと思っただけど」

左右に並ぶ様々な店。おれは歩きながら目的の看板を探してきよるきよるする。

「どこに行くつもりなんだ？」

「楽器屋」

すんなり答えると、夜司がおれを見た。

「何で？」

「ギター見るの。今日は買わないけど」

夜司が前方に目を向けて、おれと同じように周囲を見回した。

「ギターか、俺もやりたいと思ったな」

「やらなかったの？」

「ああ。楽譜が読めないから諦めた」

「嘘つき。頭良いくせに何言ってるんだよ」

「あのなあ、美音。俺にも得手不得手ってもんが」

「あ、あつた！」

横断歩道を渡った先に、目的の看板が見えた。

夜司が溜め息をつき、おれは構わずに言う。

「おれ、弾けるようになったら、最初に夜司に聞かせるから」

赤だつた信号が青に変わり、おれは気分良く店へ向かう。

楽器屋に入ると、すでに何人かの客で賑わっていた。

「でも、お前がギターやるなんて意外だな」

「え、そう？」

エレキギターの並ぶ売り場で速度を落とし、その一つ一つを眺めていく。

「つつーか、音楽ってイメージじゃない」

と、夜司。

「じゃあ、何のイメージ？」

おれが尋ねると、彼は言った。

「夜のイメージ」

「ばーか」

呆れた、おれがセックスばかりやってるわけがないだろうに。

「冗談に決まってるだろ」

と、夜司は笑って言う。おれは無視して、ギターの品定め集中することにした。

まず目に入るのが値段だ。

「で、予算は？」

「んー、五万以内かなあ。セットで買わないなら、三万か四万」

それからギターの形、色。ストラトも良いけど、やっぱりレスポールの方がかつこいいなあ。

「色は？」

「特に考えてない。ぱつと見て、運命感じたら買おうと思ってる」

「運命、か」

赤でも青でも黒でも、かつこよければそれで良い。どうせ新品で買うのだし、なによりもおれは初心者なのでこだわるつもりはなかった。

「前も言ってたな、お前」

「うん。……え？」

顔を上げて夜司を見る。話、聞いてなかった。

「だからお前、俺とも運命だつて言ってたろ？」

「ああ、うん」

おれを見て、彼が呆れたように笑った。

「お前も夕樹と似て、ロマンチストだな」

「……」

急に恥ずかしくなってきた。運命だと思つのはおれの勝手なのに、改めてそんなことを言われると、困る。

「べ、別にそういうわけじゃないよ。ただ、やっぱり、運命ってあると思うし……」

視線を戻して、エレキギターを見ていく。

夜司はおれの後ろについて歩きながら言った。

「まあ、俺もそれには同意だな」

はつとして振り返ると、すぐそばに夜司の顔があった。

「恥ずかしいから、口に出しては言わないけどな」

と、大人の表情で微笑む。……キスされるかと思った。期待したのに残念だ。でも、公衆の面前でそんなこと、できるはずもない。おれはすぐにまた、きらきら光るギターたちの方を向いた。

おれたちが世間から見えて異質なことは分かっている。おれたちはずっと一緒にいることは出来ても、夫婦にはなれない。社会から嫌悪や畏怖の目を向けられるであろう事も、分かっている。

それでもおれの親友や、仲間たちはこんなおれを受け入れてくれたから。

「じゃあおれ、大人になっても言い続けるよ」

「何を？」

大好きな彼氏を振り返って、意地悪く微笑む。

「夜司はおれの運命の人だ、って」

27・咲真？

オレの名は逢野咲真。おののさくま ほとんどの奴からサクマと呼ばれるが、それは名前であって苗字ではない。ノット佐久間。

ややこしい名前だと物心ついた時から思っていたが、名付けられてしまったものはしょうがない。オレには双子の姉がいて、そいつの名前が真咲まこきなのだから、説明せずとも分かるだろう。オレの両親はさりげなくDQNだ。

しかも、その姉の方が頭が良いという現実。早大を第一志望に据えてひたすら勉強して、見事に合格するという努力家な天才だ。オレは……姉が滑り止めとして第二志望においた大学を第一志望にし、必死に勉強してギリギリ合格。姉には馬鹿にされたが、むしろ褒めていたきたい。

で、そんな姉とは思春期の頃から仲が悪い。双子だからってお互いの考えが読めるなんて、空想でしかない。分かるのは行動パターンくらいのもので、オレは姉の事なんてほとんど知らなかった。あつちもオレの事なんて知らないだろう。

双子にも、色々あるのだ。

「寒い」

「十一月ももう半ばだしな」

「そういう意味じゃなくて」

「じゃあ、どういう意味だよ？」

と、大学の中では親友だと勝手にオレが思っている友人、藤堂夜司とうどうやかは言う。

「彼女には振られるし、財布はすかすかだし、未だに内定ゼロだし」
「オレの返答に夜司が納得する。」

「ああ、なるほど。寂しい奴なんだな」

「それ言わないで、マジへこむから」

と、オレは深く溜め息をつく。

夜司はおかしそうに笑うと言った。

「落ち込んでばかりじゃ、良いことないぞ」

「ぐう……」

それもそうだ。後ろ向きではなく、前向きでいなければ。

けれども、貢ぎまくった彼女に振られたショックは、そう簡単に癒せそうもない。

「誰かオレに元気を分けて」

「人に頼るな」

夜司は冷たい。それを他の奴らは様々に受け取るから「良い人」と言ったり、いろんな意味を込めて「ガチホモ」と陰口をたたく。オレは意外と顔が広く、同じ学部の奴らのほとんど知り合いだ。ただし、中でも性格の悪い奴らと付き合う気はないから、すぐに縁を切ってオレは夜司とつるむことにしていた。

で、そんな夜司は妙に優しいところもあって、オレはそこが好きだ。

「そっぴや、お前に見せたっけ？」

「え、何なにー？」

顔を上げて彼を見やる。

「ちよつと待つて」

と、携帯電話を操作し、オレへ画面を向けた。

「妹の最新画像」

そこにいるのは、ロリータな服に身を包んだ中学生くらいの女の子？ と、それに合わせるようにひらひらな服を着た幼い女児。

「か、かわいい……」

「やっぱお前、ロリコンだろ」

「ただの子ども好きです。つつか、お前、妹二人いたっけ？」

夜司に携帯電話を返しながら尋ねると、彼は言った。

「ああ、えつと……」

画面にしばらく目を落とし、さらりと答える。

「弟。女装するのが趣味なんだ」

「……え？」

女の子かと思った。

「もっかい見せて」

と、手を伸ばして携帯電話の画像をもう一度見る。

よく見てみると、確かに少年っぽい。女装が趣味とは珍しいものだが、それにしてもにこにこしていて愛らしく、夜司の弟には見えなかった。本当に血、つながってるのか？

「弟も可愛いな」

「どっちもやらんぞ」

「いやいや。オレ、趣味じゃないし」

と、オレは笑う。むしろ、初めて見た友人の弟の画像が女装姿でどうよ？ そら、性別疑うわ。

携帯電話を返し、オレはちらりと自分の右腕に付けた時計を見た。講義開始十分前だった。

「やべ、授業行ってくる」

鞆を引っつかみ、慌てて席を立つ。

「おう、行つてら」

と、夜司の声を背に、急いで教室へ向かった。

夜司を気に入っているのは、彼が何もしなくてもそこそこ成績の良い点にもある。今はもう授業がバラバラになってしまったが、去年まではノートを見せてもらったり、勉強を教わったりして世話になった。

彼が同性愛者とか異性に興味ないとか、そんなことはオレにとつてどうでも良かったのだ。

バイト先は自宅近くのコンビニだ。就活もあるので最近は週に三日しか働いていないが、前までは五日間びっしりだったため、仕事にはもう慣れっこだ。

今日のバイトを終えて自宅へ帰ると、おふくろが誰かと電話をし

ていた。

構わずに二階へ上がり、敵^{あね}とばったり遭遇。

「まだ寝てなかったのかよ」

居間で退屈そうにテレビを見ていた真咲はオレを見ようともしせず
に言う。

「おじいちゃん、今度こそやばいって」

「は？」

思わず立ち止まる。

「あと一ヶ月も持たないそうよ」

「……ああ」

実家で一人、田舎暮らしをしているじいちゃんの顔を思い浮かべて、妙に切ない気持ちになった。

「で、さっきからずっと伯母さんと話してるの」

と、階下を指さす真咲。

「ふーん」

オレは適当に頷くと、自室へ向かった。

元々、この家はじいちゃんやばあちゃんと共に暮らすために建てられた二世帯住宅だった。しかし、工事が終わる直前にばあちゃんが急死して、じいちゃんは実家から出るのを嫌がった。それからずっと、近くに住んでいる独身の伯母さんが面倒を見ていたが、ついにじいちゃんにもお迎えが来るらしい。

溜め息をついて鞆を床へ下ろす。コートを脱いでハンガーにかけ、その流れで寝間着に着替える。

隅に畳んで置いた布団を敷いて、そこに腰を下ろした。いつかはオレが主になるこの二世帯住宅の二階で、オレと真咲が暮らすようになったのは高校生になってからだった。両親共に働いていることもあり、別々に暮らすことが決まった。四人揃う時には一階で食事をするが、それも月に一度あるかないかだ。

真咲の部屋は廊下を挟んだ向かいにある。彼女がテレビを消し、居間の電気を消して、自分の部屋に入っていく音がした。

「……」

人間、女性の方が精神的な成長は早い。真咲もその例に漏れず、昔からしっかり者だった。幼い頃はまだ仲が良かったし、小学校を卒業するまでは普通の姉弟だった。

中学校に入って、男女の双子ということを珍しがられて同級生からさんざんいじられた。思春期真つ最中のオレはそれが嫌で、真咲と距離を置くようになった。でも、家の中では仲が良かった。

高校は別々の学校を選んだ。出来の良かった真咲は地元の進学校、オレは出来るだけ偏差値の高い私立。これが未だによく分からないのだが、オレは真咲といつも同じ立場にしようとして、すごく頑張った。だから大学受験でも頑張ったのだけれど、結局置いて行かれてしまった。

両親もオレなんかより真咲の方に期待している節があり、それが今のオレたちを作ったように思う。……たぶん、悪いのはオレ一人なのだろう。それなのに、オレは真咲を避けている。

「そつえば」

と、突然扉が開けられてびっくりした。

「な、何だよ、いきなり」

顔だけこちらに向けた真咲が淡々と言う。

「あやし、大学院行くから」

そしてぴしゃりと扉を閉める真咲。

「……」

嫌味だ。就活で落ち続けているオレへの嫌味だ。

仲が悪くなつてから、真咲は意地悪な人間になっていた。そしてその嫌な真咲をオレはそのまま受け入れるから、さらに仲が悪くなる。

……本当は分かってるよ、オレが真咲に対して優しくすれば元に戻るって。

「あー」

欠伸まじりに発声して、布団に寝転がる。

……何かが足りない。

夜司は『自分の前にある壁をやつつけるのが先決』だと言ったけれど、オレもそうなのだろうか？ そうだとしたら、やつつけるべきはやはり……姉か。

28. りの？

クリスマスまであと約一ヶ月。藤堂さんと付き合い始めて、約一ヶ月。

「写真ないの？ 写真」

と、あたしが催促すると滝口は言った。

「ねえよ。っつーか、お願いだから諦めろ」

「嫌よ。だって見たいもん、ねー？」

隣に座るいーしゃに同意を求めれば、

「ねー」

と、いつものように乗ってくれる。滝口は呆れたように溜め息をついた。

「やつちゃん、あんまり写真好きじゃないから」

と、フォローする藤堂くん。優しいのは良いけれど、それでも気になるものは気になる。

どうやら滝口の彼氏でもあるお兄さん、文化祭に来たというのだけれど、あたしもいーしゃも会えなかった。同じ校内にいたはずなのに、すれ違うこともないなんてひどすぎる。

「そうなの？ じゃあ滝口くん、今度盗撮してきてよ」

「盗撮って犯罪じゃねーか！ 嫌だし！」

と、いーしゃにいじられる滝口。最近は四人の関係性が変わってきたように思う。

実際、あたしと藤堂くんは恋人同士になっているし、いーしゃと滝口の仲もすごく良い。彼が同性愛者だと知らなかったら、カップルに見えたことだろう。

「何でそんなに嫌がるの？ せつかくの萌えがー」

と、いーしゃ。普段は腐女子であることを隠して生活しているのに、あたしたちの前ではオープンになってきた。別に嫌じゃないから良いんだけど、そうして滝口や藤堂くんをあからさまにネタにす

るのはどうかと思う。

「でも、恥ずかしがっちゃう滝口くんだけでも十分萌えるよ」

そう言っていていーしゃがにつこり笑う。台詞がもつと別のものなら、小悪魔に見えることだろう。

「それ、あんまり嬉しくないぞ?」

「え、そう?　じゃあ、今度から別の言葉考えるね」
そういうことじゃない。

「塚田さんって、元からあーいう人?」

と、藤堂くんが声を潜めてあたしに尋ねてきた。呆れまじりに頷いてからあたしは言う。

「ええ、実はそうなの。あたしも、最初は普通の子だと思ったんだけど」

「……やっぱり、類は友を呼んじゃうのかな」

と、藤堂くんがちよつと楽しそうに笑う。

「そうね」

かくいうあたしもそれなりにオタクだし、藤堂くんは女装が趣味なのでコスプレに抵抗はないという。何となく毛色が違う気がするのは、滝口だけだ。

「そういえば、来週末なんだけど、ライブのチケットもらっちゃったの。滝口くんも行く?」

「え、何のライブ?」

でも、滝口といーしゃは音楽の話で盛り上げられるから、やはり類は友を呼ぶんだろな。

「コウノトリっていうV系バンド。知り合いが行けなくなったからって、譲ってくれたの」

「インディーズ?」

「もちろん。でも実力のあるバンドだから、行って損はないと思うよ」

あたしはあんまり音楽に興味がないから、いーしゃが共通の趣味を持った滝口と仲良くなっても不思議ではない。それどころか彼女

はきつと、滝口と友だちになれて嬉しいはずだ。前からいーしゃは、男友達欲しいって飢えてたから。

「良ければ今日の放課後、パソコン室行って公式サイト見よう。曲の試聴も出来ると思ったし」

「え、じゃあ行く」

というわけで、今日もあたしは藤堂くんと二人で帰ることになりました。

「最近、多いよね」

「ええ、そうね」

四人でいる時はそんなに意識しないで済むのだけれど、二人きりになると微妙な気分になる。

「昨日は塚田さんがピアノの稽古で、一昨日はミオと塚田さんが楽器屋に行っちゃって……」

と、思い出す藤堂くん。会話がない証拠。

「何か、気遣われてるみたいで嫌よね」

「う、うん」

藤堂くんは頷いて、小さく溜め息をつく。

季節が寒くなり始めてから、彼はちよつと背が伸びてきたように思う。滝口によると、お兄さんは背が高くてイケメンだって言うから、藤堂くんもそうなってしまうのだろうか。嫌だな。

「ねえ、藤堂くん」

「何？ 高内さん」

視線をこちらへ向ける彼。あたしはちよつとドキドキしながらも、言ってみた。

「今度、デートしない？」

「……う、うん。良いよ」

ぱつと目を逸らす藤堂くん、可愛い。

「あの、でもね、提案があるの」

薄暗い道に二人の影が揺れる。あたしは前々から考えていたこと

を思い切って口にした。

「藤堂くんが女の子の格好して、あたしも男装するの」

あたしの彼氏は少し困ったように笑うと、いつもと同じ口調で言った。

「良いと思うよ」

あーもう、可愛いんだからっ！ 萌え！

「でも、どこ行くの？」

「そうね、新宿とか原宿とか？」

わくわくしながらあたしはそう言う。

「それなら、原宿が良いな。僕、新宿知らないし」

「あら、そうなの？ じゃあ原宿をふらふらしましょう」

と、あたしはにっこり笑う。すると藤堂くんも微笑んでくれるから、好きだ。この瞬間が、最高に幸せ。

「でも、男装してたことないのよね。どうしたら良いと思う？」

と、問いかけると、藤堂くんは言った。

「うーん、どんな系統にするかにもよるんじゃない？」

「ああ、そうよね。あの……あたしね、一度で良いから執事の格好してみたいの」

素敵じゃない？ と、あたしが問うと、藤堂くんは笑った。

「ああ、良いかもね。高内さんならきつと似合うよ」

「……そう？」

「うん、すごく素敵だと思う」

ただ、執事の衣装を揃えるのって難しそうだと思う。それに、

「藤堂くんと並んだら、お嬢様と執事って感じになっちゃいそうだけど」

「え、ダメなの？」

「え？」

聞き返されてドキッとした。

「僕はむしろ、嬉しいなあ。あの、僕、お姫様とかお嬢様に憧れるから」

と、藤堂くん。やっぱり彼は、心は完全に乙女である。可愛い。

「そうね、そうよね。あたし、頑張って衣装探すわ」

それでいつか、藤堂くんをお嬢様って呼んでドキドキさせてやるんだから！

甘く見ていた。執事の衣装は予想よりも高価で、そう易々と買えた物ではない。

家のパソコンで確認し、あたしは溜め息とともにがくつと頂垂れた。コスプレって、予想よりもお金かかるのね。

少しでも安く買えないかと思ってネットオークションも見てみる。しかし値段はあまり変わらなかった。……いや、確かまだお年玉が残っていたはず。

思い立ったあたしはすぐに自分の部屋へ行って引き出しを開けた。奥の方にしまったお年玉のいくつかを取り出してみる。それらを開けると、偶然にもお年玉がそっくりそのまま残っていた。これなら、足りる……！

急いでパソコンの前に戻り、お気に入り登録していたネットショップで再び執事検索をかける。ドキドキしながら、購入ボタンにカーソルを合わせて……躊躇う。

一つ息をつくと、我ながら馬鹿だなと思った。かわいこちゃんの為にここまでするなんて、自分でも思わなかった。いや、藤堂くんのことは大好きなだけだね。日常的に金欠が基本の高校生だけど、やっぱりデートは楽しみたいし。

嗚呼、でもやっぱり、いくらお年玉を使うとはいえ、これは痛い出費だ。もっと他に使い道があるはずなのに、こんなところで一気に使うなんて……後悔したくないタイプなので、ちょっと迷ってしまう。

いやいや、これも全ては藤堂くんの為。惜しんだってしょうがない。

……そう、そうよ、りの。あの子の可愛い笑顔のためなら、これ

くらいどつてことないわ！ 時には諦めも肝心よ！
勇気を奮い起こし、あたしはマウスをクリックした。

29・咲真？

オレは真咲と違って非常にモテる。言い過ぎた、どちらかといえ
ばモテる。

「告白されちゃった」

「またか」

呆れたように言う夜司^{やつかさ}へ、オレは言う。

「でも付き合う気になれないんだよなあ」

彼女に振られてまだ一週間しか経ってないし。

「でも、すげー可愛い子なんだよ。マイコちゃんって言って、看護
学校行つててさ、性格も悪くないし」

目の前にいる友人がこういった話題に興味がないのはいつものこ
とだ。オレはどちらかというと一人でだらだら語りたいだけなので、
聞いていてくれれば十分。

「でもでも、オレってこう見えて一途だし？」

「どこが？」

と、突っ込む夜司。

「え、ひどい。オレ、すげー一途だぜ。元カノにいくら尽くしたと
思ってるんだ」

「良いように使われただけだろ」

「あう……その通りです」

もう嫌だ、落ち込む。夜司の突っ込みはありがたいが、胸にぐさ
つと来る。

机に突っ伏して溜め息をつく。

「あーあ、困ったなあ」

モテる男つても辛いものだ。まあ、女の子は好きだから良いん
だけど。

「前から思ってたんだけど」

と、ふいに夜司が口を開いた。オレは顔をそちらに向けて上目遣

いに彼を見る。

「就活に専念したらどうだ？ お前、遊んではかりいるからダメなんじゃないか？」

「……女の子いないと生きる意味がない」

「そうか」

スルーされた。

「つつーか、何でお前はいろんな奴と付き合えるんだ？ それも、一週間とか二ヶ月とか」

と、夜司が本当に不思議そうに問う。

「だってモテるんだもん」

「しね。ちゃんと答えろ」

適当に返したら怒られた。オレは顔を上げて椅子の背にもたれる。「何でだろうな」

頻繁に合コンしてるっていうのもあるだろう。バイト先にも出逢いはあるし。

「付き合うのって、一晚だけとかの軽い気持ちじゃ出来ないだろ」

「まあ、そうだな」

初めて彼女が出来たのは高校三年生の時だった。後輩の女の子と付き合ったのだが、すぐに上手く行かなくなって三ヶ月で別れた。

そして大学生になって初めてした合コンで二人目の彼女と出逢った。

「最初は真剣な気持ちで付き合っても、相手を知るほど嫌になるっていうか」

最短で一週間、最長でも四ヶ月程度だ。だいたい二ヶ月か三ヶ月で別れる。

「何かあるんだよなあ。あっちもさ、オレに関心なくなるみたいで」

「今まで何人と付き合った？」

「え？ えーっと……九人」

両手を使って数えてギリギリの数字。

夜司は呆れたようにオレを見て、鼻で笑う。

「よく分からないな」

何がだ。むしろ、オレだって男を好きになるお前がよく分からねえよ。

言いたいことを胸の中に押し込めて、オレはいつものようにへらへら笑う。

「オレにもよく分かんねえや」

長く付き合えるなら付き合いたいと思う。けれども、すぐに関係が枯れてしまう。

「結婚しても別れそうだな、お前」

「やっぱそう思う？ オレ、長男だから困るなあ。両親に心配かけられねえよ」

と、オレはわざとらしく溜め息をついてみせる。

「まあ、その内に見つかるの良いな」

夜司が優しい言葉をかけてくれて、思わず胸がほっこりした。

「そうだな。いつか見つけてみせるさ、ずっと一緒にいても飽きない女」
ひと

それまではまだ、模索していたって良いのかもしれない。どちらにせよ、心配せずともオレはモテる。

先日告白してきたマイコちゃんには断って、オレはとりあえず就活に打ち込むことにした。

すでに四十連敗を達成しているので、そろそろ危機感も出てきた。今までも感じてはいたけれど、実感を伴うようになったのはつい最近だ。

インターネットの就職サイトを駆使し、気になる企業にはすぐにエントリー。会社見学や説明会への参加が必須であれば、スケジュールを確認して都合が良ければ申し込む。

リクルートスーツは着慣れたもので、最初の頃ほど違和感を感じなくなってきた。オレがスーツを着るイメージがないのか、周囲からのウケも良い。

さつさと朝食を済ませ、スーツに着替えて部屋を出る。

「……真咲」

食卓でのんびりしていた真咲に呼び止められ、仕方なく顔をのぞかせた。

「何だよ」

真咲はまだパジャマ姿だった。

「忙しい？」

「は？ 忙しいに決まってるだろ」

ムカツと来たので、すぐに玄関へ向かった。

「今日は何時に帰ってくるの？」

「さあな」

ぶつきらぼうに返して、さつさと階段を下りる。真咲がこちらを見ているような気がしたが、構わずに家を出た。

今日は説明会と会社見学に行かなくてはならないのだ。忙しくないはずがないだろう。

真咲はその実力を認められて大学院に行って研究に携わるらしいが、オレにはあいにくとそんな選択肢は与えられていない。出来の悪い夜司なら苦労すれば偉い人の下で働けるかもしれないが、オレは違う。努力したって結果は変わらないのだ。

それなら、一般企業に就職して一般的な家庭を築きたい。オレは、せめて幸福になりたいのだ。

朝から苛々していたせいで、電車を間違えた。慌てて遅刻の電話を先方に入れたが、これが恥ずかしくてたまらない。

がたんごとんと揺れる電車の中で溜め息をつく。今日はついていない。

私立の小学生だろうか、女の子と男の子たちが元気にきゃっきやとはしゃぎまわっていた。低学年なのか、話す言葉もまだまだ拙くて愛らしい。

子どもは好きだ。

夜司にそんな話をしたら、何故かロリコン認定されてしまったけれど、案外間違いでもなかった。小学生の女の子は好きだし、幼稚園生はもつと好きだ。

だがしかし、オレも一応男なので、そういった衝動に駆られることもないではないが、見るだけに留めておくと決めていた。犯罪者になるのはごめんだ。でも、やっぱり幼女は好きだ。

「……」

こんなことばかり考えているから、ロリコンって言われるんだろうな。ふとそう思っ、また溜め息が出た。

でも、いたいけな幼女を泣かせるのは趣味じゃないし、同意の上じゃないと気が気じゃない。

可愛い女の子は好きだけど、やっぱり一緒にいて飽きない人が良い。だって人は見た目じゃない。共通の趣味があるか、互いに尊敬しあえるか、そういうった内面的なものって大事だと思う。だから……年齢だっ、関係ないはずだ。

自分で自分を正当化させている気がしてきた。もうダメだ、オレ。車窓に目を向けてビル街を眺める。こんなところにオレを受け入れてくれる会社があるのだろうか。いいや、この世界に在るのだろうか。

本当に頭の悪い奴からしたら、全然マシなオレだけど、今の時代は学歴じゃない。即戦力なのだ。この不景気を生き延びるには、すぐに使える奴じゃないとダメなのだ。

オレはちゃんぽらんで、女の子がいないとダメで、成績も良くないし、態度だっ、て良くない。長所と言えば顔くらいのもので、精神的にはまだまだ子どもだと分かっている。根性とか忍耐とか、集中力があつたら良いのと思う。

自分では頑張っているつもりだけれど、真咲に言わせたら、オレの努力は努力ではないのだと思う。それは、それくらいあいつが頑張っている姿を知っているからなのだが、オレだっ、て自分なりに頑張っている。

電車が駅について、オレは腰を上げた。

子どもたちの横を通って車外へと出る。相変わらず騒いでいるあの子は無邪気な笑顔で、無意識に気持ちが明るくなる。

けれども、普段は考えずに放置している幼女への愛は、ただオレを異質化させるだけだった。

出来ることなら、保育士になつて毎日子どもと戯れていたい。そんなのは空想で、実際にやったら自分で自分をロリコンだと、変態だと認めるだけだ。危ない危ない。

「……よし」

改札を抜ける前に気合いを入れる。

今は幼女のことよりも、就活だ。すでに遅刻が決定しているだけに、きちんとした態度で臨まなければ先は見えないだろう。

一刻も早く、内定が欲しい。

大学院に行くとかほざきやがった真咲を、ぎゃふんと言わせてやるのだ。

30. りの？

昨日届いたばかりの執事服をキャリーケースに入れて待ち合わせの場所へ向かうと、真っ白な妖精さんがいた。

見つけた瞬間にドキツとして、目立つなあ……なんて思いながら歩み寄る。

「藤堂くん」

名前を呼ぶと、妖精さんがあたしに気づいてにっこり笑った。

「ああ、高内さん」

「待った？」

「ううん」

あたしもにっこり微笑み返したが、それにしてもどうしよう。

「どこかで着替えられないかな」

きよるきよると周囲を見回す。真っ白なローリータドレスにもこの白いケープを羽織った藤堂くんが言う。

「駅のトイレ、とか」

「ああ、そうね」

原宿に向かう途中の駅だったので、とりあえずあたしはトイレに向かうことにした。

「それにしても……」

と、あたしが振り向くと、藤堂くんが慌てた。

「え、何か変？」

あわあわと頭をいじってみたり、足元を見たりする藤堂くん。肩より長いエクステはストレートで、頭頂部にはこれまた真っ白な大きいリボンが付いている。靴も新たに買ったと思われる白いワンストラップシューズだ。

「ううん、すごく可愛い」

「……あ、ありがとう」

嬉しそうに頬を赤らめる藤堂くん。本当に妖精みたい。ちょっと

季節が早いが、雪の妖精さんだ。

「じゃあ、着替えてくるね」

と、あたしは女子トイレに入っていく。

執事服はちよつときつかった。体重を量る習慣がないから分らないが、夏の頃に比べて太ったのかもしれない。その脂肪が胸に集まってくれないのが残念だ。

ズボンの丈はちょうど良かったので、さほど気にしないことにした。

「お待たせ」

と、藤堂くんの元に戻ると、彼が目をキラキラさせた。

「か、かつこいい……」

「そう？」

「うん……すごく似合ってるよ！」

気に入っていただけらしい。あたしはちよつと調子に乗って右腕を差し出した。

「それでは行きましょう、お嬢様」

「うん……！」

嬉しそうに彼があたしの腕をとる。本当に執事とお嬢様だ。素敵すぎる。

さすがにあたしたちの格好は人の目を引いた。おじさんおばさんに限らず、同世代の人たちも訝しげに見つめてくる。

電車に乗り込むと、あたしは彼に尋ねた。

「ちよつと聞きたいんだけど、その格好で出てきたの？」

「え、うん」

「……恥ずかしく、ない？」

聞くまでもないことだと分かっていたけど、尋ねずにはいられなかった。

「うーん……ちよつと」

と、若干声を潜めて彼が言う。注目されて恥ずかしくないはずが

ないだろう。

「あ、でも、少し慣れてきたよ」

藤堂くんはそう言って少し笑った。彼はすでにその姿で街を歩いたことがあるからだろう。だけど、あたしはやっぱり恥ずかしい。

「それに、一人じゃないから」

「……あんまり可愛いこというと、襲うわよ」

脅しのつもりであたしが言うつと、藤堂くんは小さく頷いた。

「僕、別に構わないよ」

あたしは女の子だけれど、むらむらする。男だったら、すぐにも物陰に隠れて襲ってしまいそうだ。だが、あたしはやっぱり女の子であつて、襲い方も知らないのでやらない。

「……普通は逆なのに」

と、呟いて溜め息をつく。本当に藤堂くんってば、男らしくないというか……可愛すぎるんだから。

原宿来ると、自分たちの格好がそれほどおかしくない気がしてきた。もつとすごい人だっていないわけじゃないし、建ち並ぶ服屋は藤堂くん好みだし。

「さすがに人多いね」

と、藤堂くんが呟く。竹下通りは早くもクリスマス気分になっていて、たくさんの人々が行き交う。

「藤堂くん、白いから気をつけないと」

あたしが彼に目を向けると、彼は頷いた。

「うん、そうだね」

靴は仕方ないとしても、衣服に汚れが付いたら大変だ。飲食にも気を遣おうか。

竹下通りに踏み込んでみると、夏でもないのに暑苦しい感じがした。上から見たのと違って、実際に歩いてみるとキツイ。

ふと横を見たら藤堂くんが人波に飲まれていてびっくりした。はつとしたあたしは、すぐに彼の隣へ立って手を差し出す。

「はぐれちゃダメよ」

「ご、ごめん」

と、藤堂くんがあたしの手をとる。ぎゅっと繋ぐと、胸がむずがゆくなった。でもそれが、不思議なほどに心地良い。

「……僕、ちよつと考えただけど」

「何？」

がやがやと騒々しい通りを二人で歩く。

「あの、名前で呼んでもいい？」

「……じゃあ、あたしも名前で呼ぶ」

何だか恥ずかしくなつて、素っ気ない返答をしてしまった。藤堂くんが小さな声で言う。

「で、でも、恥ずかしいから……りのさん、でも良い？」

まさかの『さん』付け！？

「……う、別に構わないけど」

何だかおかしくないか？ いや、でもそんな藤堂くんも可愛い。

「じゃあ、りのさんで」

と、彼がにつこり微笑む。

「えつと、夕樹……？」

初めて彼の名前を呼んでみたが、何だかしっくり来なかった。彼もそれには気づいたようで言う。

「長いからユイで良いよ」

「でも、それだと滝口と変わらないじゃない」

「え？ あー……じゃあ、好きにして」

好きにしてって言われちゃった。でも思いつかないわ、どうしましよう。

「ゆいゆい」

「……パンダ？」

「えーっと、ゆいたん。いや、違うわね」

自分で言つて恥ずかしくなつたので却下。男に対して『たん』はさすがにないわね。

「ゆいつち、ゆいりん」

「あ、あの、無理しなくて良いよ」

彼があわあわし始めた。けれどもあたしは構わずに言う。

「ゆいにゃん、ゆいぴー」

そろそろネタが尽きてきた。考えた末にあたしは言う。

「良いわ、ユイで」

「う、うん」

恋人ってなかなか難しいのね、知らなかった。小さく溜め息をついて、前方に目を向ける。

「でも、ただこうして歩いてるだけでも楽しいわね」

「うん、そうだね」

繋いだ手がまだくすぐつたい。何というか、この様子なら別れ際にキスのひとつは出来そうだと思う。いや、でも、普通は男の方から……諦めよう、彼はまるで女の子だから、あたしが素直に男役に回れば済む。こんなだから、いーしゃに男前だからかわれるんだろうな。

「そういえば、今日はミオと塚田さん、ライブだと言ってたね」

「ああ、今日だったっけ？」

「うん。夕方からだって言ってたけど、二人も楽しんでも良いなあ」

ユイの言葉は遠回しに自分が楽しんでいるのだと聞こえた。

あたしは「そうね」と、頷いて、ちょっと気になる話題を提起する。

「滝口も、彼氏とデートしたりするのかしら？」

「……うーん、どうだろう」

「お兄さんと話したりしないの？」

「しないことはないけど……朝帰りが多いんだよね、やつちゃん」
朝帰りって……男同士だと、やっぱり頻度も半端じゃないのかしら。……考えたら、頭痛くなってきた。

「でも、一度は会ってみたいわね、お兄さん」

「写真撮らせてって言ったけど、やっぱり逃げられちゃうんだよね」と、ユイが申し訳なさそうに言う。お兄さんの顔を見るための、良いアイデアはないかしら？

ぽーっとそんなことを考えていると、ふいにひらめいた。

「分かった！ デートよ、デート！」

「え？」

目を丸くするユイへ、あたしはにっこり笑ってみせた。

31・咲真？

「困ったな」

「ああ、困ったな」

と、適当に返事をする夜司^{やつかさ}。オレは就活にどれほど打ち込んでも手応えを感じないから困ったのだと言っているのだが、彼は先ほどから誰かとメールのやりとりをしていた。

「就活する意味が分からなくなってきた」

「今まで何社受けた？」

「え、四十三かな」

夜司はふとオレの顔を見たが、すぐにまた携帯電話に目を落とすた。

「ぐだぐだ言っていないで頑張ろうぜ」

と、夜司は言う。そうやってポジティブになれば良いのだが、本当にやる気がなくて困った。最悪、フリーターになるしか……駄目だ、真咲が邪魔する。

「つつか、さつきから誰とメールしてんの？」

オレが尋ねると、夜司は携帯電話を机に置いた。

「彼氏」

「ふーん？ 喧嘩でもしたの？」

普段はそんなに頻繁に携帯電話をいじらない夜司のことだ、きつと何かあったのだらうと思った。

「いや、喧嘩じゃないけど説得中」

「説得？」

彼の携帯電話が震えだし、すぐに夜司はそれを手に取った。ボタンを押して確認すると、彼は溜め息まじりに言った。

「弟にさ、ダブルデートしないかって言われたんだ。最初は断ったんだが、すぐに別行動しても良いっていうからオーケーして……で、彼氏が今、こんな状態」

と、画面をオレへ見せる。

『あいつらと一緒に遊園地なんていきたくない』

「俺といるところを弟たちに見られたくないらしい」

「何だそれ」

「何て言うか……あいつ、妙にプライド高いんだ」

その気持ちは分からないでもなかった。自分を知っている人に自分の付き合っている人を紹介するのって、ちょっと恥ずかしい。

「うーん、やっぱり直接会って話すべきか……」

呟いてから文章を打ち、やがて机へ戻す夜司。

「お前、ここ最近、楽しそうだよな」

「ん、まあな」

「幸せ？」

「うん」

「……その彼氏ってのは、どんな奴なの？」

夜司は少し考えると、オレが今まで見たことのない顔をして言った。

「年下だよ。まだまだガキなんだけど、すげー可愛いんだ」

「かつこいいじゃなくて？」

と、オレが聞き返せば、夜司は首を振る。

「確かに大人びてはいるが、可愛いな。時々、素直じゃないし」

分かるようで、分からない。

夜司の恋愛話を聞くのは初めてだった。オレは小柄な子が好きなのだが、同性にしか興味の無い夜司にはまた違った見方や好みがあるようだ。

「外見は、そうだな……お前よりちょっと背が低くて、整った顔してて猫っぽい」

「へえ」

「あ、あと、意外と良い身体してる」

「おっと、分かった、もういい。ありがとう」

と、オレは夜司へ両手の平を向ける。夜司は語り足りない様子で

「おう、そうか」と、言う。

オレには男同士の下ネタを聞く勇気がなかった。聞いたところで変な想像をしてしまい、微妙な気分になるだけだろう。

「そっぴや、写メがあつたな。ちよつと待て」

と、携帯電話を手に取る夜司。別に見せてもらわなくて結構なのだが……夜司は人の顔を撮るのが好きだから、しょうがないか。

「ちよつと見にくいけど」

諦めて画面をのぞき込むと、ベッドに横たわっていると思われる少年が写っていた。長い髪のせいで顔が見えにくいものの、夜司が幸せいっぱいなことだけは伝わってくる。

「お前つてほんと、遠慮無いよな」

「そっか？」

「人の顔、撮るの好きだし」

「撮つた後、許してもらうちから良いんだよ」

夜司の言葉は自分を正当化しているだけのよう聞こえ、オレは呆れて溜め息をついた。

急に男が足りなくなつたと言われて参加した合コンは、すごく地味だった。

女の子たちは良くても上の下だし、雰囲気もすごく微妙。いつもはオレが盛り上げ役なのだが、良いところを見せたいらしくて友人が頑張っていたので大人しくすることにした。それに、オレは飽くまでも数合わせで、目立ってはいけないという空気があつた。

それなのに女の子たちがオレにばかり声をかけるので、さらに空気が危険なことに……ああ、もう。

「ちよつと便所行つてくる」

と、オレは席を立つた。せめてもの救いは、知っている店だということくらいか。これまでも何度か合コンをした店だから、気兼ねなくいられる。

お手洗いの方に向かっていくと、向かいから女の子が歩いてくる

のが見えた。彼女もトイレ休憩らしい。

そんなことを適当に考えていたら、その彼女がトイレの前で立ち止まった。女子トイレに入らず、オレをじっと見ている。

「……サクマくん、久しぶり」

「え……あれ、マイコちゃん？」

相手の顔をよく見て、はっとした。この前オレに電話で告白してきたマイコちゃんだった。やばい、気まずい。

「まさかこんなところで会うなんて」

と、くすくす笑うマイコちゃん。彼女に会うのは四度目になるが、今日はまた一段と女の子らしい格好をしていた。

「今日はあたしね、女子会なの。サクマくんは？」

「オレは、まあ、ちょっと……」

さすがに合コンとは言えなかった。マイコちゃんは「そっか」と笑う。高く結い上げたポニーテールが揺れる。

「じゃあ、また」

と、男子トイレに向かおうとしたら、彼女が背中中に声をかけた。

「この後、二人で飲まない？」

「……え？」

ちらつと振り返ると、彼女はどこか必死な様子で言う。

「今すぐでも、良いけど……」

オレは答えられなかった。確かにマイコちゃんは可愛いし、性格も悪くない。だけど、告白を断つてもなお、オレを誘うのはそれだけ未練があるのだろうか。くーっ、男心がくすぐられるぜ。

「終わったら、連絡ちょうだい」

「……おう」

すごく複雑な気持ちを抱えたまま、オレは男子トイレの扉を開けた。

女の子は好きだ。だけど、オレは就活に専念すると決めていた。結局、マイコちゃんには何も連絡せず帰路についていた。あちら

からの連絡もないし、一度は振った相手なのだから気にすることはない。うん。

家に着くと、家族はみんな寝ていた。すっかり静かになった家になるべく静かに歩く。

二階も消灯され、真咲の部屋からは物音一つ聞こえなかった。

自分の部屋に入って明かりを点ける。

コートを脱いで荷物を下ろす。

寝間着に着替えて布団を敷く。いつもと代わり映えない慣れた動作。

布団の上に腰を下ろして、倒れ込む。その辺に置いたはずの携帯電話を手探りで見つけ、画面を開く。

オレはちよつと後悔していた。彼女の誘いを断らなかつたら、今はどこで何をしていただろう？ ああ見えて積極的な彼女だからホテルか何かに連れ込まれたかもしれない。

それならそれで良いはずなのに、オレはやっぱり自分の決めたことに背を向けられなかった。遊んばかりではいけないのだ。

携帯電話を閉じて枕元に置く。

そういえば、真咲の恋愛に関する話を聞かなくなったな、と思う。中学の頃、サッカー部の先輩に惚れていたことは知っているが、それしか知らない。あいつももう大学生だし、彼氏の一人くらいいたっておかしくないのだが、真面目で努力家だから敬遠されているかもしれない。

……でも、あいつはオレがこうして、女の子とばかり遊んでいることも知らないのだろう。薄々気づいていても、あいつは口にしなから詳しくは知らないはずだ。話したくもないから、どうでもいいけど。

冷めてるなあ、本当。特に問題がないから普段は考えもしないが、双子にしては珍しいんじゃないだろうか。いや、男女だから仕方ないのかもしれない。

……いつになるかは分からないけれど、真咲はこの家を出て誰か

と暮らすのだろう。それまでの辛抱、それまでの関係だ。

オレもいつか、一生を共に出来る女性を見つけるんだ。……見つ
けて、自分の家庭を築くのだ。

32・夕樹？

「初めまして、高内りのです。あの、いつもお世話になってますっ」と、頭を下げるりのさん。やつちゃんは軽く会釈をして言い返す。「ああ、こちらこそ弟が世話になってます。えっと、兄の夜司です^{やつかさ}」
「知ってます」

「……え、ああ」

何だかすごく変な空気。りのさん、何だかハイテンション。なのに美音はむすつとしてている。

「じゃあ、行こうか」

と、僕が言うと、りのさんが笑った。

「ええ、そうね」

と、彼女に手を引かれ、歩き出す僕。今日は二人一緒に買った色違いのパーカーを着ているのだが、コートに隠れてよく見えなかった。もちろんレディスものなので、ちょっと恥ずかしいと思っていた僕は安心していた。

後ろではやつちゃんが美音に何か声をかけていた。最初にはつきり断っていた美音だが、やつちゃんに説得されてここに来ていた。その為、あまり乗り気でないのは仕方がないことだ。

「お兄さん、本当に似てないのね」

りのさんがそう言つて、僕は少し後ろを気にしながら答えた。

「でしょ？ あつちが父さん似で、僕と妹が母さん似なんだ」

「身長も、本当に高いし……不思議な感じだわ」

と、りのさん。後半は美音のことを言っているようだった。

二人が一緒にいるところを見るのは二度目だが、やつちゃんも美音も、普段とはまったく違った顔である。家族には決して見せない、弟の僕ですら初めて見る笑顔。友人である僕らですら知らない、どこか大人びた表情。

「何だかんだで楽しそうね」

と、りのさんがくすつと笑う。何か文句を言いながらも、美音の声は楽しそうだった。

「そうだね、僕らも楽しまなきゃ」

そう言って僕も少し笑った。

遊園地の中はクリスマスの飾り付けがされていて綺麗だった。高いところに設置されたスピーカーからもジングルベルが聞こえる。

「じゃあ、まずはティーカップから」

と、りのさんが後ろを振り向く。ぐるぐる回るアトラクションは、みんなで楽しめるからテンションも自然と上がる。

しかし、やつちゃんは嫌そうな顔をした。りのさんが「苦手？」と、尋ねると、やつちゃんは言う。

「あ、いや、別に何でもない」

そういえば、やつちゃんって昔から回ったり落ちたりするアトラクションが苦手だった。僕は好きでも嫌いでもないから大丈夫なのだけれど。

「じゃあ高内、がんがん回そうぜ」

と、美音が意地悪な笑みを浮かべた。

「もつちろん！ ユイは平気？」

「うん、平気」

やつちゃんが苦笑いでそっぽを向く。回す人が二人いるなら十分だし、僕は何もせずによよう。……やつちゃんの為にも。

季節柄、園内にはカップルが多かった。僕とりのさんはずっと手を繋いでいるので、その中に溶け込んでいることだろう。でも、やつちゃんと美音は手を繋がずに、一定の距離を置いて歩いていた。先ほどとは形勢が逆転し、今度はやつちゃんが美音に文句を言っている。

ティーカップに四人で乗り込むと、りのさんと美音が中心にあるハンドルをしっかりと掴む。

カップが動き始めると、二人はものすごい勢いでハンドルを回し

始めた。あつという間にカップが回転し、景色の流れが速くなる。

「まだいける！」

「ええ、まだまだいけるわ！」

りのさんと美音が意気投合するなんて珍しい。でも、思えば二人は最初から仲が良かったんだろう。でなければ、クラスが同じになっても相手に声なんてかけない。

「やばい、もういい、やばい」

と、やっちゃんが美音を止めようとするが、左手を額に当てて力が入らない様子だった。美音は構わずに限界までハンドルを回し、僕はただ笑っていた。

ぐるぐる回るティーカップ、りのさんが楽しそうに笑う。美音がやっちゃんへ「ざまあみろ！」と、言う。やっちゃんは何も言わずに終わるのだけを待っていた。

それからいくつかのアトラクションに乗って、ちよつと早めの昼食をとった。

やっちゃんはティーカップの後から気分が悪そうで、僕はちよつと心配だった。美音は元から意地悪なわけじゃないから大丈夫だとは思うが、あまりいじめすぎないように注意してもらわないと。

「で、この後は？」

と、食事をしながら美音が問う。

「予定では自由行動ね」

鞆から取り出したノートを開いてりのさんが言う。そこには、僕と二人で練ったスケジュールが書き込まれていた。

「で、集合は四時半」

「思ったよりも短いな」

と、やっちゃんが言うつと、りのさんは当然のように答えた。

「だって寒いんですもの。早く帰りたいでしょう？」

やっぱり彼女はクールだ。本当にさっぱりしている。

「そうだな、明日からまた学校だし」

と、賛成する美音。りのさんはノートを鞆へしまうと、ジュースを一口飲んで言った。

「あ、あとプリクラ撮りましょう!」

「プリクラ?」

嫌そうにするやつちゃんだが、美音と目を合わせると口を閉じた。

「滅多にないし、良いんじゃない?」

と、美音が楽しそうに乗ってくる。写るのは好きじゃないやつちゃんだが、反対しても意味がないので何も言わないようだ。

「良い記念になるね」

僕がそう言えば、やつちゃんが溜め息をついた。完全に諦めた様子だった。

園内にあるゲームセンターへ行くと、そこもカッパルで賑わっていた。暖かい空気に癒されながら、プリクラを探す。

「あ、やつぱりあった」

と、先頭を歩いていたりのが立ち止まった。

プリクラを撮るのは僕にとっても久しぶりのことだった。中へ入って、一人百円ずつ機械に投入する。

りのさんがてきばきと画面を操作。白い明かりが眩しくて、女の子一人に男三人というのが、改めておかしい組み合わせのように思った。

「ほら、撮るよ!」

と、楽しそうに言って、りのさんがちよつと腰を低くした。その隣で僕も腰をかがめ、後ろにやつちゃんと美音。ポーズなんてどう取ったらいいかわからないので、とりあえずピース。

一枚目はちよつと微妙な感じだった。

楽しまなきゃ、と改めて思った僕が彼女へ抱きつく前に、抱きつかれた。二枚目はラブラブ。

何を思ったのか、三枚目は後方の二人が僕らの真似をして抱き合っていた。いや、美音が一方的に抱きついているだけか。

それからまたりのさんが画面を操作し、四枚目。立ち位置を交代

すると、美音が積極的になり始めた。その初めて見る姿にどぎまぎしながら、僕は五枚目でりのさんの頬にキスをした。

最後は狙ったわけでもないのに、僕らも前の二人も、キスをしていた。終わってから、恥ずかしさでいっぱいになる。

落書きは自然の成り行きで、りのさんと美音がやることになった。

「……」

機械から少し離れたところで、やつちゃんと立っていた。僕はまだ恥ずかしくて、口元に手をやっていた。

「……」

やつちゃんに聞きたいことはいっぱいあったけど、どう聞いて良いか分からない。美音と仲良いね、なんて当たり前のことだから意味がないし。

「やつちゃん、意外と楽しんでたね」

「……まあな」

会話は続かなかった。きつと、やつちゃんも僕に対して何か思うところがあるに違いないのに。

出来上がったプリクラは、やけに華やかに仕上げられていた。たぶん美音がやったのだろうけれど、ハートマークがいっぱいだ。：

…これはこれで、何となく恥ずかしい。

「じゃあ、四時半にここ集合ね」

と、りのさんは言うのと、僕の手を取って早速歩き始める。

やつちゃんと美音が何か言葉を交わすのが聞こえたが、りのさんの声でかき消された。

「お兄さん、面白い人ね」

「え、そう？」

僕が聞き返すと、彼女は笑った。

「だって、嫌って言いながら最後はノリノリだったじゃない」

先ほどのプリクラのことだった。確かに、五枚目まではあまり楽しそうじゃなかった。それが最後、美音に熱いキスをしているのだ

から……。

「でも、やっぱり微妙な気分だなあ」

二人が付き合っているという事実を、今さらながらに実感させられていた。

「……そうね」

と、りのさんは言う。

「滝口が、あんなにはしゃいでるのも珍しいわ」

「うん……きつと、あれが本当のミオなんだよね」

僕には近づけないし、理解も出来ないところにいる彼を思っ
て、また変な気持ちになる。

「……あれも、よ」

と、りのさんが言っ
て、僕ははっとした。

「え？」

「あれも、滝口。あたしたちの知ってる不真面目でやる気のない滝口も、滝口。どっちも、本当のあいつだわ」

「そう、か……うん、そうだよな」

僕は頷いた。誤解しそうになっていたが、りのさんの言うとおりだ。やつちゃんと楽しそうにはしゃぐ美音も、普段の口の悪いじめっ子な美音も、どっちも彼だ。本当も嘘も、何もない。

そしてふいに、りのさんが僕の手を強く握った。

「さあ、まずはお化け屋敷に行きましょう」

「え、あ、うん」

向けられた笑顔があまりにも素敵で、僕はドキッとした。思考を切り替えて、僕はそれ以上考えるのをやめる。

33・美音？

「ジェットコースター乗りたい」

「駄目だ」

「何でー？」

夜司は不機嫌におれを見て、溜め息をついた。
やつかさ

「苦手なんだ」

「えー、楽しいのに。ジェットコースター」

と、おれが言うと、やっぱり夜司は嫌がる。

「楽しくなんかねえ。乗るならもっと普通の奴にしてくれ」

おれは不満だったが、構わずにのんびり歩き始めた。

「でもここ、絶叫系ばっかだぜ？」

「じゃあ、乗らなきゃ良い」

「乗らないでどうするの？」

「店入るとか」

「……つまんねーの」

と、おれはあからさまに溜め息をつく。夜司がジェットコースターに乗れないなんて知らなかった。あの夕樹ゆいつきでさえ平気なのに、人って見かけによらない。

高内がダブルデートなんて言い出した時は、すぐに拒否した。他人に彼氏と一緒にいるところを見られるのはすごく嫌だったからだ。特に、高内には見られたくないと思っていた。あいつは夜司の顔が見ただけで、そんなの夕樹にしつこく頼めばどうにかなっただろう。それなのに、わざわざおれまで居る必要があるのか？ と。

でも、結果としておれは楽しんでた。夜司と昼間に散歩くことは滅多にないし、ましてや遊園地で彼氏をいじめるのは面白い。プリクラだって、高内と夕樹がいちやいちやするから便乗して……最終的にはキスされちゃった。何か、嬉しかったなあ。

「どうせ時間もそんなにないんだ。ゆっくりしよう」

と、夜司が言い、おれはしぶしぶアトラクションを諦めた。

そこら辺にある店や土産物を適当に見てたら、あっという間に時間が過ぎてしまった。本当に短かった。

けれども、別に大した不満はなかった。ジェットコースターに乗れなかったのは残念だけど、夜司を無理させてまで乗りたいも思っていないから。

集合場所で二人、温かい飲み物を飲みながら待つ。

「何か、欲しいものあるか？」

「え？」

ミルクティーの缶から口を離して彼を見る。

「クリスマスプレゼント」

と、夜司がおれと目を合わせた。ああ、と納得してから、おれは視線を逸らすと缶を両手で持った。

「別にいらないよ」

冷えた指先が温まる。今飲んでいるミルクティーも、おごつてもらっていた。

夜司はしばらくおれを見ていたが、ふっと前を向いた。

「五千円以内なら、何だって買ってやるからな」

年上であることを気にしているのだろうか。何だかおかしくなつて、おれは少し笑う。

夜司が不思議そうに首を傾げると、見慣れた二人がようやくやって来た。

「さあ、次は観覧車よ！」

と、高内が元気いっぱいに声をかけてきて、おれはミルクティーを飲み干した。

何故最後に観覧車なのか、高内に尋ねると馬鹿にされた。

「日が沈む頃に乗るのが良いんじゃない。そんなことも知らないの？」

「……うるせえ」

大体にして、おれはあまり遊園地に来た事って少ないのだ。観覧車だって……あれ、乗ったことないな、そーい。

「では、二人でゆつくりどうぞ」

と、につこり笑顔で高内と夕樹が乗っていく。その次のゴンドラにおれと夜司は乗り込んだ。

「こーいうのって、バランス取った方が良いんだよな」

言いながら向かって左の席に陣取るおれ。その向かいに夜司が座る。

扉が閉められて、徐々に上へと上がっていく。少しだけぐらぐらと揺れているのが怖い。

「うわ……」

下をのぞくと、園内が灯り始めたイルミネーションできらきらしているのが分かった。

「お前、初めてか？」

「うん」

夜司の問いに正直に答える。地上との距離が離れるほどに、おれはドキドキしていた。

「……昨日、面接だったんだ」

と、夜司が急に言い出して、おれは窓の外をのぞくのをやめる。

「へえ、それで？」

「役員面接だった。二十日辺りに、連絡が来ることになってる」

ゆつくり、ゆつくり、頂上を目指すゴンドラ。

「……今回は、いける気がする」

就活のことなんて全然知らないおれだけど、その言葉は嬉しかった。夜司の就職が決まるのは、彼氏として喜ばしい。

「すごいじゃん。良かったね、夜司」

「うん……まだ、分からないけどな」

と、夜司がちょっとだけにやけた。二十日過ぎ、ということは一リスマス直前か。

「採用されると良いね」

「ああ」

六十社受けて、ようやく決まるのか。就職は厳しいって世間では言われてるけれど、本当のことなんだろうな。

ふと見ると、夜司の向こうに高内と夕樹の乗ったゴンドラが見えた。もうすぐで頂上だ。

「何か、観覧車って思ったよりもつまらないな」

と、おれはぼやいた。ただ頂上を目指して、下へ戻るだけの乗り物だ。楽しめるのも景色くらいしかないし。

「そうでもないんじゃないか」

夜司がふと立ち上がり、おれの隣へ腰を下ろした。ゴンドラが揺れて、バランスが悪くなる。

窓の外が街全体を映し出すと同時に、夜司がおれを抱きしめた。いつもよりも力強く重ねられた唇、ドキッとして身体が疼く。

ゴンドラが下り始めると、夜司が微笑んだ。

「な？」

二人きりの空間も、楽しむ要素の一つだったようだ。それにしても、王道すぎる。夜司は意外と単純思考だ。

予定通りに帰路へ着いていた。

夜司と夕樹を降ろした電車が動き出す。

「楽しかった？」

と、高内が尋ねてきて、おれは答えた。

「まあまあ」

本当はすごく楽しかったし、とても満足していた。けれども、高内にそんなこと言いたくない。

「それは良かった」

がたんごとんと夜の街を走る。車内にはおれたち以外にも客が居たが、静かだった。

「あなたたち、お似合いだわ」

「は？」

「会う前はちょっと心配もあったんだけど、真剣交際って感じ」

「……何様だよ、お前」

と、おれは苦笑いをする。高内はくすつと笑った。

「滝口が幸せそうで、安心したのよ」

「意味分かんねえ」

「まあ、想像してたのとは違ったけど」

「はあ？」

想像って何だ？ いや、高内は何を言いたいんだ？

「だって、あんたがイケメンだって言うから」

と、高内。思わず反論しそうになったのをこらえ、おれは返す。

「勝手に言ってる」

だって夜司は十分にかっこいいだろ。あの夕樹の兄貴だぜ？ 比べたら、断然男らしい。そりゃあ、女子から見たらイケメンとは言い難いのかも知れないけれど、おれにとってはイケメンだ。かっこいいし、超可愛い。

「……滝口って、意外とシャイよね」

「うるせえ」

楽しそうにしている高内が憎らしくて、おれは目を合わせないようにした。こいつとはすでに三年近い付き合いになるが、二人で話をするといつもペースを狂わされる。

「恥ずかしがらなくたって良いのにー」

おれに対して上から目線なのが、その大きな理由だろう。たまにはおれだって言い返すけど、いつだってリードを取るのは高内だ。

車内にアナウンスが流れ、また静寂に戻る。

ふと高内は笑顔を崩すと、小さな声で呟いた。

「いつまでも、このままでいられたら良いのにね」

どうやら彼女は、おれとの距離を否定的に捉えているわけじゃないらしい。くだらないことで言い争いをしたり、たまに意気投合したり、同じ高校を受験してクラスがまた同じになったりと、腐れ縁としか言いようのない関係でつながっているおれたちは、何だかん

だで互いのことを気に入っていた。

高内の言葉はおれもよく分かったから、いつものように頷く。

「そうだな」

中学の時も悪くはなかったが、今が一番心地良い。互いに別々の相手を想っているが、昔と変わらずにこうして同じ道を帰れることが……。

34・咲真？

去年のクリスマスと共に過ごした彼女は、とても可愛かった。小柄で細くて、明るくて。聖なる二十四日よるも、二人でカラオケに行つて朝までしゃいだ。けれども、年が明けた途端に別れを告げられた。オレって、振られることが多い。

「さみしーよー」

大学近くのファーストフードで、オレは嘆いた。

「じゃあ、そのマイコちゃんとやりに連絡したらどうだ？」

と、向かいの席で夜司やつかさが言う。

早くも冷め始めたハンバーガーを見下ろして、溜め息をついた。

「それが、風の噂で彼氏が出来たって……くっ」

がぶつとかじりついて、オレは食べることに集中する。まさかマイコちゃんがオレ以外の男に、否、マイコちゃんに彼氏の一人や二人……！

「そうか」

夜司がのんびりとコーヒーに口を付ける。オレはひたすらハンバーガーにかじりつく。

街はどこも赤と緑に彩られ、そこかしこにサンタクロースがいた。比例して、カップルも多くいる。

「俺、内定もらったんだ」

「あ、そう」

考えれば考えるほど苛々が増してくる。がつがつと食べ続けることと数分、ハンバーガーが残り三分の一になったところでオレは顔を上げた。

「え？」

夜司は首を傾げる。

「何だよ」

「……あ、いや、何でもない」

思わず俯いてしまった。夜司が内定をもらった？ そんなまさか。恋人にあげるプレゼントって、どういふのが良いかな」

と、夜司は言った。数分の沈黙の間に、彼の頭は別のことを考え始めたらしい。さっきの話題を掘り返すのも何だか気が引けてしまった。聞きたいのに、聞くに聞けない。

「欲しいものとか、聞いてないの？」

先ほどもゆっくり食べながら、オレは聞き返した。

「聞いたら、いらないうって言われた」

「聞いた意味ねえな」

夜司は外をうかがうように振り返って、またオレへ言う。

「あいつ、ギター買ったんだって。でも俺、よく知らないからさ」

「へえ、ギターねえ……」

オレも音楽はやったことがない。付き合ってきた彼女にも、そんな子はいなかった。

「じゃあ、無難にアクセサリーとかどうよ？」

と、提案すると、夜司が即答した。

「俺、あいつの趣味知らない」

「……お前ら、付き合って何ヶ月だっけ？」

「えっと……二ヶ月くらいだな」

「それでよくやってこられたな」

と、オレは思わず溜め息をついた。仕方がないから、今年だけは協力してやろう。

「しゃーねえ。プレゼント選び、手伝ってやるよ」

家に帰ると誰もいなかった。

まだ夜の七時なのに何故だろうと思っていたら、二階に書き置きが置かれていた。

『おじいちゃんのお葬式に行ってきます』

母さんの字だった。そういえば、一昨日辺りにまた伯母さんから電話が来ていたな。で、昨日は両親ともに慌ただしくして……

ああ、そうだ、オレは真咲と一緒に留守番することで決まっただった。

とりあえず自室へ行き、コートと鞆を放り投げた。あまりにも家の中が寒いので、居間へ行って暖房を付ける。

じいちゃん、死んじゃったんだな。

改めて実感すると、心の中にぽっかり穴の空いた気分になった。クリスマスを間近にしながら、天国に上ったじいちゃん。きっと、今頃はあちゃんと再会して、昔みたいに笑っているに違いない。

一緒に暮らすはずだったじいちゃんとはあちゃんの顔が浮かんで、らしくもなく泣きそうになった。オレも、両親に付いていけば良かったかな？ でも、真咲も家に残るって言ってたから、同罪か。

ぱちつとテレビを付けて、台所へ行き冷蔵庫を開ける。

真咲の作ったと思われるおかずがいくつが残っていた。それを取り出し、次に炊飯器の中をのぞく。

「……ない、か」

普段からオレは料理をしないし、真咲だったまにやる程度だ。仕方がないから、オレはご飯を炊くことにした。

米を洗って水入れて、炊飯器にセットしてスイッチを入れて数十分。

適当な番組を見て退屈を紛らせていたら、真咲が帰ってきた。

「珍しいわね」

と、オレの横を通り過ぎていく。確かにオレが真咲より先に帰ってきているのは珍しかった。

真咲は部屋から出てくると、まず初めに風呂場へ向かった。てきぱきと浴槽を掃除して、湯を張る。

そして真咲が風呂に入ったところで、ご飯が炊きあがった。オレは構わずに一人、食事を始めた。

真咲は女にしては風呂の短い方だった。二十分程度で上がってきた、オレの隣へ腰を下ろす。

「明日は家にいるの？」

ちらつとそつちを見て、オレは答える。

「暇だからな」

「そう」

真咲は洗面所へ向かい、濡れた髪をドライヤーで乾かし始めた。どうせ食べるんだろうと思ったから、食卓はそのままにしてオレは席を立った。自分の使った食器だけ流しに片付けて、自室へ向かう。

さつさと布団を敷いて、はたと気がついた。明日って、二十三日で祝日じゃね？ 何の予定もないけど。

寝間着に着替えて布団に寝そべる。

それから適当に携帯電話をいじっていたら、真咲がふいに扉を開けた。

「咲真に話があるの」

「は？」

オレは顔を向けなかった。

「だから、明日は絶対に家にいてね」

と、真咲は扉を閉める。意味が分からない奴だ、と思った。話があるなら、今話してくればいいのに。

何も予定がないと気が抜ける。オレが目を覚めたのは昼前のことだった。

「真咲？」

家が静かなので、いるはずの人を呼んだが返事がない。部屋にいるのかと思って扉を開けたが、やっぱりいなかった。

「……家に居ろつつたのに、意味分かんねえ」

話をするはずの本人が家を出るなんて何事だ。マジうぜえ。

とりあえず腹が減ったので何か食べようと冷蔵庫を漁ったが、ぴんと来ない。

マグカップを棚から取り出して、インスタントのスープを作った。それをのんびり飲んでも、姉は帰ってこなかった。

後で絶対に腹が空くと分かっていたが、オレはまた部屋に戻った。外に出るのもかったるいから、もう一度寝ようと思ったのだ。

そして布団に入ると、携帯電話が着信を告げた。びくつとして通話に出ると、真咲の声がした。

『咲真、起きてる？』

「おう、とつくに起きてるよ」

『じゃあ、これから帰るから。あなたに会わせたい人がいるの』

「は？」

話って、そういうことだったのか？

『とにかく、家でちゃんと待っててね』

と、真咲が一方的に通話を切る。

オレはどうしたらいいか悩んだが、布団を被った。携帯電話を枕の下に沈めて、目を閉じる。

眠れなかった。

「くそっ」

真咲の言葉が気になって仕方がない。

オレは布団を出ると、さっさと私服に着替えた。携帯電話を手に部屋を出て、居間のテーブルにそれを置く。洗面所へ向かって歯を磨き、冷たい水で顔を洗う。

どうして、よりもよってこんな時に話があるだの、会わせたい人がいるなんて言うのだろう。彼氏か？ 彼氏なのか？

ああ、苛々する。

居間へ戻って暖房を付けると、オレは温風がよく当たる位置に座り込んだ。手を伸ばしてリモコンを掴み、テレビを付ける。

昼間のニュース番組では、今日の夕方から明日にかけて雨が降ると言っていた。地域によってはホワイトクリスマスになるそうだ。

上等じゃねえか、東京にも降ってしまえ。

35・夜司？

いつものホテルに一晩泊まって、二人で初めての二十四^{イヴ}日を迎えた。

「さすがに雪にはならないか」

と、窓の外を見つめた美音が言い、俺は着替えながら言葉を返す。

「ならなくていい」

「何で？　せつかくのクリスマスなのに」

こちらを振り返って文句する彼だったが、俺は構わなかった。

「ほら、早く着替えるよ。今日は終業式だろ？」

美音はしぶしぶといった様子で服を着始めた。

サクマにいろいろアドバイスを受けて購入したプレゼントは、小さな文字の掘られた長方形のプレートのネックレスだった。シルバ―のそれは美音の首にかけられていて、わずかに差してきた朝日を反射する。

「本当は今日、会はずだったのに」

と、美音がまた文句する。

「別に何日だって構わないだろ。昨日はずっと一緒だったんだし」

「うん、そうだけどさあ」

俺の首には、美音のそれをぴったり包み込む長方形が合った。そこにも小さな文字が掘られており、いわゆるペアネックレスとなっていた。これなら身につけていてもおかしくないし、美音の場合は制服に隠せるから安心だ。

それから三十分もしないうちに、俺たちはホテルを出た。

外は薄くもやがかかっていて寒かった。一晩中降り続いた雨の名残がそこかしこに見られる。

あまり人氣がなく、美音が俺の手を取って言う。

「夜司^{やつかさ}の手、冷たいね」

「……そうか？」

ぎゅっと手を握りかえし、俺は前を向く。静寂が支配する繁華街には、二人の足音しか響いてこない。

また雨が降りそうだなと、ぼんやり思った。ホワイトクリスマスにはほど遠い寒さだろうが、いつかそんな景色の中を彼と歩いてみたい。

「今日はどこで食べる？」

と、美音が俺を見た。いつも早い時間にホテルを出るので、朝食を二人で取るのも恒例になっていた。

「そうだな、何か食べたいものは？」

「うーん……ファーストフードは飽きたから、それ以外が良いな」

大通りが見えてくると、少しずつ人の気配が漂ってくる。美音がぱっと手を離し、ふと立ち止まる。

「どうした？」

振り返って尋ねると、美音はぎゅっと俺に抱きついてきた。

「ずっと一緒にいられたらいいのに」

美音にとって、この日は世間と同じで特別なようだ。その頭を軽く撫で、周囲を気にしてからキスをする。

冷気が二人を取り巻く中で伝わる互いの温度。この道を先に進んだら現実に戻されてしまうから、互いに離れるのが惜しかった。

「行こう、美音」

「うん」

俺たちはまだ、大多数の中でもがくしか手段を持たなかった。それでもまだ、幸せだと思えた。

街が明るさを増してくると、どこからか声がする。

「あ、やっぱり夜司だー」

見ると、知ってる顔がそこにいた。思わずびっくりして足を止めてしまう。

「な、何でお前が」

言葉にならなかった。すぐ隣には美音^{かれし}が居ることもあり、どうし

ていいか分からなかったのだ。

「オレにも分かんねえ。けど、ラッキー」

弱々しい声でそう言っ、サクマがぼすつと俺の肩にもたれてくる。美音が不機嫌そうに「誰？」と、尋ねてきて焦った。

「大学の友人だ。えつと、ちょっと待て」

と、俺はサクマを引き離し、一人で立たせる。すると、彼の様子がやつぱりおかしいことに気がついた。

ふらふらしているし、目もうつろだ。サクマの額に触れると、熱があるようだった。

「あ、きもちいー」

と、呟くサクマを見て、俺は溜め息をついた。美音も状況は理解しているようだが、明らかに困っている。

「悪い、美音。先に帰っててくれないか？」

「えー」

「こいつ、熱があるみたいなんだ。家まで届けるには遠いから、とりあえず俺の家で休ませるよ」

「……分かった。夜司も、気をつけてね？」

と、美音は言っ、一人で駅へ向かって歩き始めた。後で絶対に連絡しよう、なかなか嫉妬深い彼氏だから気を悪くしているに違いない。

俺はまた溜め息をつく、サクマの腕を自分の肩に回して、その身体を支えた。

「で？」

俺のベッドを占領したサクマへ問いかける。

「……んー、家出したっばい」

と、サクマは言っ。

時間をかけて家まで連れてきたら、母さんが大慌てでサクマを看病してくれた。昨夜の雨で濡れた服を脱がし、俺の服を着させてベッドに寝かせ、冷却ジェルシートを額に貼り付けた。

そうしたらすやすや寝息を立て始めやがって、おかげで俺が休めなくなった。

夕樹が高校へ行くのを見送って、朝子が教育テレビに夢中になっているのを眺めた。意外と教育テレビは侮れなかった。

そうして時間を潰すこと数時間。

「家出？ 何があつた？」

「んー……」

ぼうつと天井を眺めて、サクマがくしゃみをする。

「ああ、真咲が変なこと言い出したんだ」

その名前には聞き覚えがあつたので、構わずに続きを促す。

「変なことって？」

「就職できないあんたに朗報よ、ずっと話そうと思つてただけ、遅くなつてごめんね」

思い出すように言葉を並べていくサクマ。

「あたしの彼氏の何とかさん、どこかの大学で何か専攻してて、起業する予定なの。それで、良ければ咲真も仲間に……」

そこまで喋って、サクマは口を閉じた。

「いい話じゃないか」

「うん……でも、オレ、見下されたような気がして、苛々してた」

彼には双子の姉がいた。その姉にそんなことを言われて、サクマは苛ついてしまったらしい。

「彼氏が帰った後、すげー喧嘩になつて……オレ、あいつのこと殴つた」

「……そうか」

「おかしいよな。オレ、暴力反対なのにさ」

と、サクマが自嘲する。俺には彼の事情は分からない。けれども、サクマが誰かに対して手を上げるなんて初めてだった。

「それで、家出してきたのか？」

「……うん、どうやらそうみたい」

馬鹿だな、こいつは。

「そんなにストレス、溜まってたのか」

俺は椅子から腰を上げ、サクマを見下ろす。

「明日には帰ってくれよ」

そして部屋を出ようとすると、サクマが言った。

「え、行っちゃうの？」

「はあ？」

寂しいなんて言うなよ、と言おうとしたら、サクマがいつもみたいにへらりと笑う。

「いやいや、何でもない。ありがとな、夜司」と、両目を閉じる。

「……おう」

いくら相手がサクマでも、普段通り適当に扱うのは良くないようだった。後悔したが、もう遅い。

扉をがちやりと開けて、俺はもう一度振り返る。

「なあ、サクマ」

返事はなかった。それどころか寝息が聞こえてくる。

自分も馬鹿だと思いながら、俺は言った。

「ごめんな」

静かに外へ出て、そつと扉を閉める。

先に就職が決まって、

俺は少し浮かれていたようだ。

36・りの？

学校へ来るのも今日が最後。冬休みに入ったらお正月だ。

「んー……」

「どう？」

「んー……何というか」

先ほどからずっと唸っていたいーしゃが、目を上げた。

「二次元と三次元はやっぱり違うよね」

それはどうやら、気を遣って言ったことのようにだ。あたしはいーしゃからプリ帳を取り上げると、そこに貼ったプリクラを見た。

「そりゃあ、当たり前でしょう」

と、ページを閉じる。

「イケメンっていうのも、人によって違ってくるもんね」

「そうよ、あたしたちが期待しすぎたんだわ」

そしてプリ帳を鞆の中へ仕舞う。いーしゃは滝口の方をちらっと見て、ぼそりと呟いた。

「別に不細工だとも思わないけど、まさかあんな人がタイプだったなんて」

独り言のつもりだろうか。

「いわゆる草食系じゃない。まさか彼、襲い受けなのかしら」

どうやら独り言ではないようだ。

「いーしゃ、変な想像はやめなさい」

「えー」

あたしが突っ込みを入れると、腐女子かのじょが分かりやすく文句を言うてくる。

「これは職業病みたいなものだよ。いつそのこと、りのちゃんも腐っちゃえばいいんじゃない？」

「遠慮します」

「面白いのにー、BL」

教室内がざわわしているから良いものの、日常会話でそんな話
はして欲しくないし、したくなかった。誰かに聞かれたらどうする
つもりなのだろうか、この子は。

あたしが呆れて溜め息をつくくと、予鈴のチャイムが鳴った。

寒い体育館で終業式を終え、教室へ戻った途端にみんなが暖房へ
群がる。あたしといーしゃは少し離れたところで温風を受けていた
が、すぐに担任の先生が来て席へ戻った。

冬休みの注意事項やその他の話を聞いて、通知表をもらってホー
ムルームは終了。あー、眠い。

でも、今日はもっと他にやることがあるのよ。

今年最後の号令で挨拶を終えると、あたしは気を取り直して鞆を
手に取った。

「ユイ！ 滝口！」

彼らの名前を呼んで、大きく手を振る。いーしゃはのんびり帰り
支度をしていた。

「約束、覚えてるわね？」

と、あたしが尋ねると、滝口がめんどくさそうな顔でこちらへ来
る。

「カラオケに付き合わされるんだろ？」

「何、嫌なわけ？」

「いや、別に」

と、滝口が欠伸をする。いーしゃの用意が出来た頃にユイも合流
した。

「じゃあ、行きましょう」

と、あたしはわくわくしながら先頭に立って歩き出す。

昨日の雨が嘘のように、すっかり空は晴れていた。それでも風は
冷たく、あたしはコートのボタンを締めた。

「まずはゲームセンターよ」

「ゲーセン？ 何で？」

滝口の問いに答えたのはユイだった。

「プリクラ、撮るんだよね」

「そう、四人でちゃんと遊ぶのは初めてだもの」
すると、滝口がまた嫌そうな顔をして言った。

「おれ、そんな話聞いてねえぞ」

「聞いてなくても撮るの。四人だと一人百円ずつで済むのよ?」

「分かりやすくして良いよね」

と、いーしゃがフォローしてくれる。

「まさか、百円も出せないわけじゃないわよね?」

あたしが意地悪に尋ねると、滝口はちよつとムキになった様子で言った。

「そこまで貧乏じゃねえよ」

学生に金欠は付きものだが、百円くらいは誰だって持っている。

それに、今日は以前からカラオケに行く約束をしていたのだから、持っていない方がおかしい。

学校近くのゲームセンターへ向かっている最中、いーしゃが滝口へ話しかけるのが聞こえた。

「そういえば、りのちゃんに見せてもらったよ」

「え?」

「彼氏さんのプリクラ」

滝口が何も言わずにいと、いーしゃがにっこり笑うのが分かった。

「素敵な人だね。仲も良さそうだし」

「……う、うん」

思ってもないことを口に出来ちゃう彼女って、すごい。ある意味、大人だと思う。

けれども、そんなことを彼女へ言うと、彼女はいつだって「思っていないわけじゃないよ」と、言う。いーしゃは、根が良い人なんだろう。でも、たまに腹黒いからよく分からない。

「今度は直接会ってみたいな。それで、話が聞きたい」

「え、何聞くつもりだよ？」

「もちろん、ネタのために」

「……冗談、だよな？」

「え、本気だよ？」

滝口の困っている様子が、見なくても分かる。いーしゃは本当におかしな子。

「やめなさい、いーしゃ。滝口をいじめていいのはあたしだけなんだから」

と、あたしは後ろを振り返る。

「そうなの？」

いーしゃは首を傾げると、すぐにあたしに向けてにつこり笑った。

「じゃあ、りのちゃんをいじめていいのはわたしだけね」

そう言う事じゃない。っていうか、自覚あったの？

「じゃあ、ユイをいじめていいのはおれだけな」

と、滝口まで言い出して、ユイが困惑した表情であたしたちを見る。

「え、じゃあ僕は？」

「……」

「……」

「……一番格下、言ってしまえば奴隷みたいなものだね」

ひどい言い方だ。さすがはいーしゃ、恐るべし。

「ど、奴隷？ そんなの嫌だよっ」

と、ユイが慌てると、滝口がひらめいた。

「分かった、お前は塚田をいじめりゃいいんだよ」

「え？ えっと……」

ユイはにこにこしたままのいーしゃをじっと見て、ぱっと視線を逸らした。

「塚田さんには勝てる気がしないよ……」

弱気な声がそう言っ、あたしは笑い声を漏らした。滝口もくすくすと笑って、いーしゃも楽しそうに笑い出す。

ユイは微妙な表情をしていたけれど、まんざらでもないようだ。自然と出来上がった上下関係は、そう悪いものじゃなかった。

年が明けてしまったら、この四人で過ごせる時間も残り僅かになる。二年生になったら、みんな一緒のクラスとは限らない。

それなら、今日はめいっぱい楽しもう。ユイの可愛い姿をすぐそばで見られるのも、きつとただけだから。

「今日は思いつきり遊ぶわよ」

「りのちゃん、やる気いっぱいだね」

「おれはやる気ゼロだけどな」

「っていつか、ミオはそんなことしか言わないからいじめられるんじゃない？」

「……じゃあ、やる気出す」

「じゃあって何よ？ 無理矢理やる気出されても嬉しくないわ」

「そうだそうだ」

「はあ？ じゃあ、どうすりゃいいんだよ！」

「ミオ、落ち着いて落ち着いて」

今だけは、心許せる仲間と笑っていよう。

37・咲真？

真咲の話は、確かにすごくいい話だった。就職先を探さないで済むし、真咲も彼氏に協力するというから、言ってしまえばオレたち姉弟が手を取り合って起業するようなもの。それなのに、オレは冷静な判断を放棄していた。

自分があいつに何て言葉を投げたのか、よく思い出せない。分けるのは、すごくひどいことを言った、ということだけだ。そして、気づいたらあいつの頬を叩いていた。たぶん平手だから痛くないと思うんだけど、その直後の、真咲の驚きで見開かれた目が忘れられない。それに自分でもびっくりして、部屋に逃げた。でも落ち着けなくて、外へ出たんだ。

ぐるぐると思考回路をいろんな考えが行ったり来たりして、眠れなかった。夜司のお母さんのおかげで熱はだいぶ下がったが、それとは違う頭痛がオレを襲う。

ああ、オレだって、なりたくてこんな状況になったんじゃないやねえよ……。

夜司やつかさに迷惑をかけていることは自分でもよく分かっていた。

「オレが家に帰りたくないって言ったら、どうする？」

と、おかゆを口へ運ぶ。

夜司はすごく嫌そうな顔をしたが、すぐにそっぽを向いた。

「もう家には泊めないぞ」

「だよね」

答えは分かりきっていた。

彼の妹の朝子ちゃんが、テイベアや他のぬいぐるみに一生懸命話しかけている。来年小学校に上がるにしては、ちょっと幼いのかなと思った。

「駅まで送ってやるから、後は自分でどうにかしろ」

と、夜司は言う。

「うん」

オレは姉弟じふんの問題に夜司と藤堂家を巻き込んでいた。これ以上の迷惑はかけられない。

朝子ちゃんは遊ぶのに飽きたのか、うさぎのぬいぐるみを頭からデイベアに突っ込ませる。そして倒れたデイベアをはっと見て、ぎゅと抱きしめる。

「実物は可愛いな」

と、オレが言うと、夜司もそちらに目を向けた。
「だろ？」

と、夜司が自慢げな笑みを浮かべる。年が離れていても、兄妹仲は良いらしい。羨ましいものだ。

デイベアと会話をしていた朝子ちゃんは、やがてオレたちの方へ来た。

「やつちゃん、くまさんがたいくつなの」

「はあ？」

退屈なのは自分だろうと心の中で突っ込みを入れたくなる。夜司も同じ気持ちだろうと思ったが、彼は妹を抱き上げると膝の上に座らせた。

「ほら、朝子。この人がどうしようもない馬鹿のサクマだ」

何だかとてもひどい紹介の仕方だが、朝子ちゃんはオレをじっと見ると言った。

「いけめん？」

語尾に疑問符付いてますけど。

「そつだ、イケメンだ。でも馬鹿なんだぞ」

「……あーちゃんはあさこつていいいます」

と、名乗ってくる朝子ちゃん。可愛いけど、兄貴に言われたことは頭の中でどう処理しているのか気になる。

「サクマです」

と、オレはにっこり微笑んだ。すると朝子ちゃんは夜司の顔を見

た。

「しゃべった！」

……うん、オレ、人間だからね？ 喋るに決まってるでしょ。

「一応人間だからな、馬鹿だけど」

と、夜司。こいつは妹に何をさせたいんだ。

朝子ちゃんは床へ降りると、放置していたぬいぐるみの中へ入っていき、小さなデイベアを取り出して戻ってきた。

「さくまにこれあげるー」

と、オレへそれを差し出す。受け取ったオレは、ちょっと戸惑いながらも彼女の頭を撫でてやった。

「ありがとな、朝子ちゃん」

「いえいえー」

につこり笑って嬉しそうにする朝子ちゃん。オレはぬいぐるみをテーブルの上に置いた。

「もらっちゃった」

「でも返せよ。それ、誕生日プレゼントなんだから」

「分かってるよ。朝子ちゃん、誕生日いつなの？」

朝子ちゃんはまたぬいぐるみの方へ行くと、こちらをちらちらと気にしながら再び一人で遊び始める。

「十二月の一日だ」

「へえ」

この可愛い幼女は十二月生まれらしい。でも、もらったばかりのプレゼントをオレにくれるって何事だ。

「あの子、お持ち帰りしていい？」

と、オレが冗談で聞くと、夜司は即答した。

「駄目だ」

「相変わらずつれないねえ」

と、オレは笑う。本当にお持ち帰りしたところで、オレは彼女の面倒なんか見きれない。

でも、やっぱり可愛いなと思う。相手が二次元だったら、確実に

襲ってるんだけどなあ……いやいや、もちろん冗談です。うん、オレはそこまで変態じゃない。

夕方の四時半、良い子はお家へ帰りましようと町中にアナウンスが流れたところで、オレは藤堂家を出た。

「まっすぐ家に帰れよ」

と、隣を歩く夜司が言う。

オレはまだ迷っていた。すっかり日が暮れて、街灯が眩しく見える。

「……でも、さ」

「何？」

「何っ？ か、こんな激しい喧嘩って久しぶりでさ。オレ、どうしたら良いかな」

夜司は前を向いていた。

「素直に謝れ。それしかないだろ」

「……正論はやめて欲しいな」

と、オレは苦笑する。分かりきっていることだから、そう言われるのが嫌だった。

「双子の事情は分からないが、兄弟は兄弟だと思うぞ。昔も今も、関係は変わらないと思う」

冷たい風が足元をすり抜けていく。

「そうかな」

「そうだよ」

と、夜司。何か確信でもあるのか、実験なのか。

「……オレ、昔は本当に仲良かったんだ。あいつ人付き合いが苦手でさ、だからオレが代わりにいっぱい友だち作って、いつも一緒に遊んでた」

その他のことはあいつが先に立っていたから、物心ついたときには自然と役割分担がされていた。

「小学校に上がってからは、あいつに勉強教わったりして……あの

頃は、僻むこともなかったんだよな」

むしろ、あいつにはいつも感謝してた。尊敬してた。あいつもオレのこと、そんな風に思ってくれていたと思う。

「プライドが高くなっただけじゃないのか」

的外れでもない指摘に、何だか心が落ち着くのを感じた。

「あー、そうかも」

性格が卑屈になったとか、ネガティブになったとかじゃなくて、オレはプライドが高くなっただけか。でもそれって、たぶん真咲もそうだ。

「お前が本当は悩んでたってこと、俺は知ってるよ」

と、夜司は言った。直接そんな話はしたことがないはずなのに、夜司は気づいていたらしい。やっぱり自分って、自分では分からない。

「たぶん、俺と同じで不真面目な自分に嫌気が差してるんだろ？」

「嫌気っていうか……まあ、自業自得って口では言うな」

道の先に明かりが増えて、駅へ近づいているのが分かる。

「お前にもさ、きっと自分を偽ってる部分があると思うんだ。だから、それを外せばどうにかなる」

「外すって、どうやって？」

「……さあな」

オレは思わず溜め息をついた。夜司は優しいけど、やっぱりひどい奴だ。嫌いじゃないけど。

「まあ、いいや。諦めて帰るわ」

それまで俯き加減だった顔を、しっかり前へ向けた。

家の中は静かだった。そういえば今日はイヴだし、真咲もデートに行っているのかもしれない。

そんなことをぼーっと考えながら二階へ上がると、居間に明かりがついていた。

びくっとして、進むのを一瞬躊躇う。

「……ただいま」

声をかけて中へ入ると、真咲が椅子に座って居眠りをしていた。

「……あら、咲真？」

ゆっくりと顔を上げ、こちらを見つめる真咲。オレはどうしようか悩んだあげく、真咲の向かいの席に腰を下ろした。

「ごめん、真咲」

と、テーブルに両手をついて頭を下げる。

真咲は何も言わなかった。そつと顔を上げて見れば、姉が昔みたいに笑う。

「うつん、謝るのはあたしの方。急に変な話持ちかけて、ごめんね」
何て言葉を返したらいいか分からなかった。はつとして、オレは真咲の左頬に手を伸ばす。

「痛くなかったか？」

「別に。すぐ冷やしたから平気よ」

と、真咲が言う。

オレは安心して、手を引つ込めた。二人で、こんな風に落ち着いて話するのは数年ぶりだった。

顔を合わせているのが妙にくすぐたく、懐かしい。

真咲も似たようなことを考えているような気がして、視線を逸らした。双子だからだとは思わないけど、お互いに複雑な感情を抱いていることが徐々に伝わってくる。

やがて真咲は言った。

「あたしね、あんたには良いところがいっぱいあるって思ってる」

「……おう」

「まず顔が良いでしょ」

顔かよ、と突っ込みたくなったがやめた。

「次に、顔が広い」

「……」

「初対面の人とも、すぐに仲良くなれる」

「……」

「すごく営業向きだと思うの」

「営業かよ」

まあ、確かに自分でもそれは思うけれど。

「だから、協力してほしいの。あたしは大学院行くから、たまにしか顔出せないけど、きつと上手く行くわ」

「……うん」

真咲がにこにこして、オレも自然と笑みを浮かべる。これ以上、話をしても無駄だった。すでにオレたちは許し合っていたからだ。その表情のまま、真咲は言った。

「ところで咲真、どういった内容でやるか覚えてないでしょ？」

「うん、全然覚えてない。つつか、聞いてなかった」

姉の表情が威圧的になる。オレはちよつと、苦笑ぎみになる。

「もう、しょーがないんだから。今夜、みんなでパーティーするから来る？」

「え、行つて良いの？」

「もちろんよ。彼もいるし、他にも協力してくれる仲間がみんな集まるから、良い機会でしょ」

「わーい、やった！ タダ飯？」

「一人二千元」

「……ATM寄らせて」

「はいはい」

夜司の言うことは本当だった。実感としては、昔から変わらないんじゃないで、昔に戻った感じ。いや、昔よりも仲良くなったかも。起業とか何とか、難しい話はまだよく分からないけれど、姉と一緒ならやれる気がした。

仲間がいるなら、きつと出来る。やれるところまで、やってみよう。……双子っていうのも、案外悪くないものだし。

突き刺すような寒風が流れてくる。せめて駅構内での待ち合わせにすれば良かったかな、なんて思っていたらりのちゃんの声がした。「いーしゃ、あけおめ！」

ちよつとびつくりしたけど、わたしは彼女の方を振り向いて納得した。

「明けましておめでとう、りのちゃん」

りのちゃんは着物を着ていたのだ。それも何だか、すつごく素敵なやつ。髪型もそれっぽい花の飾りで留められていて可愛い。

「気合い、入ってるね」

「え、そう？ お正月は親戚の家に集まるから、毎年こんな感じよ」と、りのちゃん。普段は男勝りでクールな彼女にも、意外な一面があった。やはり毎年着ているからか、あまり違和感がないのが素晴らしい。

「ふうん。藤堂さんと一緒じゃないんだね」

「ええ。だって、お兄さんも来るって言っから」

そう、今日は滝口くんの彼氏さんと一緒に初詣へ行く約束になっていた。だから兄弟は兄弟で来るというわけだ。

「そっか。楽しみだなあ」

と、わたしは冷えた両手をこすり合わせる。一応、手袋をしているのだけれど、正直、防寒になっていなかった。

「あ、滝口くん！」

人波の中に彼の姿を見つけて手を振ると、滝口くんもこちらに気づいて寄ってきた。

「あけおめ、滝口」

「あけましておめでとう」

滝口くんはわたしたちの前で立ち止まり、りのちゃんを見た。

「おう、あけおめ」

正月だからといって、着物を着ている人はそんなに多くない。つまり、りのちゃんは目立っていた。

「歩きにくくねえ？」

「別に」

「……そうか」

と、口を閉じる滝口くん。彼もりのちゃんの着物姿を見るのは初めてのようなのだ。

「滝口くん、髪切ったんだね」

わたしが指摘してあげると、滝口くんはそっぽを向いた。

「無理矢理、美容室に行かされたんだよ」

「あら、可哀相に」

りのちゃんが興味なさそうに呟いて、わたしは言う。

「でも、まだ長い方だよね」

「そこは頑張って抵抗した。結果がこれ」

と、滝口くん。前髪はすっきりと短くなっていたが、横はまだ耳が隠れている。ちょっと後ろをのぞいてみたら、襟足が出来ていた。その他は割と短いので、ワックスとかつけたらカッコよくなりそうだ。

そして藤堂君がやって来たのは、待ち合わせの時刻をちょっと過ぎた頃だった。

「あら、お兄さんは？」

りのちゃんが挨拶を忘れて尋ねると、藤堂くんは申し訳なさそうにする。

「それが、風邪引いちゃって」

滝口くんが何か言いたそうに口を開けたが、すぐに携帯電話を取りだす。

「えー、すごく残念」

写真でしか見たことがなかったから、今日はとても楽しみにしていたのに。

「僕が謝ることないんだけど、ごめんね、塚田さん」

と、藤堂くん。

まあ、とりあえずみんな集まったから良いか。結局、今年の初めもいつもの四人で迎えることになるなんて……悲しいやら、嬉しいやら、ちよつと複雑ではあるけれど。

初詣へ向かう人達に紛れて歩き出すと、前方に行く藤堂くんがりのちゃんの手を取った。ぎこちなく繋いで、ぎゅつと握る。

「藤堂君、背伸びたね」

と、わたしが呟くと、隣にいた滝口くんも前を見て言った。

「ああ、本当だ」

「前までは全然身長差なかったのに」

靴の厚みを考えても、彼はりのちゃんより五センチは大きい。

「良いなあ、男の人は」

「……」

「わたしも、また成長期来ないかなあ？」

と、滝口くんを見上げる。

「別に今のままで良くね？ 女は小さい方がモテるんだろ？」

と、滝口くんは返した。言い方からして、女子に興味ないことが分かる。

「わたしなんかがモテると思う？」

「え……うん」

どこか戸惑った様子で肯定する滝口くん。わたしなんて地味だし、小さいし、取り柄と言ったら身体に合わないDカップくらいなのに。「まだ一度も、告白されたことないよ？ したこともないけど」

「……そんなもんだろ、普通」

「彼氏だってまだ出来たことないし」

「おれだって、今のが初めてだよ」

滝口くんの言葉に、わたしはつい興味をそられてしまう。

「そういえば、どうやってお兄さんとは知り合ったの？」

すると、彼は気まずそうに視線を逸らして、藤堂くんの背中を見つめた。

「……何ていうか、その、ちょっとな」

言いたくないようだ。二人とも三つしか駅が離れてないから、街の中で出逢った可能性もある。否、もしかすると、二丁目で出逢ったとか？

「別に言いたくないならいいよ。深く聞くつもりはないから」

と、わたしはにつこり微笑んだ。機会があれば、深く聞かせてもらうつもりだけどね！

流されるようにたどり着いた神社で、四人揃ってお参りをした。

とりあえず百円投げとけば良いか、とわたしはそれを一枚投げて、今年も素敵な一年になりますように、と願った。

他の三人もそれぞれに祈りを捧げて、ようやく人波から解放される。

「じゃあ、僕たちはこれで」

と、神社の外へ出たところで藤堂くんが言った。

「え？ どこ行っちゃうの？」

目を丸くして尋ねたら、りのちゃんがにこにこしながら言う。

「だってお正月よ？ 福袋買いに行かなくちゃ」

ちらつと滝口くんを見やると、目があった。藤堂くんに起こりうるであろう苦労を、わたしも彼も心配していた。

「あ、そういえば夜司やっかさのことだけど」

と、滝口くんが藤堂くんを見た。

「見舞いとか、行っても平気？」

藤堂くんは少し考えると、へにやつと笑った。

「大丈夫だと思うよ？ 退屈してるだろうから、むしろ喜ばれるんじゃないかな」

「そっか……じゃあ、行こうかな」

そう言っただけで、さうにわたしを見る滝口くん。もう、身近にリア充が二組もいると嫌になるなあ。

「じゃあ、わたしは真っ直ぐ帰るよ。他にやることあるし」

と、につこりすると、三人が納得した。

「行きましよう、ユイ。二人とも、またね」

「また学校で」

と、りのちゃんが藤堂くんを引っ張っていく。わたしたちは反対の駅の方へ歩き出した。

「なあ、塚田」

「何？」

前方からは絶えず人が歩いてきており、初詣の魔力だなと思う。

「素朴な疑問なんだけど……お前、好きな奴いないの？」

あらまあ、第三者が聞いたらドキドキしちゃいそうな台詞！でも残念ながら、わたしたちの関係はそうじゃないのです。

「いないよ。今はむしろ、妄想が恋人って感じ？」

冗談めかして答えると、滝口くんが苦笑いをした。

「あ、そう……」

わたしは彼がわたしのことを心配しているんだって分かっていった。わたしだけが一人きりで、取り残されているんじゃないかって。

「大丈夫だよ。わたしは、友達と遊んでる方が楽しいから」
みんな

笑いかけると、滝口くんは「そうだな」と、納得した様子を見せてくれた。

39・美音？

藤堂家へ来るのは久しぶりだった。加えて、夜司やつかさの部屋に入るのは初めてだ。

扉をこんこんと叩いて、そつと開く。おばさんからは眠ってるかもしれない、と言われていたから気を遣った。

中へ入ると、夜司がベッドに入ってすーすーと寝息を立てていた。静かに扉を閉め、歩み寄る。

床に膝をついて、彼の顔をのぞき込む。とても無防備な寝顔だった。今までにも何度か見たことはあったけれど、今の方がいつにも増して可愛い。

頬にキスしてやろうかと思って手を伸ばすと、彼がごそつと寝返りを打った。

……顔が見えない。

ちよつと考えて、おれは諦めた。夜司が目を覚ますのを待とう。後ろを向いて床に座り込み、ベッドに背をもたれる。夜司の部屋を改めて見回すと、すごく普通な感じがした。きつと小学校の時からずっとそこにある勉強机と椅子に、本棚は辞書などの参考書と漫画や文庫本が入り交じっている状態、その隣のクローゼットも少し古ぼけていて、床は掃除されたばかりという感じがする。

こんな部屋で彼は育ち、今も暮らしているのだと思うと、何だか不思議な心地がした。

夜司は無趣味だと自分で言っているだけに、部屋の中に趣味を感じさせる物はない。強いて言うなら、フォトアルバムらしきものが机の棚に並んでいることくらいか。

ふと気になって、おれはベッドの下をのぞいて見た。彼のことから、何かやましい物を隠しているに違いない。

そつと腕を伸ばしてみると、紙らしき手触りがした。ずずつと引っ張り出してみれば、おれも見たことのある雑誌が一冊。

「……」

いわゆる、ゲイ雑誌というものだ。値段が高いから買ったことはないが、いつか出会ったおじさんに見せてもらったことがある。他にもいくつか似たような雑誌はあるらしく、それぞれ対象とする男性の傾向が違^{ジャンル}うらしい。つまり、これを教えてくれたおじさんも夜司も、この雑誌で取り上げられるような男性が好きということになる。ということは、おれはこの雑誌の傾向にカテゴライズされるわけだ。

若年層、少年系。……おれ、まだ十六だしね。っつか、むしろシヨタじゃね？

一応成人向けの雑誌なので、中身が気にならないこともない。けれども、おれはそれを元あった場所へ戻した。他にも探せばアダルトなものがいっぱい出てくるんだろっけど、所有者が風邪引いて寝込んでいるのでやめておこうと思ったのだ。

……夜司も、やっぱり男だなあ。

おれが再びベッドに背を向けると、夜司がもぞもぞと動いた。顔を上げて振り返ると、彼と目が合う。

「……？」

寝ぼけているのか、じっとおれを見る夜司。

体勢を変えておれは膝で立つと、にっこり笑う。

「見舞いに来た。具合はどう？」

夜司は目をぱちくりさせ、はっとした。

「ちよ、何でお前が」

と、咳をする。

「だから見舞いだって。ユイから聞いてさ」

「……た、ただの風邪だ。わざわざ見舞いなんて」

夜司は戸惑っているのか、寝返りを打っておれに背を向けた。

「えー、嬉しくないの？ 新年早々、来てやったのに……あ、そうだ。あけおめ」

と、言い忘れていたことを思い出して口にすると、夜司は何も言

つてくれなかった。

やっぱり突然の訪問は良くなかったかと思うが、すぐに帰るのも何だか嫌だ。

「つつーか、どうやって家入った」

と、夜司が尋ね、おれはすんなり答えた。

「ユイがまずおばさんに連絡してくれて、おれが夜司くんにはいつも世話になってる、っておばさんに言ったら、なんとなく察してくれた」

「……嘘だろ」

「本当だよ。そんなに深く考えてくれないみたいでさ」

夜司が溜め息をついた。これでおれは晴れて藤堂家に、長男の彼氏として認められたわけだ。

「あと、朝子ちゃんは相変わらずおれに、ぎゅーってしてくれたよ」
「……そうか」

呆れているのか、ちつともこちらを向いてくれない。おれはそんな彼に飽きて、床にあぐらをかいた。腕を伸ばして、夜司の髪に触れる。

「熱とかあるの？」

「ああ……ちよつとだけな」

「せつかくの初詣、残念だったね」

「……仕方ないだろ。サクマに移されたんだ」

ピンと来て、おれは目を上げる。

「それって、この前のふらふらしてた友達？」

「そうだ。正確には、あいつが朝子に移して、それが俺に移ったらしい」

「なるほど、もう十日くらい前のことだもんね」

あの人に何があったかは聞いてないし、知りたいとも思わない。

もう過ぎたことだから、掘り返すつもりもない。

「災難だったね、夜司」

と、おれは腕を引っ込める。弱っている彼を見るのは初めてだっ

だから、本当はもっと触れたかった。キスだってしたいし、ハグだってしたい。

それは相手も同じだったようで、夜司はまた寝返りを打った。おれの方に手を伸ばして、そつと唇に触れてくる。

「お前に風邪移したくないから、帰れよ」

と、優しく言う夜司。

おれはその手を取って、指を絡ませた。

「ここにいちやダメ？」

「駄目だ」

「……そっか」

夜司の気持ちは嬉しいけど、おれの気持ちまで汲んでくれることはないらしい。

仕方がない。帰って、ギターの練習でもしよう。まだ楽譜もきちんと読めてないから、頑張らなきゃ。

そこまで考えて、おれは夜司の手を放した。

「じゃあ、帰るね」

「ああ」

「風邪、早く治してよ」

と、立ち上がる。夜司はおれの方をじっと見ていた。

「美音」

歩き出そうとしたら、袖を引っ張られた。

おれが振り返ると、夜司は言う。

「ごめんな。気をつけて帰れよ」

「……うん」

頷いて、歩き出す。扉に手をかけてそつと開くと、おれはまた彼を振り返った。

「またね、夜司」

「ああ」

布団に潜りなおす夜司。静かに外に出て、ゆっくり扉を閉める。

今年も、ずつと夜司のそばにいられますように。あと、ギター

が上手になりますように。

40. りの？

ユイの背が伸びたことには気づいていた。彼が大人になろうとしていることも、分かってた。

「福袋つて、けっこうするんだね」

と、ユイが言って、あたしは口を開く。

「でも、今日買ったのは安い方よ。ブランドだと一万や二万が普通なもの」

「そうなんだ」

お年玉があるからといくつか福袋を狙っていたのだが、結局手に入ったのは二つだけだった。

「ただでさえお得だから、みんな買っちゃうのよね」

と、呟いてみる。外れることもあるけれど、それはそれで楽しいから良いのだ。

「そっか……僕も、買ってみたいなあ」

「買ったことないの？」

「うん。お年玉つて、すぐに使うともったいないって思うから」

ユイらしいな、と思う。消極的というよりは、慎重なタイプ。

「面白いわよ、福袋」

「うん、そうだろうね」

あたしのワガママに付き合ってくれる優しい人。

中身は変わらないはずなのに、彼が以前と比べて大人になっていくことを寂しく思う。もちろん、ユイのことは大好きだ。

「ユイの好きそうな服が入ってたら、あげようか？」

「え、別にそんなことしなくていいよ。気遣わないで」

「そう？」

「うん、その気持ちだけで十分っていうか」

「……そう」

「うん」

あたしも大人になっていくんだろうと実感はする。身長も体重も、毎年変わっていく。

だけど今が一番だから、これ以上なんて必要ない。このまま、ずっと今のままでいたい。

「ねえ、ユイ」

「何？」

大人になんか、なりたくない。

「あたしのこと、好き？」

「え？」

ぱつと顔を赤くして、戸惑うユイ。

「も、もちろんだよ。きよ、今日だってすごく、りのさん、すごく可愛いし」

恥ずかしそうに俯いて、視線を逸らす。

その姿が可愛くて、ああ、好きだなって思える。

「あたしもよ、ユイ」

ほんの少し背伸びをして、彼の白い頬に口づける。

「今年も、一緒にいようね」

まるで自分自身に言い聞かせるように、あたしはそう言って。

「う、うん……っ」

嬉しそうに頬を赤らめる彼を、ただ愛しいと思う。

ずっとはきつと無理。

「りのさん？」

振り返っても、そこにあたしはいない。

「ううん、何でもない」

だからまた前を向いて、出来るだけ後悔しないようにして、隣にいる彼を確かめる。

「じゃあ、帰りましょ」

荷物を持ち直して、互いにぎゅっと手を繋ぐ。

すぐに消えてしまう今という瞬間に想いを馳せることも叶わぬまま、気づくと次の一步を踏み出している。

「……三学期も、楽しくしたいわね」

「うん、そうだね」

あまりにも儚い今に、あたしはまだ向き合えない。無駄にするしか、術がない。

どんなに想いを伝えても、次の瞬間には消えてしまう。どうせなら、時間が止まればいいのに。

ずっとずっと、この新しい年の最初の一日が、延々と繰り返されればいいのに。

そうしたらあたしは。

「ずっと、ユイのそばに」

いられる、のにね。

呟いた言葉は彼に届かず風に溶けて、気づいた時には忘れてしまう。ぎゅっと締め付けるような嫌な胸騒ぎは、すぐにあたしの足で踏みつけてコンクリートに染み込む。

そしてあたしはまた、ユイの笑顔を見たくて笑うんだ。人生は思い通りにならないって事、気づかない振りして。

「今年もよろしくね、ユイ」

41・夜司？

風邪がようやく治ってきた頃、そいつは何の連絡もなしにやって来た。

「あけましておめでとう！」

新年早々うるさいサクマの顔を見て、思わず嫌な顔になる。

「今年もよろしく！　ってゆーか、どうした？」

と、俺を見て首を傾げるサクマ。お前のせいでせつかくの初詣が台無しになったのだと言いたかったが、こらえる。

「何の用だ」

聞き返すと、サクマが手にしていたビニール袋を持ち上げた。

「この前のお礼をしに来たんだ」

「いやー、本当に世話になったからなあ……と、サクマ。

「上げれ」

言ってから、俺はくしゃみを一つする。玄関で立ち話をしたら風邪がぶり返しそうだし、どうせすぐに帰るつもりもないんだろう。

「わーい。お邪魔しまーす」

と、予想通りに遠慮無く入ってくるサクマ。

俺は先に居間へ向かって、母さんへ言った。

「家にあげたけど良い？　まあ、すぐに帰らせるけど」

後ろでサクマが「ひどっ」と、声を上げる。

「あらあら、別に構わないけど……あ、お汁粉食べる？」

と、台所へ向かっていく母さん。

「あ、すみませーん。ありがとうございますー」

へらへらしているサクマを無視して、暖房のよく当たるソファに腰を下ろす。すると、テレビを見ていた妹が振り返った。

じつと俺の隣に座ったサクマを見て、言う。

「さくまだ！」

サクマはにっこり笑うと、ビニール袋から包みを取り出して、妹

のそばへ寄った。

「はい、これ。お年玉」

「!？」

「わーい、おとしだまあ！」

思わずびっくりして、俺はすぐにサクマへ声をかけた。

「何してんだ、お前。朝子は受け取っちゃ駄目だぞ」

妹が伸ばしかけた手を引っ込めて、俺とサクマを交互に見やる。

「別に怪しいものじゃねえよ」

と、サクマは言っと、朝子の頭を撫でた。

「この前はすぐく世話になったから、そのお返しをさせていただけさ」

「……ままがただでもらえるものはもらっておけていった！」

と、妹は言っと、サクマからのお年玉を受け取ってしまう。

「あ、朝子、それはちよつと違うぞ！」

と、慌てて妹に近づくと、たたたと逃げられてしまった。サクマはロリコンだから、朝子を物で釣ろうとしている気がしてならないというのに。

包みを開けた妹が目を輝かせる。

「わー！ うさぎさん！」

出てきたのは愛らしいうさぎのぬいぐるみだった。干支を意識しているのか、その首には紅白のリボンと鈴が付いている。

「まま、まま！ さくまからもらったー！」

と、台所にいる母さんの元へ行く。

俺は溜め息をついてソファに戻った。

「喜んでもらえたみたいで良かった」

にこにこした顔でサクマは言っと、また俺の隣に腰を下ろした。

「で？」

「夜司には何もあげないよ」

「そういうことじゃねえ」

妹へあれをあげるためだけに来たのか、と聞いているのに、サクマは相変わらず不真面目に笑う。

「安心してお兄さん。オレ、あと十年待つから」

んなわけないだろ。両親は許しても俺が許さねえ！

「真面目に答える。何をしに来た」

俺が不機嫌になるのを知ってか、サクマは口を閉じた。

タイミング良く、母さんが俺とサクマの分のお汁粉を持ってきて、目の前の机に置く。熱いから気をつけてね、と言い残し、今度は妹の相手にとりかかる母さん。

「えっとね、とりあえず真咲と和解した」

「……そうか」

「で、運命の人と出逢っちゃった」

「は？」

横を見ると、サクマは心なし真面目な顔をしていた。

「真咲の彼氏が双子でさ、その妹さんが見た目は地味だけどむちゃくちゃ良い子で、すごく良い感じなんだ」

と、サクマは言う。

「でさ、彼女も兄貴と一緒に会社やる仲間なんだ。これってすごくね？」

「……そうだな、良かったじゃないか」

俺がそう言つてやると、サクマが嬉しそうに頷く。

「ああ、だからオレ、超頑張ろうと思って」

たった二週間の間に、サクマはずいぶんと前向きになっていた。就活が上手く行かないとうだうだ文句していた頃とは大違いだ。

「だから、夜司も頑張れよ。仕事が辛いからって、すぐに辞めたら怒るからな」

と、サクマは言った。

「安心しろ、一年は絶対続ける」

そう言い返せば、サクマがまた笑って。

「たった一年だけかよー。定年まで続けろっつーの」

友人がすっかり元気になったことを実感して、俺も笑った。

「お前こそ、女遊びばかりして仕事をないがしろにするなよ」

「まさか！ オレはもう、彼女一筋だから大丈夫。むしろ社内恋愛」

「じゃあ、もう妹には近づくな」

「えー、朝子ちゃんはオレの癒しなのにー」

何が癒しだ。彼の頭を軽く小突いて、俺は溜め息をついた。

「まあ、とにかく良かったな」

「……うん、良かった」

後は大学を卒業するだけだ。心配事はもう、ひとつもない。

42・夕樹？

一月が終わりに近づいた頃、塚田さんから唐突な質問をされた。

「藤堂くんって、どこまで男の娘なの？」

「え？」

思わず目を丸くしたら、塚田さんは説明をしてくれた。

「だから、女装するのが好きなだけか、女の子のやるのが好きだったりするの、中身も乙女なのか」

教室移動の途中だった。誰かに聞かれてやしないかと冷や冷やしたが、塚田さんにはっこりしたまま答えを待っている。

「えっと……僕は、少なくとも性同一性障害じゃないから、中身は違うね」

と、僕は声を潜めた。

「だよ。りのちゃんラブだし」

と、塚田さん。そう言うこともあんまり校内では言うて欲しくないのだけれど……。

「何て言うかな、僕は見た目だけそうなりたいていうか……可愛い物が好きなだけで」

「お菓子作ったりはしないの？ あみもの編んだり？」

「え？」

お菓子にあみもの？ 彼女の質問の意図が分からなくて、僕は戸惑う。

すると、塚田さんが僕の耳に口を寄せた。

「バレンタイン」

「……ああ」

ピンと来た。そういえばあと二週間程度でバレンタインデーがやってくる。

「最近逆チョコなんてのもあるよ」

と、塚田さん。

「しないの？」

「……うーん、どうだろう。ちょっと分からないや」

僕はそう言って苦笑いを返した。

確かにバレンタインデーといえば、女の子たちが友達同士でお菓子をあげる「友チョコ」だったり、仲の良い男子にあげる「義理チョコ」だったり、本命の人には「本命チョコ」をあげたりする。

そののどが楽しいのか、僕は正直理解ができない。中学生になってからは大して仲良くもない女子からよく「義理チョコ」をもらったけれど、本命は一度だってない。……でも、今年は期待するっきゃないよね。

「……でも、ホワイトデーに返すのってめんどうだよね」

と、僕は美音へ呟く。

「あー、確かに。つつつても、おれ返したこと無いけど」

「え、何で？」

僕が視線を向けると、美音は笑った。

「だって忘れちゃうんだもん」

確かに、義理チョコを誰から受け取ったか一ヶ月先までちゃんと覚えている事ってない。でも僕は、出来るだけ返すようにしてきたけれど……あれって、無視しても良かったのか。

「ほら、さっさと買ってこいよ」

「あ、うん」

美音に背を押された僕は購買の列に並んだ。

朝子が生まれる前は母さんからチョコをもらっていたけれど、去年から朝子もチョコをくれるようになった。やっぱり女の子だから、そついった流行には乗りたがるのだろう。

お風呂上がり、暖房で温まった居間でまったりしていたら、テレビにお菓子メーカーのコマーシャルが流れた。『今年は逆チョコ』とか言って、イケメン俳優が宣伝をしている。

「逆チョコ、かあ……」

「彼女に渡すのか？」

独り言のつもりで呟いたら、背後から声をかけられてびくつとした。

「や、やつちゃん……別に、そういうわけじゃ……ない、よ」

と、視線をさまよわせる僕。

やつちゃんはソファに腰を下ろすと、手にした缶ビールを開けてごくつと飲んだ。

「やつちゃんって、ビール飲めるんだっけ？」

ふと不思議に思って尋ねると、彼は言う。

「好きじゃないけどな」

「じゃあ、何で飲んでるの？」

「何となく」

よく分からない。就職が決まってすっかり落ち着いたものだと思っていたが、何かあったのだろうか。

僕は立ち上がると、やつちゃんの隣に座った。

「チョコって、やっぱり手作りかな？」

「知らん」

「義理チョコも用意したほうがいいのかな？」

「知らん。女子に聞け」

やつちゃんが冷たい。やっぱり何かあったんじゃないかな。

「やつちゃんは、あげないの？」

「は？」

と、僕に目を向けるやつちゃん。

「美音に、バレンタインチョコ」

「……あげてどうするんだよ」

と、興味なさそうに言って、やつちゃんはまたビールを流し込む。僕が反論できずにいると、やつちゃんは唐突に言い始めた。

「そもそもバレンタインっていうのはな、結婚を禁止された兵士を秘密に結婚させていたバレンタインっていう司教が、処刑された日なんだぞ」

どこかで聞いたことがあったので、別に何とも思わない。

「キリスト教徒でもないのに、何かする方がおかしいんだよ」

「やつちゃん、何かやな事あった？」

「は？」

「あ、あの、だから……苛々してるみたいだから、何かあったのか
なつて」

僕が思わず肩をすくめると、やつちゃんはビールをまたごくりと
飲んで言った。

「……別に何でもねえよ」

と、ビールを一気に飲み干して居間から出て行ってしまふ。

美音のことなら、ギターに触れているのが楽しくて仕方ないらしいよ？ と、僕は思ったが、まさかやつちゃんがそんなことで嫉妬
するような人だと思いたくないのでやめた。

ようやく練習曲を覚えてきたと美音は言っていたし、もっと完璧
に弾けるようになるまで頑張つて練習するとも言っていた。それか
ら、やつちゃんに一番に聞かせる、つて。

「……あ、でも、そのせいでメールが途切れがちに」

なつてゐるつて、申し訳なさそうにしてたなあ……だからやつちゃ
ん、あんなに荒れて……うん、納得。

塚田さんが早い時間から教室にいることは知ってたから、僕も久
しぶりに早く来てみた。

「おはよう、塚田さん」

「あ、おはよう」

室内には彼女しかいなかった。部活の朝練に行っているのか、荷
物だけはいくつがあるけれど。

「ちよつと聞きたいことあるんだけど、良い？」

「うん、どうぞ」

落書き帳らしきノートをぱたんと閉じて、塚田さんが僕をじつと
見る。

「えっと……チョコってやっぱり、手作り？　あと、義理チョコも作るべき？」

塚田さんはにっこり笑った。

「もちろん」

「あ、そうなんだ……」

僕は自分の席に荷物とコートを置いて、また塚田さんへ声をかけた。

「チョコってどうやって作るの？」

「市販の奴買ってきて型に入れて固めればオーケー。別にマフィンとかクッキーでも良いよ」

「僕に、出来るかな？」

「大丈夫、りのちゃん意外と味音痴だから」

と、自信たつぷりに親指を立てる塚田さん。

「……そ、そっか」

りのさんが聞いたら怒りそうだ。僕は苦笑いをしながら、椅子に腰を下ろした。

「手作りのお菓子セットっていろんなところに売ってるから、そういうのを見て決めるのが良いかもね」

と、塚田さんが補足をする、廊下から人の声がした。間もなくしてクラスメイト数人が教室へ入ってくる。

僕は塚田さんに「ありがとう」と、言っただけで、あまりにも小さくて届かなかったかもしれない。

未だに人見知りしてしまう自分が嫌だ。りのさんとカップルになれても、僕は全然成長できていない。

43・美音？

バレンタインデーといえば、母さんと姉ちゃんに義理のチョコレートをもたらるのがいつものことだった。小学三年生の時、クラスの女子に本命らしきチョコレートをもたらったこともあるけれど、反応に困ったのでお返しはしなかった。母さんはいつも父さんに本命チョコをあげるし、姉ちゃんはむしろ友チョコの余りをおれにくれる感じだったから、本命をもらったのはその一度だけだ。

夕樹は塚田にそそのかされて「逆チョコ」をあげるとか言ってるけど、何かそれって流行に乗せられている気がする。

そんな風におれがバレンタインデーを馬鹿にしたら、塚田は言った。

「じゃあ、滝口くんにだけチョコ用意しないね」

最初は呆れたけれど、おれにだけ、という部分をその後何度も繰り返されて泣きそうになった。とどめは「クラスのみんなにはあげるつもりでいたけど、滝口くんの分はいらないよね」と、いつか見た悪魔の笑みだ。

仕方がないから、おれも「逆チョコ」をやらされるはめになったのだが……これって、夜司やつかさにもあげるべきなのか？

今朝コンビニで買ったチョコレートを取り出して机の上へ置く。

「バレンタイン」

と、おれが言うやいなや、塚田がその箱に手を伸ばす。

「わー、ありがとー！」

そして昼食前だというのに箱をびりりと開け、あつという間にチョコを口へ入れる塚田。こいつ、ただ食べたかっただけじゃ……？
「りのちゃんと藤堂くんもどうぞ」

と、塚田はおれのチョコを勝手に二人に分ける。そこはかたなくむかつく。

気にしないようにして昼食のパンを食べ始めたら、塚田がお菓子を取り出した。

「はいこれ、義理だけど」

と、おれたち一人一人にクッキーの入った小袋を渡す塚田。普通のクッキーのようだが、おれはそれをよく見てびっくりした。

「滝口くんにはギターの形にしたかったんだけど、上手く出来なくてごめんね」

と、塚田が謝る。おれの袋にだけ、丸や四角ではない不格好な形のクッキーが入っていた。

「……ありがとう」

ちよつと嬉しくなってお礼を言つと、塚田が笑う。

「いえいえ、毒とか入ってないから安心して食べてね」

そう言われると怪しくなるが、塚田はただの変人だから大丈夫だろう。

「じゃあ、あたしからは普通のチョコを」

と、高内がアルミカップにチョコを入れて固めただけの素っ気ないものをくれた。

「で、ユイには生チョコよ」

そう言つて、きらきらなりボンのかけられた箱を取り出す高内。

夕樹はどきまぎしながらそれを受け取ると、すぐに自分も用意してきた物を取り出した。

「あ、えつと、チョコチップクッキー作ってみたんだ、けど……」

と、綺麗にラッピングした袋を高内へ渡し、残りの適当な二つをおれと塚田に渡す。

「ありがとう、ユイ！」

と、高内がにつこり笑うと、夕樹もつられてにつこり笑う。

……一番努力してないの、おれだけだな。夕樹が本当に手作りするとは思わなかったし、義理でも何かをもらえるって意外と嬉しい。

「滝口くんも来年は手作りね」

「え？」

考えを見透かされた気になって目を丸くすると、塚田が意地悪く笑う。

「自分も手作りすれば良かった、って後悔してたんでしょ？」

「……してねえし！」

ほとんど凶星だった。やっぱり塚田って怖い。

「あら、ところで滝口は本命どうするの？」

と、話を聞いていたらしい高内が割って入ってくる。

「な、どうするも何も、やらねえよ」

おれがとつさに答えると、夕樹が「えっ」と、目を丸くする。

「ミオ、あげないの？」

「……え？」

無意識に苦笑いが浮かぶ。まさか……あいつまでそんな流行に乗せられているのか？

「あ、いや、別に何でもないよ。それはそれで、良いと思う」

と、慌てて視線を逸らす夕樹。ああもう、これじゃあ渡さないわけにいかねえじゃんかよ！

帰り道にコンビニやスーパーに寄ってみたが、残念ながらバレンティンチョコはどこも売り切れ状態だった。その当日なのだから、当然だ。……やっぱり、事前に買っておけばよかった。

仕方なく家に帰ったら、母さんが化粧をしているところだった。

「おかえりなさい」

と、おれの方を見ずに言う。

「ただいま。どこか出かけるの？」

尋ねてみると、母さんは嬉しそうに言った。

「今日は克美さんと外食するの」

ドキッとした。

「おかずは買っておいたから、勝手に食べててちょうだい」
「……そう」

自室へ向かおうとして背を向けたら、母さんは言った。

「ついでにドライブしてくるから、帰りは遅くなるわ。あんたは先に寝て良いからね」

「うん、分かった」

母さんと父さんが二人の時間を大切にするのは昔から変わらないけれども、姉ちゃんが寮に入ってから家族の形は確実に変化している。

部屋に入って、おれは溜め息をついた。

鞆を床に放り投げて、上着を脱ぐ。ハンガーにかけて、制服から私服に着替える。

それから携帯電話を手にベッドへ寝転ぶと、鞆の中にみんなからもらったお菓子があることを思い出した。でも、食べる気がしない。ばたばたと支度を済ませた母さんが、何も言わずに家を出て行くがちやりと鍵を閉める音が冷たい。

嫌なことは考えない方がよい。

重たい上半身を起こしたら、タイミング良く携帯電話が鳴った。夜司だ。

はっとしてすぐに通話に出る。

『今日、会えるか？』

すぐに投げかけられた問いに、おれは何故か迷った。迷う必要なんてないはずなのに、答えを返せない。

『あ、それとも忙しいか？ 練習の邪魔したなら、ごめんな』

と、電話の向こうで夜司が優しく言う。

「……うん、大丈夫。いいよ、会おう」

おれがようやくそう告げると、夜司が安心したように息をつくのが分かった。

『良かった。今は家にいるのか？』

「うん」

『そっか。じゃあ……六時に、いつものところで』

「おれん家、来ない？」

『え？』

自分でも自分の言った意味がよく分からなかった。何で、そんなことを言えたんだろ。一人でいるのが寂しいから？

「あの、今日、親が帰ってくるの、遅いからさ」

すると夜司は「分かった、行くよ」と、言ってくれた。俺は安心したけれど、すぐに言葉を返せない。

「じゃあ、五時半に駅で待ち合わせな」

と、時間まで早めてくれる夜司。彼には、おれの気持ちが分かるのだろうか。それとも、おれの声が震えていたのだろうか？

「うん、分かった」

「ちゃんと待ってるよ、美音」

「うん」

夜司は「また後で」と言って、電話を切る。携帯電話を耳から離して、おれはまた溜め息をついた。

44・夜司？

別に流行に乗ったわけじゃない。サクマから「バレンタインは普段伝えられない気持ちを贈り物を通して伝えるイベント」だと聞かされて、ちよつと考え直したただけだ。

「邪魔します」

美音の家に入るのは初めてだった。中には誰もいないと分かっているけど、気を遣わずにいられない。

「親って、何時頃帰ってくるの？」

俺がそう質問すると、美音は言った。

「早くても十一時過ぎるから、あと五時間は余裕」

「ふうん、そうか」

どうしていないのか、親は共働きなのか、色々聞きたいことはあったけど我慢した。

美音の部屋は電気が点けっぱなしにされていた。その中へ入って俺はちよつとびっくりする。

「シンプルだな、すごく」

「まあね」

と、美音は言うのと、ベッドに腰を下ろす。

室内を見渡しつつ床に座ると、机の隣にギターが置かれているのが目に入る。紺に近い青色のエレキギターだ。

俺の視線に気づいたのか、美音は嬉しそうな声で言う。

「かっこいいでしょ、おれのギター」

ベッドを降りて、運命を感じたそれへ歩み寄る。

「予算はちよつとオーバーしちゃったけど、むちゃくちゃ気に入ってるんだ」

「そうなのか」

「うん」

美音がしゃがみこんでギターに手を触れる。俺は楽器の事なんて

全然分らないけれど、そのギターは美音の言うようにとても大事にされている気がした。

「……まだ自信ないから、今度スタジオ行った時に聞かせるよ」

と、俺を振り向いて笑う。ギターの横にはケーブルや機材が置かれていた。ふと目に付いたヘッドホンはまだ綺麗だ。

「全部でいくら使った？」

「うーん、十万くらいかな。チューナーとかも買ったから」

と、美音が俺の隣に座る。

その十万は、全て男に抱かれて得たものなんだろう。束縛するつもりはなくても、何だか嫌な気分だ。

「あ、そうだ」

ふと思い出した風を装って、俺は鞆から小さな箱を取り出した。

「これ、やるよ」

と、美音へ差し出す。すると彼は呆れたように苦笑いをして、受け取る。

「おれ、用意してないんだけど……」

「別にいらねえよ。気にするな」

と、俺は言って、美音の頭を軽く撫でる。

「……っつーか、高そう」

美音はその箱を隅々まで観察してから開けて、また言う。

「うわ、やっぱり高そう！」

俺は思わず笑った。値段なんて込めた気持ちに比べりゃ大したことないのに、美音は目をきらきらと輝かせて俺を見る。

「いくらしたの、これ」

「千二百円、だな」

と、俺がばらすと、美音が中身を数えて言う。

「いち、に、さん、し……五つだから、一つ二百四十円？」

「大学に行く途中にあるデパートで売ってたんだ」

と、思わず嘘をつく俺。途中の道にデパートなんてなく、わざわざ遠くまで足を向けて買ったのだ。それも「逆チョコ特集」なる特

設コーナーがあると聞いて。

「……ありがとう、夜司！」

と、美音は箱を丁寧に閉じてテーブルに置くと、俺に抱きついてきた。

「おれ、来月までにギター、すげーがんばる。んで、ホワイトデーまでに披露できるようにするから」

ぎゅっと抱きしめてくる美音。

「おう、分かった」

と、俺も抱きしめ返す。勢いでキスできるかと思ったが、美音は俺の肩に顔を埋めたまま動かなかった。

様子がおかしいと思った俺は、声をかけてみる。

「美音？」

彼は顔を上げなかった。

「……愛してる、夜司」

泣いているのかと思ったが、そうでもないようだ。俺は安心して、美音へ言い返した。

「ああ、俺もだ」

猫みたいに気まぐれで弱いお前を、誰よりも愛してる。

45・依紗？

春、桜、進級、クラス替え。

「えー、あたし一組だつて。知り合いいるかなあ？」

ざわめく高校生、やわらかな陽光、ふとよぎる不安。

「あ、僕四組だ。離れちゃったね、りのさん」

「そうね。で、いーしゃは？」

「わたし？ わたしはえつと……」

人の頭の隙間からクラスを確認したわたしは、後ろにいるりのちゃんへ言う。

「また六組みたい」

「おれもな」

と、言う滝口くん。

りのちゃんはわたしたちを見て文句した。

「何であんたたちが一緒なのよ！？ ひどいわ、ひどいじゃないっ」

「仕方ないよ、りのさん。落ち着いて」

と、彼女をなだめる藤堂くん。

「付き合ってもいないあんたたちが同じクラスになったつて、しょうがないじゃない。あーもうっ」

そう言いながらも、りのちゃんは諦めている様子。ただ文句を言いたいだけなのだろう。

携帯電話で時刻を確認した滝口くんが言う。

「もうすぐチャイム鳴るぜ」

と、さっつさと群れから抜けて歩き出す。

「そうだね、早く行こう」

と、わたしも彼の後を追った。

去年と同じクラスなので担任の先生は変わらない。変わったのはクラスの雰囲気。

「あ、いーしゃだ！」

「ああ、スズちゃん」

この前までは、廊下ですれ違ったら声をかけるだけの友達の友達。

「やった、同じクラスー」

「うん。一年間よろしくね」

「こちらこそー」

悪い子じゃないから良いけれど、わたしが高校二年生という一年間をどう過ごすかが、これで決まった。スズちゃんは漫画研究会所属だから、完全にオタクの領域……！

「他に知ってる子いないかなあ？」

「どうだろう、わたしはあんまり……」

こうなると、唯一の救いは滝口くんということになるのだけれど……前を見たら、彼は誰とも話をせず退屈そうにしていた。今はまだ出席番号順に座っているため、彼とは前後になっていた。

「まあ、いつか。いーしゃがいてくれて安心した」

と、無邪気な笑みを向けるわたしの新たな相棒。りのちゃんとは距離が遠いから会いにくかったらしい、他に気の合う人がいなければ、わたしは彼女と二人組のままだ。まあ、それも面白そうだから良いか。

始業式とホームルームを適当にやり過ごすと、スズちゃんがバス通学だったことを知った。

「一緒に帰れないのは残念だなあ」

と、漏らす彼女。

「確かに寂しいけど、仕方ないよ」

と、返すわたし。

スズちゃんはわたしにぎゅっと抱きつくと、

「じゃあ、またね」

と、言っ**て**バス停へ向かっていった。そのちよつと丸い背中を見送って、わたしも駅に向かって歩き出す。

滝口くんは一人でさっさと帰ってしまったようだった。友達がないみたいだから、それも仕方のないことなのだけれど。

駅前の桜並木が綺麗で、ふと足を止めたくなる。学校にも桜はあるが、こっちの方が断然綺麗だ。風に舞ってふわふわ地面を目指す花びらに手を伸ばすと、ひらりと交わされてしまう。

「……」

ああ、でも　と、青い空を見上げて思う。

スズちゃんは絵が上手だから、いろんなことを教えてもらおう。わたしも、もっと上手く漫画が描けるように。

二日目。

決まったばかりの学級委員の司会進行により、さまざまな委員を決めていく。わたしはそれを右から左へ受け流しつつ、先ほどの自己紹介を思い出してまとめをしていた。

去年は大人しくてほんわかしたクラスだったが、今年はちょっと騒々しい。というのも、DQNな女子が数人に、加えて噂のイケメン君がいるからだ。

「では、図書委員をやりたい人、いますか？」

わたしは机に突っ伏している滝口くんの背をつついた。顔を上げた滝口くんへ言う。

「一緒にやらない？」

「は？」

「図書委員。部活がある人は仕事しなくても良いんだよ」

「何だよ、それ」

と、嫌そうな顔をする滝口くんだったが、学級委員の目は完全にわたしたちを見ていた。

「えっと……塚田さん、やる？」

と、名簿を確認しながら聞いてくる学級委員。滝口くんはまだ嫌そうな顔をしていたけれど、構わずにわたしは彼の腕を上げさせる。

「はい、塚田と滝口でお願いします」

「え、ちょ、おれは……っ」

わたしの手を振り払うも、クラスメイトの視線も集まり始めてい

て。

「えーと……やらないの？」

学級委員の困惑した表情に、滝口くんが折れる。

「……やるよ」

と、重たい溜め息。安心した様子でわたしたちの名前を書き留めると、学級委員が次に進める。

「じゃあ、次は保健委員、やりたい人ー？」

去年はまだ入学したてで慣れるのに時間がかかって消極的だったけれども、今年は自分のやりたいことを思う存分やるつもりでいた。その内の一つが、図書委員だ。

中学の時もやっていたから、高校でもやりたいと思っていた。でも図書室を使用する生徒が少ないらしく、委員会はかなりゆるい。だから、滝口くんでも出来るはずだと思った。

「ごめんね、滝口くん」

小声で謝ると、滝口くんはまた机に突っ伏した。

「別に」

で、そのイケメン君というのが身長高くて体格の良い男子で。

「いーしゃって、滝口と仲良いんだね」

「同じクラスだったから」

学級委員ではないけれど、クラスの中心的存在になりつつあり、DQNな女子とも平気で会話する。

「ふーん……どんな関係なの？」

「どんなって、ただの友達だけど？」

「嘘つけー。あんだけ仲良しで友達？」

「え……あー、えーっと、うーんと」

噂では中学の時からモテモテで、相当な遊び人だとか。

「スズちゃんの思うような関係じゃないよ。本当にただの友達」

「えー、もったいない」

でも年上の彼女がいるなんて噂もあるくらいだから、何が真実か

は分からない。

「だって、滝口くんには恋人いるし」

「マ、ジ、で？」

「……あ、いや、ち、違うの！ 聞かなかったことに、いや、えつと、な、内緒にしてるから、このことはえつと……あれ、わたしおかしいな」

「あはは、いーしゃが壊れたー」

「で、でも本当にね、わたしたちは何でもないからっ」

「はいはい、落ち着け」

わたしが見た限りでは、むしろ純情そう。口調とか言葉はアホっぽいいし、裏がなさそうな感じ。

「あーもう、滝口くんに恋人いるって、誰にも言わないでよ？ わたしだって口止めされてるんだから」

「大丈夫。深く詮索したりしないよー」

軽音楽部もやってる人だから、ファンがついてモテるのは当然だろう。お近づきになりたかったけど、取り巻きのDQNが怖いから諦めよう。彼女たち、イケメン君にぞっこんみたいだし。

「……お願いね？ じゃないとわたし、スズちゃんの本性見抜いちやうから」

「あはは、何言って…… え？ ちょっと、いーしゃ？ いーしゃー！？」

46・依紗？

席替えの結果は、一言で言うなら奇跡。というよりも、素晴らしい偶然。

廊下側の壁際四番目。わたしの左斜め前に噂のイケメン君、左斜め後ろに滝口くん。DQNな女子の中でも大人しい子がわたしの後ろにいるけれど、お近づきになれば万事オーケー。ちなみにわたしの隣は学級委員の女子、仲良くやろう。

「滝口くん、来週ライブあるんだけど行かない？」

席が近いので、立ち上がることも近寄ることもせずに話しかけてみた。

「今度は誰の？」

と、こちらを見る滝口くん。

「コウノトリのツアー最終日だよ」

滝口くんがはっとして、若干身を乗り出す。

「出るバンドはこの前とほぼ同じだけど、どう？」

「行きたい。それっていつ？」

鞆からスケジュール帳を取り出して答えを返す。

「木曜日。授業終わった後、そのまんま向かう感じかな」

「……よし、分かった。行く」

「そうこなくっちゃ」

滝口くんがコウノトリを気に入っているのは知っていた。どうやらリードギターの翔にびびっと来たようで、本気でギターを始めるきっかけにもなったそうだ。

「チケット代は三千五百円ね」

「了解」

と、心なしかうきうきする様子の滝口くん。翔がレスポールを使っていたから、自分もレスポールをやる運命だと感じたなんてことも言っていた。意外と滝口くんって、面白い。

スケジュール帳を鞆へしまい、次の授業の教科書を机の上に置く。
「そういえば、ギターはどう？」

「ん、頑張ってるよ」

と、滝口くんは言くと、すぐに苦笑いを浮かべる。

「でも最近、独学の限界を感じてきた」

「弾けるようにはなっただんでしょ？」

「そうなんだけど、何かしつくり来ないっていうか……いまいちなんだよなあ」

と、溜め息をつく。

「へー、滝口もギターやってんだ？」

急に話しに割って入ってきたのは、何とあのイケメン君。

「え、ああ。まだ、初めて半年くらいだけど……」

と、警戒するような目で滝口くんが彼を見ると、イケメン君はにかつと笑う。

「オレ、寺崎新（てらさきしん）って言うんだ。軽音部で部長やってる」

「……知ってる」

「マジで！？ わー、オレちょっと有名人ー」

わたしからしたら、何を今さらって感じなのだが。っていうか、自己紹介の時にそう言ってたじゃん！

「良ければ教えてやろうか？ つつか、軽音部入っちゃえよ」

「え？ いや、別におれ、軽音部に興味は」

「音楽室だから防音だぜ？ マイナーなくせに機材は一通り揃ってるし」

滝口くんの心が揺らいだ。

「あ、そうか。良いな、それ。学校の機材？」

「もちろん。ってゆーか、先輩達抜けちゃって部員少なえんだよー。一人でも入ってくると助かるんだけど」

と、寺崎くんが滝口くんに迫ったところでチャイムが鳴った。

「じゃあ、詳しい話、後で聞く」

「おう！ つつか、一緒に昼飯食べようぜ」

「え……？」

いつもの取り巻きDQN女子は？

「オレ、まだクラスに友達いねえからさ」

友達じゃない、ということでFA？

「ああ、いいぜ」

何故かすっかり意気投合した様子の滝口くと寺崎くん。

「あ、良ければ塚田さんも一緒に」

と、わたしを見る寺崎くん。びっくりして戸惑っている内に先生が来てしまい、わたしの返答を待たずに寺崎くんが席へ着いた。

せっかくイケメン君と話すチャンスだったのに逃した……スズちゃん巻き込んで、今日は彼らと昼休みを過ごそう、そうしよう。

小学校の給食の時間にやるように、わたしたちは何故か机を合わせていた。学級委員とDQN女子の机が犠牲になったけれど、構わずに寺崎くんは言う。

「活動日は水曜と金曜。練習しないこともないけど、ライブがない時はみんな適当に遊んで。で、一つ上の先輩たちなんかは全然来ない」

「ねえねえ、何でこんな事になったの？」

と、スズちゃんに耳打ちされて、わたしは言う。

「さあ？ でも、こんなこと滅多にないでしょ」

「そうだけど……緊張するなあ」

と、向かいにいる男子二人をうかがう。

寺崎くんは滝口くんを口説くのに必死で、滝口くんは興味深そうに話を聞いている。……お弁当のおかずを盗んでも気づかないんじゃないだろうか。

「それが先輩達は外で活動してるらしくて。で、真面目にやってるオレが部長に任命されたってワケ」

「ふうん、他の奴らは？」

「えっと、同学年の奴らはオレ含めて七人いて二つに分かれてる。」

でも、オレじゃない方がすげーやる気ねえんだよ」

「どうやら、寺崎くんは本気で音楽をやっている人らしい。」

「新人生も全然見学来ないし、このままだと地味な部活のまま終わっちゃうんだ」

「そんなに地味だっけ？」

「地味だよ！ ライブを観に来てくれるファンはいるけど、バンドが現状三つなんて寂しすぎるだろ」

「で、おれが入ったらどうなるの？」

「オレのバンドが四人になる！」

「でもやつぱり、アホだ。」

「決定事項かよっ」

「だって今、スリーピースだぜ？ ギターだってヴォーカル兼任でさ」

「あれ、寺崎って何やってるの？」

「オレはベース」

と、誇らしげに笑う寺崎くんに思わずきゅんと来た。良いよね、ベース！

「ああ、それで三人目がドラムか」

「そうそう。だから、ぜひともオレのバンドに入ってくれよ」

「何てバンドだっけ？」

「シュガージャンキー」

「あ、ちよつと可愛い。」

「……うーん、ちよつと考えるわ」

「え、何で？ 入ろうよ、軽音部ー。つつか、入ってくれよー」

と、何を思ったのか滝口くんにもたれかかる寺崎くん。ああ、机の上に携帯電話出しておけば良かった……！

「ちょ、やめる。重い、重いって寺崎」

滝口くんに嫌がられてぱつと離れる寺崎くん。

「……あの、悪いんだけど、目の前でいちゃいちゃしないでくれる？」

複雑な思いでわたしがそう言うと、寺崎くんは笑った。

「はは、悪い悪い。だって滝口がつれないこと言うからさあ」

……これだけ明るくて人懐こいと、女子の多くは彼にときめくだろう。さわやかな笑顔は反則ですっ！

「おれはただ、考えるって言ったただけだろ。別に入りたくないわけじゃねえよ」

と、溜め息をつく滝口くん。

「あ、マジで？　じゃあ、良い返事待ってるな！　期限は今日の放課後で」

「短えよ！」

駄目だ、滝口くんがすっかり寺崎くんのペースにはまって突っ込み役になってしまっている。

「もうちょっと考えさせろよ」

「あはは、冗談だつてー」

「まったく、何なんだよ、お前は……」

まあ、楽しそうだから良いか。イケメン君も噂とは全然違って楽しい人だし、DQN女子の妬みさえ買わなければ大丈夫だろう。：

…ええ、妬まれないことを切に祈ります。

47・夕樹？

身体計測の結果を見て、僕は喜びを隠しきれなかった。

去年に比べて、身長が約六センチも伸びていたのだ。ようやく訪れた僕の成長期！……の、はずなんだけど。

通勤ラッシュの車内で溜め息をついてしまう。目線が前よりも高くなったのは明らかだし、その分だけ女の子たちが小さく見えるのも当然だ。

ただ、窓に映る自分自身を見ると、どうしても溜め息が出てしまう。

中学生の時は丸かった顔が、縦に長くなっている気がするのだ。つまり、大人の顔になってきているわけだけれど……言い換えると、童顔じゃなくなってきたということ。可愛いという言葉が、似合わなくなってきたということだ。

ようやく覚えたメイクに対する自信もなくなってきた、僕は悩んでいた。男子の成長期って、結構辛い。

電車が停止して扉が開く。僕と同じ制服を着た人が乗ってきたと思うと、目が合った。

「久しぶりだな、ユイ」

美音だった。

「ああ、久しぶり」

と、僕はちよつとだけ元気を取り戻す。美音は僕の隣へ来ると、

「そっか、お前こんなところ乗ってたんだな」

と、言う。

「うん、他よりも空いてるから」

僕は電車でぎゅうぎゅうになるのが嫌だった。潰されそうだし、息苦しい。だから、端っこの人が少ない車両に好んで乗り込んでいた。

「じゃあ、おれも今度からここにしようかな」

「良いと思うよ。っていうか……」

僕が彼の背中に視線をやると、美音は言った。

「ああ、ギター」

そして首を傾げる僕へ、美音はにこつと誇らしげに笑う。

「おれ、軽音部に入ったんだ。今日がその、活動初日です」

「……そ、そうなんだ」

存在が遠くなったように思えて、ちよつと寂しくなってしまう。

ギターを始めたと思ったら、軽音部にまで入ってしまうなんて。

「クラスの奴に誘われたんだよ。先輩たちいなくなつて廃部寸前だつて言うから、仕方なく」

「そつか……楽しくやつてるみたいだね」

美音つて、ちよつと近づきにくい雰囲気あるから、それは友人として素直に喜ばしかつた。

「お前は？」

でも、自分のこととなると、これもまた溜め息の出ること。

「一応、何人が友だちは出来たけど、なんかしっくりこないんだ。嫌ではないんだけどね」

「ふーん。だからそんなに落ち込んでるわけ？」

「え、落ち込んでるように見える？」

「うん」

即答されて、僕はがくりと肩を落とす。やっぱり、美音は僕のことをよく分かつている。

「えつと……それもあるけど、実は、靴が入らなくなっちゃつて」

「へえ、成長期だな」

「普通の靴じゃなくて、その……」

僕が言いにくそうにすると、美音がひらめいて笑う。

「ああ、そつちか。買い換えなきゃな」

「あれ、けつこう高いんだよ？」

「そつか。それは可哀相に」

「それだけじゃなくて、服もきつくなってきた、本当に困ってるんだ」

「やっちゃんみたいになったら、確実に女装は無理だろう。それなら僕は成長期と引き替えに、今の自分を維持したい。出来れば、一年前の自分を。」

「うーん、難しい問題だな」

と、美音が大して何も考えていない様子で言う。

「これ以上身長が伸びたら、今持つてる物全部台無しだよ」

そう言って、僕はまた溜め息をついた。

「成長期が終わるまで、しばらくやめようかな」

衝動的に着たくなつて、外に出かけたくなる日もあるだろう。けれども、あんなきつい靴では歩けない。

「ネットオークションとかで売ったら？」

「え、手放せつて言うの？」

びつくりして言い返すと、美音はさりとひどいことを言う。

「だって着れないんじゃない意味無いだろ」

それくらい、僕だって分かってるのに……！

「……売って、どうするの？」

「新しいの買う」

「無理だよ。っていうか、売りにたくない」

きつと美音には分からないんだろう。

「そうか。ワガママだなあ」

お気に入りの衣装が僕から離れていく気持ち。女装がだんだんと似合わなくなっていく気持ち。いつか、誰からも可愛いと言われなくなる気持ち。

「まあ、何なら塚田に相談すれば？ きつとあいつ、良いこと言ってくれるよ」

と、美音に言われてはつとした。そうだ、塚田さんなら僕の気持ちをきつと理解してくれる。

「そっか、そうだよ。ありがと、ミオ」

僕が表情を明るくすると、美音は若干引いた。

「……………お、おう」

「出来たら今日、休み時間に会いに行くね」

その言葉通り、僕は昼食を終えるとすぐに六組へ向かった。

廊下から教室の中をのぞき見て、見知った顔を探す。

「あ、塚田さん！」

廊下側の席にいた塚田さんがはっとこちらを振り向く。

僕はすぐに彼女の元へ歩み寄った。

「藤堂くん、どうしたの？」

「あれ、ミオから聞いてない？　ちょっと相談があるんだけど……………」
と、僕は室内を見渡して、塚田さんへ問う。

「ミオは？」

「校庭で遊んでるよ」

「そ、そっか」

いつも教室でうだうだしていた美音が外で遊ぶなんて……………本当に遠い。

僕は溜め息をこらえ、塚田さんのそばにいた女子をちらっと見た。

「えっと……………」

はやますすな

「あ、羽山鈴奈です。もしかしてお邪魔？」

と、首を傾げる羽山さん。僕はどうしようか迷ったけれど、今日はちょっとやめることにした。

「あ、ううん、気にしないで。っていうか、また今度でいいや」

「本当に？」

「うん」

塚田さんは納得していない様子で僕の顔をじっと見る。

すると、羽山さんが言った。

「ところであなたのお名前は？」

「え？　ああ、藤堂夕樹、です」

「彼女はいる？」

「え？」

急な質問に思わず戸惑った。

「スズちゃん、これが噂の、りのちゃんの彼氏さんだよ」

と、塚田さんがすかさずフォローしてくれて助かった。

「えー、嘘！？ うっわ、そうだったの？ うわー、うわー」

どうやら、羽山さんは彼女のことを知っているらしい。それにしても、この反応にどうリアクションすればいいんだろう？

とりあえず苦笑いをしていたら、塚田さんが羽山さんの袖を掴んで言う。

「スズちゃん、自重」

「はいっ」

塚田さんの方が立場は上にあるらしい。新しい一面を垣間見たな、と思った。

「人に聞かれたくないことだったら、メールか電話でもして。夜だつたらだいたい空いてるから」

と、につこり笑う塚田さん。さすが、よく分かってくれている。

「うん、分かった。じゃあ、今度メールするね」

と、僕は言葉を返して、教室へ戻ろうと扉へ向かう。

「ああ、りのちゃんとは一体どこまで行ってるのか聞きたかったのに！」

「やめなさい、スズちゃん。あの二人、まだまだ清いんだから」

と、後ろから彼女たちの声がしたが、僕はやっぱり苦笑いするしかなかった。

48・美音 ？（前書き）

1 / 16 一部修正。

48・美音？

五月晴れの下で思い切り遊んだら、久しぶりにいい汗をかいだ。これも他のクラスメートとすぐ打ち解けた寺崎のおかげだろう。彼が軽音部の部長を任されたのも、きっとその気さくな性格からだと分かる。

初めは苦手なタイプだと思ったけれど、実際に話してみると悪い奴じゃないし、面白かった。

「つつか、何でお前まで来るんだよ」

放課後、清掃を終えて音楽室へ向かう。

「だって気になるんだもん」

と、にこつとする塚田。好奇心旺盛なのはいいけれど、彼女は部外者だ。おれが不満を顔に表したら、塚田は前に行く寺崎に言った。

「見学するだけなら、構わないんだよね？」

「おう。つつか、女子ならいつでも大歓迎するぜ」

と、寺崎。そんなものなのかと思いつつ、放課後特有の賑わいを見せる廊下をぼーっと見やる。

グラウンドでは体育系の部活がそれぞれに活動をしていて、通り過ぎる教室からは時折人の声がする。一年の時はさっさと帰宅していて知らなかったことばかりが、校内にひしめいていた。

廊下の突きあたりに音楽室はあった。技術選択で美術を選択していたおれは、音楽室なんて数えるほどしか来たことがない。今年は塚田に誘われて音楽を選択したけれど、週に一度の授業だからまだ慣れていない場所だった。

音楽室の隣に音楽準備室、その隣に第二音楽室。

「金曜は吹奏楽部があっち使うから、オレたちはもっぱら第二に集まってる」

そうおれたちに説明をして、寺崎は第二音楽室の扉を開けた。
「部長のお出ましだぞー」

自分で言うか、普通。

「遅かったな、新！ 待ちくたびれたぞー」

「おはよう。後ろにいるのは？」

中にいたのは二人の男子だけだった。寺崎に似てお洒落な感じの奴と、普通な感じの奴。

「聞いて驚け、新入部員だ！」

と、あっさり言う寺崎。二人は目を丸くすると、普通な感じの奴がおれと塚田を見てはっとした。

「あ、えつと……見たことある」

がたつと椅子を立て、おれたちをじつと見つめ考える。彼が答えを出す前に、塚田が控えめに口を開いた。

「同じ図書委員、だったよね？」

ああ、そういえばそうだったかも。最初の集まりに参加して以来、ほとんど仕事してないから記憶は定かじゃないけれど。

「そうそう、やっぱりそうか」

と、納得した様子で彼も言う。ということは、彼とはすでにつながりを持っていたわけか。

「えつと俺、四組の三藤頼人^{みふじよりひと}」

先に自己紹介をしてきた三藤へ、塚田はにこつと笑って返す。

「六組の塚田依紗よ」

「あ、おれは滝口」

「ストープ！」

急に寺崎が大声を上げ、おれはびくつとしてしまう。先ほどまで様子を伺っていたはずなのだが、どうやら何か気に障ったらしい。

「知り合いなのは分かったけど、まずはオレの話を聞け」

「うん。で？」

と、三藤。もう一人の方はすっかり置いてけぼりにされて退屈そうだ。

寺崎は黒板の前に立っておれを指さした。

「あれが噂の新メンバー、ギターの滝口美音くんだ」

「……えつと、初めまして」

と、軽く会釈するおれ。

「そしてあちらにいるのはオレらのヒロイン、塚田さんである！」
意味の分からない肩書きで呼ばれて、塚田は反応に困っていた。
構わずに寺崎はもう一人の方を見て問う。

「質問は？」

「はい、二人とも部活入んの？」

その視線がおれに向いて、おれは答えを返す。

「いや、おれだけ。塚田はただの見学者」

「見てるだけなので、お気になさらず」

と、塚田も言う。

「ふーん」

どっちつかずの返答をして、そいつは立ち上がるとおれたちの前へ来た。否、塚田の前に。

「オレはシュガージャンキーの天才ボーカルこと平沼^{ひらぬまばん}万。よろしく」と、彼女に手を差し出す。ああ、やっぱり寺崎と同じ類の人間らしい。

「よろしく」

塚田が手を出した直後、寺崎が二人の間に割って入る。

「つつーか、来てるのお前らだけかよ？」

一瞬びくつとした平沼だったが、構わずにヒロインと握手を交わそうとした。すると、今度は三藤が言う。

「抜け駆けは駄目だってさ、万」

「別にオレはそんなつもりないっていうか、握手は礼儀の一つだろ
常考」

と、塚田の手を半ば無理矢理取る平沼。塚田はついて行けない様子で苦笑いをする。

「つつか何言ってるんだよ、頼人！ それじゃあオレが嫉妬してるみたいじゃねえか！」

「え、だってあまりにも……あ、殴らないで」

矛先が三藤に変わり、ぎゃあぎゃああと責め立てられる。満足したはずの平沼も加わって、隅に追いやられる三藤。良心が一人と騒々しいのが二人、といったところだろうか。……苦労するだろうなあ、三藤。

「で？」

ちよつと大きめの声で問いかけたら、三人がはつとした様子でおれを振り返る。

「全くついていけないから、まず説明をしてくれ」

三藤が壁際に積まれた椅子を二つ取出し、それらを中央へ、先ほどまで座っていた椅子と合わせて円を囲むように配置する。

「どうぞ、座って」

と、おれたちへ言う。

廊下側の壁の近くにそれぞれの荷物が無造作に置かれていたから、おれもそれに倣って鞆とギターを置いた。塚田も鞆を降ろして、三藤の用意してくれた椅子へ向かう。

寺崎が自分の分の椅子を用意して塚田の隣に着くと、三藤と平沼も椅子に座った。

「じゃあ、改めて。オレはベースの寺崎新」

「ボーカルアンドギターの平沼万」

「ドラムの三藤頼人」

今度は真面目に自己紹介をするシュガージャンキーの現メンバー。

「部員は他にもいるけど、今日は来てないらしい」

「音楽に対する情熱が足りねえんだよ、あいつら」

平沼がそう付け足したが、構わずに部長は言う。

「それで、滝口にはオレらのバンドに入ってもらっただけ……」
「ちらつとおれを見て、改まった口調で尋ねる。」

「主に聞くジャンルは？」

「え？ あー、えっと……」

おれはロックが好きだけど、そんな広い範囲じゃ答えにならないだろう。そうすると、おれは別に何でもいいっていうか。

「ロック？ パンク？ メタル？ J - P O P ？」

「え、つと……まあ、J - P O P は聞く」

寺崎の問いに答えたら、平沼がおれを見て尋ねた。

「V系は？」

「ああ、けっこう好き」

「よっしゃ！」

何故かガッツポーズする平沼。次に尋ねてきたのは三藤だ。

「洋楽は？」

「うーん、あんまり聞いたこと無いな」

「……そっか」

正直に答えたら、ちよつとがっかりされた。どうやら、今聞いてきたのはそれぞれの好きなジャンルらしい。

「オレらの敵だな。なあ、頼人？」

「うん、残念ながら」

と、寺崎と三藤が言つて、平沼が反論をする。

「何を言う、お前たち。これで二対二だぞ！」

と、おれの方に椅子を寄せてくる。何だかよく分からないけれど、あつちとこつちで敵対関係が築かれているようだ。

また言い争いでも始めるのかな、と思つて様子を見てみると、寺崎がころつと表情を変えた。

「まあ、基本的に流行の曲コピーしてるから、あんま関係ないんだけどな」

そして陽気に笑う。流行の曲というとJ - P O P が主だろう。つまり、敵とは口先だけで、バンド活動に大した影響はない……ってことか？

「オレもV系よく聞くんだ。よろしくな」

と、平沼が人懐こい笑みを浮かべておれに握手を求めてくる。癖なのだろうか。

「ああ、よろしく」

手を出してがっしりと握手をする。

「俺は洋楽しか聴かないけど、まともな人で良かったよ。これからよろしく」

と、三藤もにこつと笑って、おれも笑みを返した。

「ああ、こちらこそ」

やっぱり三藤は、寺崎と平沼の面倒を見るのに苦労しているようだ。おれも必然的に巻き込まれると思うと、とても嫌な感じしかない。慣れるまで大変だろうな……不安だ。

「ギターの練習は第一音楽室でやると良い。ここだと他の奴らが邪魔になるし、集中できないんだよ。あと、何かやりたい曲あったら、早めに教えてくれよな」

と、寺崎がちよつと部長らしいことを言った。いや、部長なのだから当然ではあるのだけれど。

「せめてライブの一ヶ月くらい前じゃないと、ちゃんと練習できないからな」

「そつか……そういや、次のライブっていつなの？」

おれが尋ねると、寺崎は言った。

「七月の末、定期公演の夏休みライブだ」

「これは近くの公民館でやるんだぜ」

「その次が文化祭でのライブになるよ」

「で、三月には一年の締めくくりとして、また公民館で定期公演するんだ」

一年間に三回、ライブをするらしい。で、その初めが七月、と。

「何やるか決まってるの？」

「まだ」

笑ってそう言った寺崎を見て、おれの胸に不安がよぎる。あと二ヶ月しかないのに、マジかよ……いや、マジなんだろうな。

おれは苦笑するより先に、溜め息をついた。

49. りの？

あたしの高校二年生は、とても大変な一年になるだろう。何故なら、新学期早々にクラスの女子と言い争ってしまったから。

そしてその結果、あたしが学級委員をやることになったから。

別に嫌ではないけれど、意外と仕事が多くて苦労しているのが現状。あたしの味方でいてくれる子が何人かいるから、どうにかやれている。

強いて言うなら、ろくに仕事をしない日直に苛々するだけであって、別に悪くはない。

放課後、黒板を綺麗にせずに帰ってしまった日直を呪いながら、一人で黒板を綺麗にした。

しばらく教室に残っているクラスメートもいたけれど、終わる頃にはあたし一人になっていて、ちょっと寂しかった。

溜め息をついてから、廊下に出る。

水道の蛇口をひねって、チョークの粉で白くなった手を洗う。水の音だけが周囲に響く。

制服のポケットからハンカチを取り出して、もう片方の手で水を止めた。

教室に戻って鞆を掴む。ようやく帰ることが出来る。

ふと見た時計は五時を指していて、時間を無駄に使ってしまった気がした。

また溜め息をついて、あたしは教室を後にした。

部活動に励む生徒の声しか聞こえない。廊下を行って、階段をマイペースに下りる。

今のクラスでは、いーしゃのように辛抱強くあたしを待っていてくれる友だちはいない。

ユイには、学級委員をやっていることすら知らせていない。あた

しが今、どんな風に過ごしているか知らせてしまったら、彼はきつとあたしのそばを離れないで助けてくれるから。

優しさは嬉しいけど、あたしは誰かにもたれかかるほど弱くはない。あたしは、一人でも平気。

一階へ着くと、床に座り込んで話し込んでいる女子たちが目に付いた。面識はなくても、苛々する。

気にせずに下駄箱へ向かい、靴を履き替える。

ユイがいてくれたら、と思うこともある。だけどそうしたら、やっぱりあたしは弱さをさらけ出してしまうだろう。そんなことで、ささいなことで、あの子を困らせたくはない。

校舎を出て、正門を目指す。知り合いにすら会わないのは寂しいけれど、安心もした。

誰かに愚痴を聞いてほしいと思わないこともないけど、聞かされる方は迷惑だろうから。家に帰って、お母さんに愚痴を聞いてもらおう。お父さんでも良い、弟でも。

校舎裏から、楽しそうに笑う声が聞こえてきた。見上げた三階の音楽室、何か話をしているとおぼしき男子生徒たちの姿。

ああ、やっぱり寂しいな。

学級委員の朝は早い。

朝練習に励む生徒しかいないような静かな時間に学校へ着き、鞆を教室へ置く。

ちらほらと登校してくる生徒たちを横目に職員室へ行つて、名簿と日誌を取って教室へ戻る。

もう一人の学級委員である男子は不真面目すぎて頼りない。だからあたしが一人でさっさと仕事をする。

教室へ戻ると、三分の一くらいクラスメートが登校してきているため、ちよつと賑やかだ。

「おはよう」

比較的仲良くしている女の子たちに挨拶をして、名簿と日誌を教

卓へ置く。

「あ、おはよー」

「おはよー」

その返答に満足して、あたしはちよつとだけ笑顔を作った。

彼女たちの中に割り込んで話をする日もあるけれど、今日はそんな気分になれず、すぐに席へ着いた。

鞆から筆記用具を取り出して、一時間目の授業に備える。

彼女たちは地味なタイプだけど、話してみるとけっこうしっかりしている。あたしを敵視する女子と相容れないから、あたしの側に着いているらしい。あたしも、あの女子たちと仲良くする気なんてないから、別に構わない。

中立の立場を取る女子も数人いるが、そういう子に限っていじめの対象になりやすいので、そこは学級委員として注意して見ているつもり。

男子たちは去年と似たり寄ったりな雰囲気で、どうも頼りない奴らが多いからあてにならない。

予鈴が鳴る頃、ほとんどのクラスメートが教室にいて、遅刻してくるのはいつものメンバー。

授業によつてはチャイムが鳴る前に先生が来るので要注意。気を抜いてぼーっとしていると、号令が遅れる。

今日はチャイムの後に来る先生だったから、様子を見てれば大丈夫。時には五分くらい先生が来なくて、職員室に行つて先生を探しに行つたりもする。そういう時つて、だいたいが自習になる。先生が何かしらの理由で休んでいたたり、早退していたりするからだ。

チャイムが鳴つて数分後、数学の先生がやってきた。

席へ着くクラスメートたち。もうすっかり慣れた号令をかける。

「起立！」

学級委員の何が嫌かっていうと、やっぱり仕事が多いところ。去年のように、のらりくらりとやり過ごせないところ。

何か問題があると、担任に呼び出されて話をしなくてはいけないこと。クラスをまとめなければいけないこと。

誰かが嫌がる仕事を、自分が引き受けなければいけないこと。

文化祭の前に予定されている修学旅行について、計画をしなければいけないこと。

50・登場人物まとめ 1

第四章開始時点での設定になります

<メインキャラクター>

滝口美音 / 173cm

・夜司の彼氏で同性愛者の少年。他人をいじめるのが好きだけど、基本は受け身。

・第四章より、軽音楽部に所属。シュガージャンキーのメンバーになる。

・愛機は青のレスポール。

藤堂夜司 / 183cm

・美音の彼氏で同性愛者の青年。頭は良いのに不真面目で時々へたれ。

・第四章における出番はほとんど無し。

藤堂夕樹 / 166cm

・美音の親友で夜司の弟。女装癖があって可愛い物が大好きな少年。
年。

・第四章より、成長期に直面し、悩み始める。

高内りの / 160cm

・美音と同じ中学の出身でいつも強気な少女。可愛ければ何でも好き。

・第四章より、自分のことについて改めて知り始める。

塚田依紗 / 153cm

・美音のクラスメート。普段は大人しい腐女子。イラストとピアノが趣味。

・第四章では、シュガージャンキーのメンバーと親しい関係に。

寺崎新 / 178 cm

・美音のクラスメート。軽音楽部の部長で誰に対しても気さくなイケメン。

・第四章より登場。シュガージャンキーのリーダーでベーシスト。

・愛機は黒のプレシジョンベース。

三藤頼人 / 177 cm

・美音と同じ図書委員。洋楽が好きな常識ある少年。何かと前向きで優しい。

・第四章より登場。シュガージャンキーのドラム担当。

平沼万 / 175 cm

・シュガージャンキーのヴォーカル&ギター。

・第四章より登場。V系が大好きな明るいお調子者。

・愛機は赤のストラトキャスター。

<その他・脇役>

藤堂朝子

・夜司と夕樹の妹。小学一年生になりました。

<第四章以降、出ないと思われる登場人物>

逢野咲真

・夜司の友人。

逢野真咲

・咲真の双子の姉。

< 今後、重要になるかもしれない登場人物 >

滝口美歌

・美音の姉。大学の寮に入っている。

51・夕樹？

朝子が食卓で宿題をやっていた。鉛筆を握って、もう片方の手で数を数えている。

「教えてあげようか？」

僕が声をかけると、朝子はこちらを見もせず言う。

「あーちゃん、ひとりでできるもん」

「そう」

小学校に上がってから、朝子は生意気になっていた。幼稚園で一緒だった友だちと離れて、新しい友だちが出来たおかげだろう。

ワークブックに数字を書き込む朝子をぼーっと眺めていたら、母さんが僕に声をかけた。

「ゆい、テーブルの上片付けて」

「はい」

台所の方から良い匂いが漂ってくる。今日は焼き魚かな。

朝子の勉強の邪魔をしないよう、テーブルの上に置かれた雑誌やお菓子の袋を片付ける。

台所へ行って母さんから台布巾を受け取り、食卓を拭きはじめた。

「朝子、テーブル拭くからどけて」

「……ん」

集中していたところを邪魔されてむっとした朝子が、隣の椅子にワークブックと筆記用具を置いた。

僕が食卓を拭き終わると、朝子は二つの椅子の上に寝そべるようにして宿題を続けていた。小さいって良いなあ。

「教えてあげようか？」

もう一度問いかけると、やっぱり朝子は首を横に振った。

「うつん、だいじょうぶ」

と、また指を使って計算をする。朝子の宿題が終わったら、見てやって、その後褒めてやろうと思った。それで今日は、一緒にお風

呂に入って遊ぼう。

再び台所へ行き、とりあえず三人分のお茶碗を棚から取り出した。この春、社会人になったやつちゃんはいつても何時に帰ってくるか分からない。

それからお箸も三人分取り出して、食卓に置きに行く。

がちゃつと玄関の方から音がしたので顔を出したら、やつちゃんが帰ってきた。

「おかえり」

と、声をかければ、やつちゃんは疲れ切った顔で「ただいま」と返す。

やつちゃんがすぐに部屋へ向かい、僕は台所へ行つてやつちゃんのお茶碗とお箸を取り出した。

「今日は早かったわね」

と、呟く母さん。壁に掛けられた時計は七時を指していた。

「そうだね」

相づちを打って食卓にそれらを並べ、朝子へ言う。

「そろそろご飯だよ」

「うん」

朝子はまだ宿題をやリたがっている様子だ。僕も昔はこんな風だったのかな、と思うと、不思議な気分になる。

母さんの手伝いをせつせとこなしていたら、私服に着替えたやつちゃんが食卓へ来た。

「おわったー！」

と、急に声を張り上げた朝子に、席へ着いたやつちゃんが言う。

「見てやるうか？」

朝子は少し考えると、ワークブックを差し出す。

「はい、どーぞ」

僕がやるうと思っていたのに、やつちゃんに取られてしまった。せめて寝めるのだけでもやりたいな。

「うん、よく出来てる。偉いぞ、朝子」

と、やつちゃんはワークブックから目を離してそれを返した。

「……うん！」

につこり笑った朝子の頭を、まるで犬でも愛でるように撫でるやつちゃん。あーもう、僕の仕事が……。

仕方ないので、僕はお茶碗にご飯をよそうことにした。

部屋に宿題をしまいに向かった朝子と入れ違いに、母さんがサラダの盛られた皿を運んでくる。

「珍しく早かったじゃない。どうしたの？」

母さんの問いにやつちゃんは欠伸をしてから答える。

「うん、何か仕事が早く終わって、飲み会もなかったから」

「今日くらい、さっさと寝たら？ お風呂も一番先に入っちゃいなさいよ」

一番、というと、朝子も一緒に入るのが家のルールだ。僕の予定が崩されそうになって、ちよつと冷や冷やした。

「え、朝子は？」

尋ねるやつちゃんに母さんが言う。

「大丈夫よ、その後すぐにゆいが入れてくれるから」

「え？」

そう言われると複雑で、僕は二人の方を振り返ってしまった。

「あら、嫌だった？」

「いや、別に……ただ、最初に入るもんだと思ってたから」

と、僕が返すと、やつちゃんは言った。

「じゃあ良いよ。俺と一緒にいるから」

普段は嫌がるくせに、どうしてやつちゃんはこうも気分屋なんだろう。

「いいよ、ゆつくりしたいでしょ？」

言いながらやつちゃんのお茶碗を前に置いたら、兄は何を思ったのか、笑った。

「ああ、たまには三人で入るか？」

「えっ」

絶対嫌だ。

戻ってきた朝子が席に座り、やつちゃんが朝子へ問いかける。

「今日と一緒に風呂、入ろうな」

目を丸くした朝子だが、褒められたのが嬉しかったのか素直に頷く。

「うん、いいよ」

ちよつとだけ上から目線、生意気だけど可愛い妹。

「まったく、なるべく早く上がるのよ」

と、母さんが注意すると、やつちゃんは楽しそうに返事した。

やつちゃんもたぶん、朝子と遊んで癒されたいのだろう。

そう結論づけて、僕は夕食の後、自分の部屋に閉じこもった。

二人がお風呂から上がるまで暇だ。宿題は学校で済ませてしまっ
たし、やることはない。

ベッドに寝そべって、枕元に置いたぬいぐるみたちを見つめる。
幼い頃からずっと一緒に居るせいで、どれもこれも薄汚れていた。
中でもお気に入りだった猫のぬいぐるみに手を伸ばし、足を掴ん
で引き寄せる。久しぶりに抱きしめると、何だか安心した。普通の
男の子は、きつとこんな風にすることってないんだろうな。

ふと思い出して、僕は上半身を起こした。充電中の携帯電話を床
から取り上げ、すぐにメール作成画面を出す。

塚田さんに相談しなきゃいけないことがあるんだった。

ぬいぐるみを抱いたまま、ぴぴっとボタンを打って相談内容を書
いた文章を作り、一度読み直してから送信する。

返信が来るまでまた暇になった。ぬいぐるみの頭に頬を寄せ、そ
のままバたっとベッドへ横になる。

携帯電話から手を放すと、すぐにライトが光った。思ったよりも
早い返信に、僕はちよつと喜んだ。

すぐに取り上げて画面を開く。

『靴は諦めるしかないけど、服ならリメイクしちゃったら良いんじ

やないかな』

リメイク？

続きの文章には、こう書かれていた。

『めんどくさいから、電話して。詳しく話すよ』

塚田さんは絵文字を使っていたけれど、内容はとってもさっぱりしていた。りのさんと似て、彼女にも男らしい部分があるようだ。ドキドキしながら塚田さんの電話番号に発信すると、すぐに出てくれた。

「あ、あの、どういうこと？」

『えっと、リメイクっていうのは作り直すって事でね、着られなくなった服をもう一度着られるようにするの。わたしもちょっとだけやったことあるんだけど、お家にミシンはある？』

「う、うん」

『じゃあ、できるね。藤堂くんの持つてる服にもよるんだけど、裾を伸ばすのなら簡単よ』

塚田さんはやっぱりすごい。いろんなことに精通している。

『服そのものがまったく入らないなら、それを使って新しく服を作っちゃうの。まあ、これはそう簡単にできるものじゃないし、最初は簡単な物を作って練習しなきゃ駄目ね』

「そうなんだ」

『あ、ただとお母さんがミシンやるなら、頼んでみるのもいいかもね。ちゃんと丈を測って、どんな服を作りたいか図案も描いて』

「……けっこつ、めんどくさい？」

苦い顔を浮かべたら、塚田さんは言った。

『うん。慣れれば簡単だろうけど、わたしは挫折したよ』

リメイクにはそうとうな時間と労力がかかりそうだ。

『でも、着られなくなった服をもったいないと思うなら、それくらいしか活用する方法はないと思うな』

「そうだね……ごめんね、塚田さん」

『うつん、謝らないで。わたしこそ、良いアドバイスできなくてご

めんね。もし中古で売るなら、良いお店知ってるから紹介するよ」
「うん……、ありがとう。もう少し、考えてみるよ」

塚田さんの優しさに感謝しつつ、僕は心の中で溜め息をついた。
やっぱり、成長期に抗うのは難しいようだ。

52・美音？

図書室は退屈なところだと思っていたけれど、実はそうでもなかった。

「頼人は何で委員になったの？」

「負けたんだ、じゃんけんで」

普段は部活があるからと仕事をさぼっているおれだけど、集まりに参加した時くらいはついでに仕事する。

「あー、なるほど」

「実際にやってみたら面白かったから、結果オーライだけどね」

と、頼人は手にした本を棚へ戻していく。

何冊もの本を抱えたおれは、腕が痛かった。パートナーが頼人だから楽しくやっているけれど、何気に重労働だ。

頼人がおれの抱えた本を上から二冊ほど手にとって、棚へ戻す。

「塚田さんや美音とも友だちになれたし、負けて良かったよ」

ははっと笑う、新や万とはまた別の意味で爽やかな笑顔。

「そうだな、おれも別に後悔はしてない」

塚田の言ったとおり、委員会は規則がゆるいから気が楽だし、たまにこうして仕事をするだけで良いなら喜んでやる。

「あれ？ でも美音は、何で塚田さんに誘われたわけ？」

「え？ あー……」

ただ仲が良かっただけだとおれは思うが、普通の奴らがそれで納得しないのは当然で。

「去年も同じクラスで、あいつの友だちがおれと同中で、んで、そいつがおれの親友と付き合ってる、から？」

「……ややこしいな」

「ごめん」

頼人がまた本を取り上げ、腕の痛みが軽くなる。

「つまり、ただの友だちって事？」

「んー、まあ、そういうこと。出席番号も並んでるから、誘いやすかったんじゃない？」

おれがそう返すと、頼人は頷いてくれた。
「なるほどね」

変な誤解をされていそうで冷や冷やしたが、それを口にしたらさらに誤解されてしまうだろう。

気になりつつも、おれは我慢して本を抱えなおした。

軽音部に入ってから、おれのギターに対する考え方が変わってきた。
ていた。

前は、普通に弾けるようになれば、それで良いと思っていた。
今は、みんなと音を合わせて一曲通せるようにしたい。それを、他の人たちに聞いてもらいたい。

「なあなあ、スピーカーってバンド知ってる？」

万は目立ちたがり屋で、中学の頃からV系にはまってる。

「いや、知らない」

「むちゃくちゃ好きなんだけど、三月に解散しちゃったんだよ」

「へえ」

おれの知らないどころか、塚田さえも知らないようなバンドをいくつも知っていて、将来はV系バンドをやるのが夢らしい。

「夏には何かやるかもって言ってたけど、全然情報なくてさあ」

「本命だったの？」

「もち本命。大本命」

と、真面目な顔で返してくる。

おれはとりあえずコウノトリが憧れただけど、万の感覚は塚田と近い。

「別のバンド追いかければいいじゃん」

「やだ。オレはあの人のギターが好きなんだ。っつか、あの人が好き」

「誰」

「リーダーの、にーやさん。ちょっと待て、画像あるかも」

と、万は携帯電話を操作し始めた。少し待たされてから、おれの方に画面が向けられる。

「見づらいけど、この右の人」

それはどこかに飾られたと思われるポスターだった。真ん中に女形の可愛い顔したヴォーカルがいて、左に金髪の色白な男性、右に長い黒髪でスタイルの良さそうなイケメンがいた。

「テライケメン！」

そう言っ て目をきらきらさせる万。どうやら、本気で好きなようだ。おれの思うそれとは違うと思うけど。

「……三人だけなんだ？」

同意するのを遠慮して質問をぶつけたら、万は携帯電話を自分の方に戻して言った。

「ドラムがサポートだったからな。噂では、正式メンバーに入れるとかないとか、うやむやで終わった」

「そっか……色々あるんだな」

と、おれは遠くの方を見て呟いた。

まだあれから二週間くらいしか経ってないが、万は良い奴だった。共通点もあるし、男に憧れる男を素でやるから、何となく気が楽なのだ。

恋愛対象と憧れは違うと分かってはいるが、万といると落ち着くV系で誰がかっこいいとか、ギターが上手いとか、そういった話が出来るから、すごく楽しかった。

「新っていうのは、おれのクラスメイトでベースやってるんだけど、いつも一緒に飯食ってるんだ」

母さんは適当に笑った。

「良かったじゃない」

だからおれは、話を続けた。

「新は自転車通学だから、一緒に帰る時は駅まで乗せてってもらっ

の」

「そう」

母さんはおれに興味がないようだ。

「ご飯出来たから片付けて」

「……うん」

夜司に話したら、どんな風に相づちを打ってくれるだろう。毎日楽しくて仕方ないと言ったら、夜司は嫉妬してくれるだろうか。

「十月の修学旅行だけど」

テーブルの上を片付けながら話題を変えたら、母さんはこっちを見なかった。

「大阪行くから」

本当は話をしたいのに、ぶっきらぼうな口調になってしまった。「そう」

溜め息をつきそうになって、おれは携帯電話を手にとった。すぐに夜司へメールを打つ。

『今日、会える?』

返信はいつも同じ。二時間後くらいに来る『今まで残業してた。ごめんな』という文章。社会人になって忙しいのは分かるけど、春休みの終わりに会ったきり、全然会えてない。

電話はこの前の日曜日にしたけれど、そんなことで満足なんてできなかった。ゴールデンウィークだって、会おうと思えば会えたのに。

「明日は美歌のところに行ってくるから、留守番お願いね」

何かが変だってことくらい、おれは知ってるつもりだよ。

53・依紗？

月曜日は退屈。体育が二時間続けて入ってるから、すごく嫌。

火曜日は音楽の授業があるから楽しい。教室移動の際には、藤堂君やりのちゃんともすれ違える。

水曜日は軽音部があるから楽しい。わたしはただみんなを見ているだけけど、放課後が待ち遠しくなってしまう。

木曜日はピアノのお稽古。スズちゃんや滝口くんを置いて、さつさと家に帰る。

金曜日はまた軽音部。だけど図書委員の仕事があるから、音楽室に行けない。仕事が終わって時間が合えば、寺崎くんたちと合流して途中まで一緒に帰る。

そんな様子を目撃されたのか、最近DQN女子たちの視線を感じる。

寺崎くんは相変わらず彼女たちと普通に会話を交わすけど、何だか心配だ。

「はい、この前言ってたCD」

と、朝からわたしに声をかけてくれる寺崎くん。

「あ、ありがとう」

なるべく自然にCDを受け取ると、すでに登校していたDQN女子たちの視線が背中にあたる。

「歌詞とかもコピーして入れといたから。ちなみにオレのお気に入り」

と、べらべらしゃべり出す彼。おしゃべりな男の子は嫌いじゃないけど、あんまり得意じゃない。寺崎くんは目の保養になるから、許す。

「洋楽って難しそうに思えるけど、一度聞いたらマジではまるから」
「うん、分かった。ありがとう」

「じゃあ、また後でな」

そしてにつこり笑う寺崎くん。彼は本当に、誰に対しても優しい。わたしの背中を見つめていた女子たちが、こそこそ何かを話し始める。

「マジ、調子乗ってるんじゃない？」

「うざいよねー。ちよつと可愛いからって、ぶりっこして」
聞こえてますけど。

「つつーか、生意気なんだよ」

同い年に生意気って言われても……あーあ、うざい。いつそのこと、寺崎くん通して大人しくするよう言ってもらおうかな。迷惑かけるだけか。

「いーしゃ、大丈夫？」

「え？ 何が？」

聞き返したら、スズちゃんは言葉を濁しておかずの唐揚げを見つめた。

「そのー……だから、えっと、寺崎と、あんまり仲良くしない方が
良いんじゃないの？」

と、氣遣うようにわたしを見る。どうやら、スズちゃんも気づいていたらしい。

「そう言われても、寺崎くんの方から近づいて来ちゃうから、どう
しようもないでしょう」

「うーん……そうだよねえ」

と、スズちゃんは唐揚げを口の中に放り込んだ。

お母さんの作ってくれたおにぎりを食べながら、具が梅だったことに気づく。すっぱい。

「やっぱりさ、いーしゃは誰か好きな人いないの？」

「いないよ」

「寺崎は？」

「ただの友だち」

「それが駄目なんだって！」

梅の種をお弁当箱の隅に吐いて、わたしは返す。

「だって、それ以上でもそれ以下でもないもん」

「だけど、それだとあいつら納得しないよ？ 女は怖いんだからね」

「知ってる」

何でもない振りをしておにぎりを食べる。

スズちゃんが溜め息をついた。

教室の隅、ほとんどの生徒が食堂に集まっていて静かなお昼時。

「悪口だって、いーしゃに聞こえるように言ってるじゃん」

「うん」

「……あーもう、いーしゃは危機感ないんだから」

ないわけじゃなかった。ただ、こっちが何かしらの行動を起こして、対立構図が完成してしまうのが嫌なだけ。

「どうにかしないと。誰か先生に相談するとか」

「無理でしょ。うちの担任、弱いし」

スズちゃんが唸った。

「じゃあ、保健の先生とか」

「わたし、あの人よく知らない」

「学年主任とか」

「体育系の先生は嫌い」

我慢すればいいってものでもない事くらい、分かってた。

「じゃあ、どうすりゃいいのよ？」

「堂々してる。何か言われたり、何かされても無視」

「……それだと、逆にエスカレートしない？」

「そう？」

と、わたしが首を傾げたら、スズちゃんは頷いた。

「うん。だってあいつら、ガキだし」

「……じゃあ、程々に相手にする」

あーいうDQN女子って、構ってやらないとむっといじめてくるんだった。でもわたしが相手すると、逆なでしちゃんいそうで不安な

んだよね。

「それが良いよ。って言っても、根本的解決にはならないんだけどなあ」

と、不満そうにするスズちゃん。わたしのことを心配してくれるのは、素直にありがたかった。

「万が一、何かあったら、その時はよろしくね」

わたし、こう見えても強くないから。

「よろしくって……まあ、うん。そうだね」

と、呆れたように息を吐くスズちゃん。分かってくれてはいるようだけど、わたしはスズちゃんがそこまで強い人だと思っではいない。むしろ、何か起きたら一目散に逃げ出すタイプだよな。

「それよりも、もうすぐ中間試験でしょ？ スズちゃん、大丈夫？」

「え？ あー、微妙かな」

「ノート貸そうか？」

「……うん」

54・美音？

午後のホームルームだった。その前の授業ですっかり熟睡していたおれは、ぼーっとしていた。

「じゃあ、五人か六人に分かれて班を作って下さい」

学級委員の指示にクラスメートたちが席を立ち始める。

「美音！」

名前を呼ばれてはつとする。いつの間にか新がおれのそばに来ていた。

「ああ」

適当に返事をしておれも席を立つ。おれらはいつも一緒だった。この場面でも、そうなるのが当然だった。

ざわざわする教室の中、新がよく一緒につるむクラスメートたちの名前を呼んだ。

「一緒に組もうぜ」

と、教室の隅にいた彼らと合流する。新のおかげで増えた友人たちなかまは、おれを含めて八人。

「二つに分かれなないと駄目じゃね？」

一人が言い出し、全員が頷く。半分にしたら四人で一人足りない。ので、二人か三人が抜けなければならぬ。

「よし、グーパーで分かれようぜ」

「それじゃ駄目だろ。普通にじゃんけんで負けた奴でいいでしょ」

「そうだな、そうしよう」

公平な手段だった。おれもこのメンバーだったら、誰と一緒になつたって苦ではない。たまには、新と離れるのだって面白いだろう。「いやいや、じゃんけんしてたらキリねえよ」

「だからグーパーだって言ってるだろ」

「そっか……じゃあ、グーパーで」

結局グーパーになった。

全員が手を出す準備をし、中心である新が掛け声をかける。

「グーパー、ジャス！」

一斉に手を出すと、半々だった。沈黙の後、新がまた口を開く。

「グーパー、ジャス！」

めんどくさいのでさっきと同じくグーを出した。結果はグーが五つでパーが三つだった。

「よし、決まりだな」

と、新が言う。パーを出した三人が顔を合わせ、その内の一人が他のクラスメートたちを見る。

おれはまた新と一緒にだった。ちょっと期待したのに、何だか残念だ。

「決まったら前に来て報告しろよ」

と、担任教師が言う。そちらを見た新は、すぐさま前方へ向かって行った。あいかわらず行動力のある人だ。

「でも、いつもとあんま変わらない結果だったな」

おれの隣にいた奴がそう言って、他の二人が相づちを打つ。おれは構わずにあくびをした。

「他の奴らと組むよりマシだろ」

新がいるおかげで、おれらはクラスの中心的存在として認知されていた。分かれた三人が学級委員のいるグループと話をしている。

「気、遣わなくて済むもんな」

ありがたいことに、おれは影のいじめっ子として役を果たせていた。言うなれば、リーダー格の新的補佐的な立ち位置だ。

「あっち、大変そうだしな」

「うん」

嫌いじゃないけど、学級委員といたら堅苦しくなりそう」

学級委員が自ら紙に班員の名前を書きに行き、すれ違つように新が戻ってくる。

「次はバスの席決めろって」

「ああ、じゃあ俺、江川と組むから良いよ」

と、一人が言い、自然とペアが決まる。おれはやっぱり新の隣だ。
「よし、じゃあさっさと決めちゃおうぜ」

「こーいうのは早いもん勝ちだからな」

ぞろぞろと教卓の方へ歩き出す。その一番後ろを付いて行きながら、おれはふと塚田と羽山が隅で二人ぼっちになっているのを見た。女子は男子に比べてグループ意識が強いから、上手く班が決まらならしい。

「美音、お前どっち？ 窓際？」

名前を呼ばれてはっとし、おれはすぐに新に顔を向けた。

「ああ、えーと」

「あとでコピーさせて」

「え、また？」

来週から始まる中間試験に向けて、第二音楽室で勉強会が開かれていた。

「だって忙しいんだもん」

と、開き直る方に頼人が呆れ顔を向ける。

「それは知ってるけど、それじゃあ大学行けないんじゃない？」

「いーよ、オレ専門行くから」

その言葉が本気かどうかは分からなかった。けれども、万は高校を出てからも音楽は続けると言い切っていた。

「社会は？」

「それもコピーさせて」

「国語」

「あ、それも」

全くやる気の見えない万。これには、さすがのおれも呆れてしまった。

「万を見てると、自分がすごく真面目に思えてくる」

そう独り言を言つと、隣にいた新が顔を上げた。

「オレも最初、同じ事思ってたぜ」

そして再び英語の教科書に目を落とす。

おれは今までの授業で配られた社会のプリントを整理する作業に戻った。もらったら適当にノートの間に挟むだけなので、順番が狂っていたり、紛失してしまったりして、ごちゃごちゃになっていることがよくあるのだ。

歴史の範囲の再確認的な意味も込めて見ていくと、今回はきちんと最初から最後まで揃っていた。

「あ、ノート、教室に置いてきたっばい」

鞆の中を探っていた頼人が言い、万が不満げな声を出す。

「えー、さつさと取ってこいよ」

「言われなくても行くよ」

がたつと席を立つ頼人。万は歩き出す彼の背を見ていたが、すぐにぱつと立ち上がった。

「やっぱオレも行く」

「え、何でだよ」

「暇だから」

相変わらず馬鹿げたことを言いながら、二人が音楽室から出て行く。

そして室内が静かになると、新が言った。

「なあ、聞きたいことあるんだけど」

「何？」

おれが顔を向けると、新はおそろおそろといった様子でおれを見た。

「お前、塚田さんと付き合ってるの？」

「は？」

突拍子のない質問にびっくりしてしまう。笑いながらおれは答えを返す。

「付き合ってねえよ。っつか、あいつとはただの友だちだって」

「……そうか」

どこか納得していない様子で視線を戻す新。頼人にも突っ込まれ

たけれど、やはり男女の友情はなかなか理解されないものらしい。

「そーいう気持ち、ないの？」

「ない。全然ない」

プリントを束にしてまとめ、右上をホチキスで止めた。

「互いに？」

「だろうな。だってあいつ、ただ目の保養がしたいだけだし」

彼女の言葉を借りて返すと、新は笑うこともせず息を吐く。

「……そうか」

何だか様子が変わだ。まさか、あいつに惚れてるわけじゃないよな？
聞くべきか迷って声をかけてみる。

「あー、えっと……新？」

「……」

新は何も喋るつもりがないようだ。仕方なく諦め、俺は作業に戻る。

あんな腐女子、付き合ったら大変なことになるぞ。それがなければ良いかもしれないが……ノンケの気持ちなんて、全然分からなかった。

55・新？

答えを鵜呑みにするなら、安心だ。二人の間に何もなければ、それがオレにとつて一番ありがたい。

本当はいつも一緒に居たいと思うほど好きだけど、オレだって人間だから、あからさまな行動は取りたくない。

試験が終わって昇降口へ降りると、万と頼人に偶然遭遇した。

「お前らも帰るところ？」

「おう」

返事をした万は、一緒に帰るのが当然であるといった様子で先に下駄箱へ向かう。

たくさんの生徒でざわめいていた。オレも下駄箱からスニーカーを取り出して履きかえた。

「自転車取ってくる」

と、後ろにいた美音に言っで自転車置き場へ。

そこもたくさんの生徒で溢れていて、スムーズに自転車を取り出せなかった。

校門の前で待っていた美音は、先に着いていた万や頼人と話をしている。

「ほら、乗れよ」

と、いつものように美音の前に自転車を止めて、後ろに乗せた。

「さんきゅ」

と、笑う美音。

そして自転車をこぎ出そうとしたら、後ろを向いた頼人が手を上げた。

「塚田さん！」

校舎から出てきた彼女が、羽山と別れてこちらへ寄ってきた。いつものメンバーが揃った。

「駅まで送るよ」

「本当？　ありがとう」

と、ちゃっかり塚田さんを後ろに乗せる頼人。こうして帰るのはもう三度目になるが、頼人の場合はわざとらしくないから羨ましい。「じゃ、行くか」

万が先頭を切って走り出し、すぐにオレたちも走り始めた。

五月も下旬に近づいて、何となく空気が湿っぽくなっていた。

「そっいや、まだ早いかもしれんねーけどさ」

と、万が少し速度を落とし、頼人の隣へ付けた。

「文系と理系、どっち選択する？」

二学期に入ると、授業は文系と理系で異なる仕組みになっていた。早くも進路を決めろ、と言われていているようで考えなくなかった。

「俺は理系かな」

「わたし文系」

と、二人が答えた。万がオレたちを振り向く。

「お前らはー？」

「あ、おれ理系」

と、美音。俺たちの中では一番数学が得意だから、その選択に疑問はなかった。

オレはまだ決められずにいた。どちらかというとな文系なオレだけど、科学はそれほど嫌いじゃない。

「オレもやっぱ理系かな」

「そっかあ。じゃあオレ、素直に文系行くわ」

と、万。何が素直に、だ。

「おい、楽しようとするなよ！」

オレがそう突っ込むと、万がははつと陽気に笑う。

「だってオレ、大学受験しねーもん」

でも今の時代、大学に行くのはほぼ当たり前だ。それともやはり、万は専門学校に行く気なんだろうか？

「文系だと、古典とか漢文やるんじゃないかなかったっけ？」

と、頼人が口を挟む。

「げ、何それ。じゃあやめようかな」

「大丈夫、わたしが教えてあげるから！」

と、楽しそうに言う塚田さん。

「やった、じゃあやっぱ文系でいいや」

「そんなことで決めちゃ駄目だよ、万」

「別にいいだろー。だったらお前も文系にすれば？」

「断る。数学勉強しとかなないと、受験で苦しめられるからね」

頼人は進路をちゃんと考えていた。行きたい大学もすでに何校か調べていると言うし、オレとは大違いだ。

「あー、そうだよな。でもわたし、大学と専門、どっちが良いか分からないの」

と、塚田さんが言った。すると、ふいにオレの後ろで美音が呟く。

「おれも、理系には行くつもりだけど、全然考えたことねえや」

それからすぐに尋ねてきた。

「新は大学行くの？」

「え……まあ、親には行けって言われてるけど」

大学といっても、私大に行くのか国立に行くのか、学部や学科などを含めると選択肢はたくさんある。どれを選べばいいかなんて、今のオレには分からない。

「そっか。おれは……」

美音が空を見上げている気がした。すぐそこにあるはずの距離が、今は何故だか感じられない。近すぎて、遠い。

「あ、でもおれ、ギターは続けたいな！」

と、明るい調子で美音が叫ぶ。　　そうだよな、オレだって音楽は続けるつもりだよ。それが趣味に終わるのか、仕事になるかは分からないけれど。

「お前、すげー上手くなったもんな。良いと思うぜ！」

「うん。もっと上手くなるよ、おれは」

笑って、空白の未来に思いを馳せて、今をただ楽しんだ。

俺たちには思っているよりも、時間がない。あつという間に過ぎていく時間を楽器の練習にあてて、勉強して、授業を受けて、くだらない話で盛り上がって、不安と怯えてそわそわとやり過ごす。

それでは駄目だと分かっているつもりだから　オレは悩んでいた。

56・夕樹？

今日は一ヶ月ぶりのデートだった。

りのさんと会う時は出来るだけ可愛い格好で、というのが今までの僕だったのだが……。

「今日は普通なのね」

開口一番にそう言われて、ドキツとした。

「うん、ちよつと今日は……」

と、僕は下を見た。ぎゅつと僕の手を掴んで離さないのは、僕の妹。

「えーと、朝子ちゃんだっけ？ 初めまして」

りのさんが腰をかがめてにつこり笑う。すると朝子は僕の影に隠れるようにして、ちらつと僕の顔を見た。

「大丈夫だよ、朝子。ほら、ちゃんと挨拶して」

僕がそう言つて促すと、朝子がようやく口を開く。

「はじめまして、あさこです」

「あたしはりの。よろしくね」

と、朝子の頭を撫でるりのさん。頼りになる優しいお姉さん、という印象だ。

僕はどうしようかと考えて、ひとまず事情を説明することにした。「ごめんね、りのさん。今日は両親が出かけてて、やっちゃんは何か会議の資料作るって部屋に引きこもって、朝子の面倒見る人がいなくてさ」

「あら、そういうこと。でも良いじゃない、たまには」

と、腰を上げるりのさん。気を遣われているのだろうか、何だか後ろめたい。

「本当にごめんね。それで、えつと……どこに行こうか？」

気を取り直して彼女へ尋ねる。りのさんは少し考えると、朝子に手を差し出した。

「とりあえずランチしましょう」

朝子は疑わしげにしながら、りのさんと手を繋いだ。

「三人ならファミレスが良いわね」

と、どこか楽しそうに言うりのさん。そんな彼女があまりにもしつかりしていて、僕も兄としてしつかりしなきゃ、と思わせられた。「そうだね、朝子もお子様ランチ食べたいよね？」

「……うん！」

僕の方に顔を向けて頷く朝子。その様子は可愛いけれども、りのさんにはまだ抵抗がある様子だ。

そして三人で歩き始めると、りのさんがふいにくすつと笑った。

「親子みたいね、あたしたち」

「え？」

子どもを間に挟んで歩く夫婦は確かによく見る。けれども、急にそんなことを言われてびつくりしてしまった。

「今日は仲良くしましょうね、朝子ちゃん」

「……」

「あら、お返事は？」

「……こちらこそ、なのです」

やはりまだ、朝子は緊張しているらしい。僕が思わず笑い声を漏らすと、二人の視線がこちらを向いた。

「そんなに緊張しなくて良いよ、朝子。りのさんも、あんまり気遣わないで」

そうしてにこつと微笑むと、りのさんにもっこり微笑んだ。

「そうね」

と、朝子の手を強く握って、離さないようにしてくれる。まだ僕たちは軽いキスまでの清い交際しかしていないけれど、その内にもつと先まで進めたら……いいな。

中間試験からようやく解き放たれた日の昼休みだった。

昼食を終えると、普段は教室で友達と他愛のない話ばかりして過

「ごす僕だったが、今日は事情が違った。他のクラスの人たちが教室に雪崩れ込んできて、がやがやうるさかったのだ。静かな方が好きな僕は、ちよつと嫌だなと思っていた。」

「今日はやけに騒々しいな」

と、一緒に昼食をとっている友達の一人が言い出し、もう一人が「あつ」と、声を上げる。

「職員室行くの忘れてた。やべー、行ってくる！」

返却されたばかりの答案用紙を取り出し、本来の点数を取り戻しに慌てて廊下へ出て行ってしまった。相変わらず元気な人だ。

残された僕たちは顔を見合わせた。

「暇だね」

「うん」

友達は何か考える様子を見せると、席を立った。

「ちよつと図書室、行こう」

「え、何で？」

「暇だから」

僕もすぐに立ち上がって、彼の後を追った。

校内はどこも賑やかだった。グラウンドではサッカーをしている男子生徒の姿が見えるし、廊下の端々では女の子達がきやあきやあと黄色い声で盛り上がっている。

図書室に近づくにつれて人氣が少なくなっていき、図書委員でもある友達が慣れた様子で図書室の扉を開けた。

他の教室とは違う独特の匂いが鼻につき、カウンターでは委員の生徒が本を読んでいた。

きよろきよろと周囲を見回しながら、友達は奥の長いすが置かれている方へ足を進めていった。何か探し物だろうか。

「あ、いた」

と、ちよつと嬉しそうに友達が声を上げると、その視線の先に見覚えのある人がいた。

「あら、三藤くん。それに、藤堂くんまで」

塚田さんだった。目を丸くさせて、それまで読んでいた本を閉じる。

「あれ、知り合い？」

と、僕を振り返る友達。すると塚田さんがにつこり笑って答えた。
「去年、同じクラスだったの。むしろ、二人が仲良いなんて知らなかったよ」

「ああ、俺も二人が知り合いなんて知らなかったし」

と、笑う友達。っていうか、僕には二人の関係性が見えないんだけど……あれ、そういえば。

「二人は、同じ図書員だったっけ？」

僕が尋ねると、彼が言った。

「それだけじゃないよ。塚田さん、よく軽音部に来るんだ」

「……あれ、えっと、じゃあもしかして？」

と、塚田さんに助けを求めてしまう僕。

「そうそう、滝口くんとも仲良いんだよ。一緒にバンドやってるくらいだもん」

「あれ、藤堂って美音とも知り合い？」

今度こそ目を丸くする三藤くん。むしろ驚きなのは僕の方だ。僕でさえミオってあだ名で呼んでいるのに、名前を呼び捨てだなんて……！

「その、何ていうか……僕の親友、だよ」

あまりの出来事に頭が混乱していた。まさかそんなところでみんなが繋がっていたなんて、衝撃的すぎる。

「へえ、意外」

と、呟く三藤くん。意外なのは僕の方だってば！

「ところで、図書室に何の用？」

塚田さんがにこつと首を傾げて問うと、三藤くんは三十センチほどの距離を置いて彼女の隣へ腰を下ろした。

「暇だったから来てみたただけだよ。塚田さんこそ、本当に図書室で過ごししてるんだね」

「まあね。教室はちよつと、居づらくて」

僕は友達の隣に座りつつ、自分は場違いなんじゃないかと考え始める。塚田さんも三藤くんも、すっかり仲良しの様子で僕だけ置いてけぼりな気分だ。

「いつも一人なの？」

「んー、そうね。スズちゃん連れてくることもあるけど、図書室に来るとすぐ本が読みたくなっちゃうから」

と、笑う。三藤くんはそんな彼女に相槌しながら笑い返して、僕たちという時よりも楽しそうに話をする。

三藤くんはしっかり者で頼りがいがあり、優しくて大人っぽい。友達のいない僕に声をかけてくれた最初の人で、修学旅行でも一緒の班だ。そんな彼は軽音部でドラムを叩いている。そして図書委員。趣味は洋楽。僕からしたら共通点が少なくて、すごく遠い人。

一方の塚田さんもしっかりしていて、好奇心旺盛で面白い人。いろいろなことに精通していて、僕の趣味にも寛大な良きアドバイザー。ただ、そんな彼女と三藤くんが意気投合している様子はすごく意外だった。

そして予鈴が鳴り、塚田さんと別れて教室へ戻る最中に三藤くんが言う。

「塚田さんって、可愛いよね」

「え、うん」

僕はりのさんの方が可愛くて大好きなのだけれど、と考えたところではつとする。

「まさか、この前言ってた気になる子って……？」

三藤くんはにこつと笑った。

「さあ、どうだろうな」

……塚田さんにもようやく、春到来か。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9481n/>

パッション・アイデンティティー

2011年2月12日11時25分発行